

# 学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学 2022 春

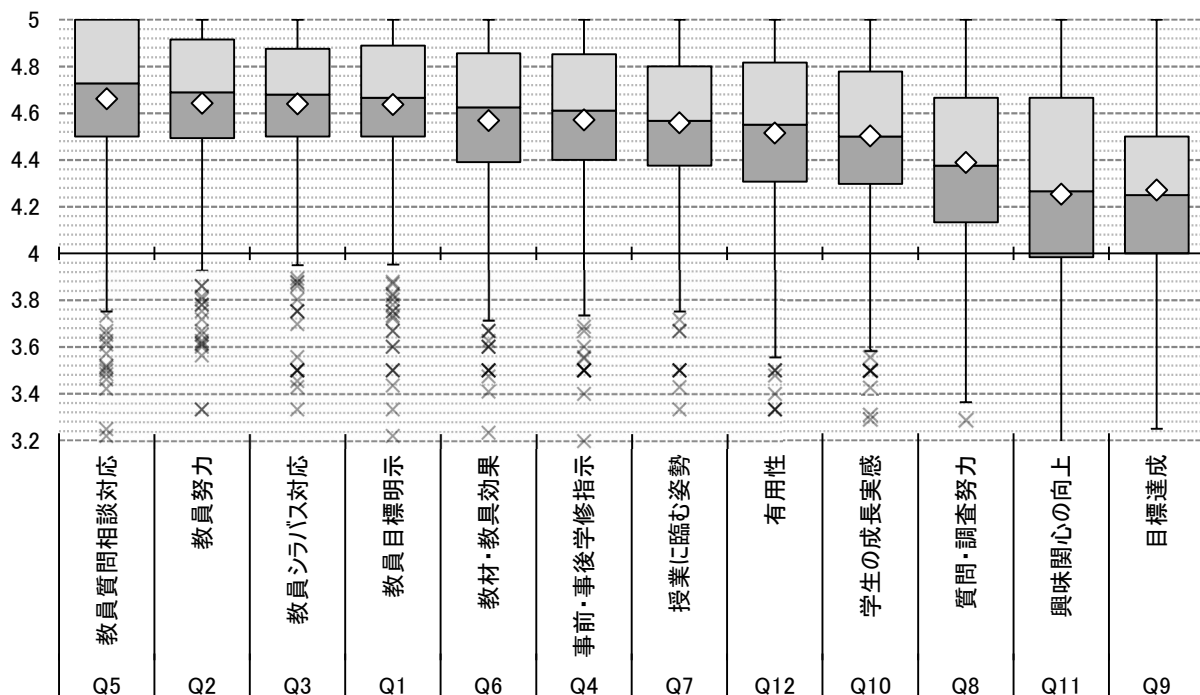
本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度との比較から推定できることにも言及しています。

## 目次

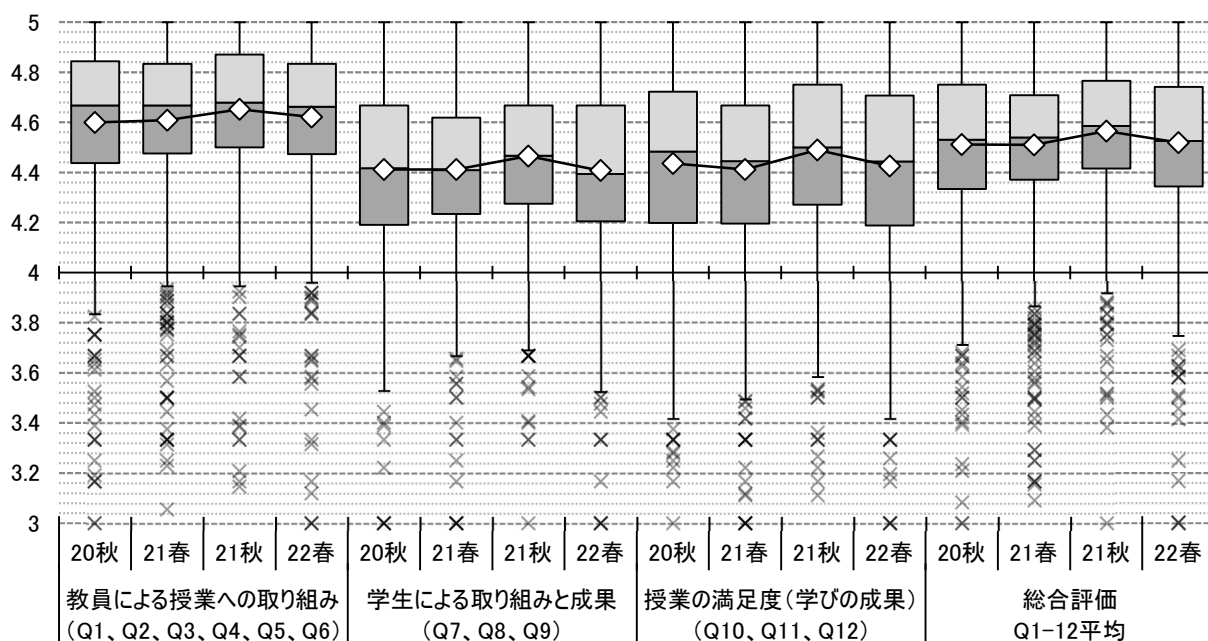
1. 全体概況	3
項目別および領域別集計値分布	3
昨年春学期との比較（有意差検定）	4
Q9～Q11の科目区分ごとの授業別集計値の分布	5
2. 領域ごとのサマリー	6
3. 項目別集計結果分析	7
回答率について	17
参考資料1 実施率／回収率	19
1-1 アンケート実施率（回収率）科目区分別	20
1-2 アンケート実施率（学部）2005年度春学期～2022年度春学期	21
参考資料2 自由記述回答 頻出キーワード分析	23
自由記述回答 頻出キーワード分析について	24
<集計グラフ>	
【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点	27
全学	28
学部別	29
回答人数帯別	30
学年別	31
出現率前回比較 全学	32
出現率前回比較 学部別	33
出現率前回比較 回答人数帯別	37
出現率前回比較 学年別	40
【改善点】改善できる点	43
全学	44
学部別	45
回答人数帯別	46
学年別	47
出現率前回比較 全学	48
出現率前回比較 学部別	49
出現率前回比較 回答人数帯別	53
出現率前回比較 学年別	56

■全体概況

評価項目のうち、選択肢構造を同じくする Q1~Q12 の授業別集計値の分布は下図に示す通りです。中央値で降順ソートして左から並べました。Q5 教員質問相談から Q1 教員目標明示の各項目は授業間の差異も小さく、総じて高い評価を得ていますが、Q9 目標達成や Q11 興味関心の向上は箱の下端が 4.0 (「どちらかと言えばそう思う」に相当) を超えられずにいます。



下図は、領域ごとに算出した平均値の分布です。昨年春学期と比べた場合、先生方の取り組みへの評価はほぼ変わりませんが、学生の取り組みや授業の満足度は、授業間の差がわずかながら拡大しました。昨年の秋学期の実績値を超えられるかは、今年度後半のチャレンジのひとつです。



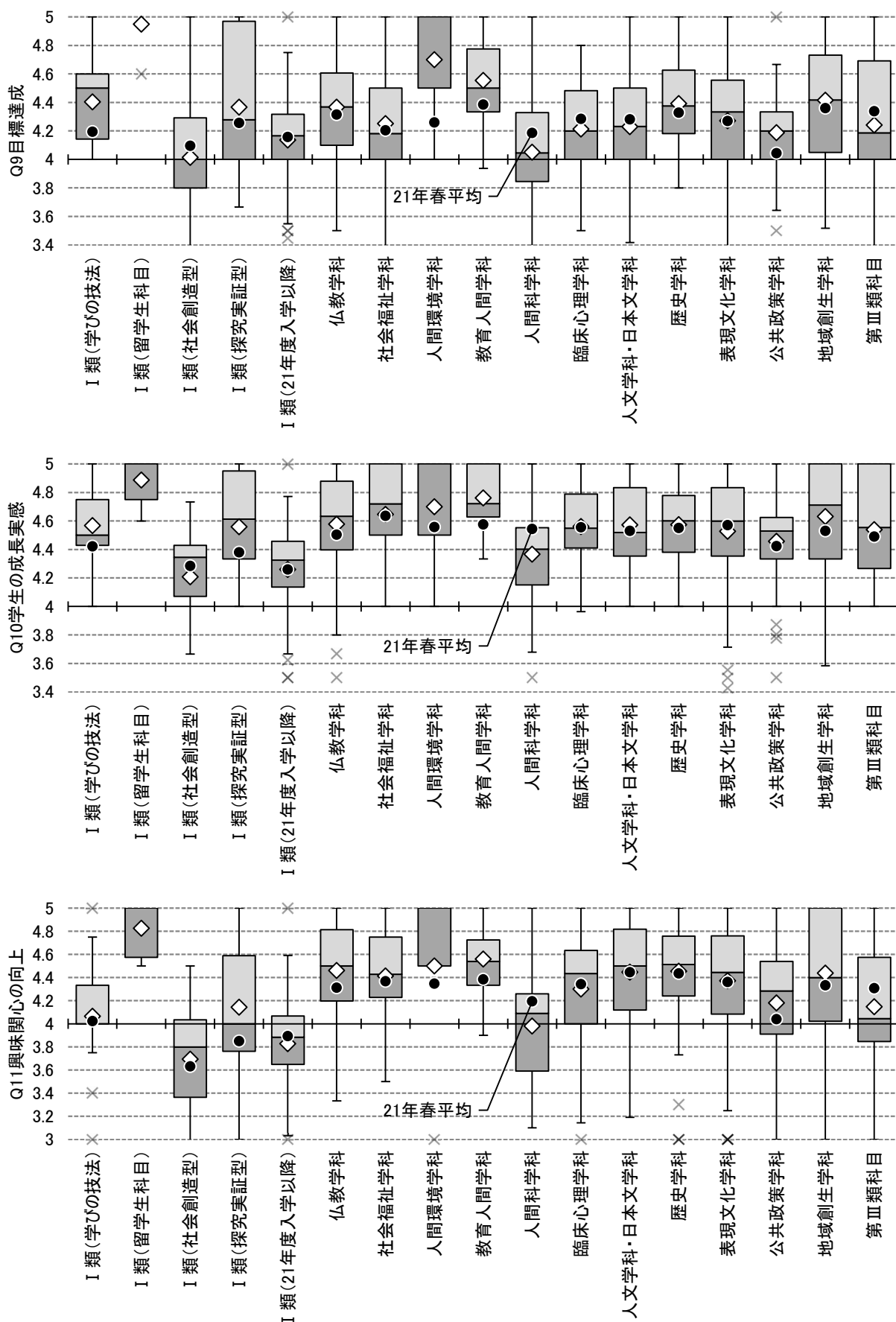
昨年春学期との比較の結果（学生の回答から直接算出したもの）は下表に示す通りです。昨年からの変化量（前年同期比）の実測値で降順ソートしてあります。先生方の取り組みについては、昨年との間に顕著な変化は生じていませんが、学生の授業への取り組みに係る部分（Q14 平均学修時間、Q13 出席率、Q7 授業に臨む姿勢、Q8 質問・調査努力）で低下幅が大きくなっています。

授業運営が「原則として対面」に戻る中で生じた変化である可能性が高そうです。実際のところ、低下の大きな項目は、前回の分析で「コロナ禍にあった2年間を集計結果で振り返る」と題した考察でコロナ前と比べて大きく伸びていた項目（右図、昨年秋学期報告書から再掲）と一致します。対面で受講できない環境下で、自力で何とか努力する中で身につけていたものは、たとえ対面に戻ってもさらに伸ばし、発揮してもらいたいところです。

	2カ年平均	'18-19	'20-21	変動量
Q1教員目標明示	4.44	4.58		+.13
Q2教員努力	4.44	4.56		+.12
Q3教員シラバス対応	4.45	4.60		+.15
Q4事前・事後学修指示	4.29	4.50		+.21
Q5教員質問相談対応	4.46	4.57		+.11
Q6教材・教具効果	4.38	4.46		+.08
Q7授業に臨む姿勢	4.30	4.51		+.21
Q8質問・調査努力	4.06	4.26		+.21
Q9目標達成	4.06	4.18		+.12
Q10学生の成長実感	4.27	4.41		+.14
Q11興味関心の向上	4.07	4.10		+.02
Q12有用性	4.30	4.44		+.14
Q13出席率	4.52	4.89		+.36
Q14平均学修時間	2.84	3.16		+.32

項目	実施	n	平均	標準偏差	前年同期比	
					実測値	t検定P値
Q4事前・事後学修指示	21春	22,779	4.51	0.76		
	22春	24,686	4.51	0.77	▼.001	0.4326
Q3教員シラバス対応	21春	22,779	4.61	0.64		
	22春	24,686	4.61	0.64	▼.002	0.3749
Q6教材・教具効果	21春	22,499	4.49	0.77		
	22春	24,411	4.48	0.78	▼.005	0.2511
Q1教員目標明示	21春	22,779	4.58	0.66		
	22春	24,686	4.58	0.68	▼.007	0.1306
Q2教員努力	21春	22,779	4.58	0.67		
	22春	24,686	4.57	0.69	▼.010	0.0482 *
Q10学生の成長実感	21春	22,779	4.41	0.78		
	22春	24,686	4.40	0.80	▼.013	0.0322 *
Q9目標達成	21春	22,779	4.20	0.79		
	22春	24,686	4.18	0.82	▼.014	0.0290 *
Q5教員質問相談対応	21春	22,779	4.58	0.72		
	22春	24,686	4.57	0.74	▼.015	0.0142 *
Q11興味関心の向上	21春	22,779	4.09	1.00		
	22春	24,686	4.07	1.03	▼.020	0.0155 *
Q1-12平均	21春	22,779	4.48	0.50		
	22春	24,686	4.46	0.53	▼.023	0.0000 **
Q12有用性	21春	22,779	4.44	0.78		
	22春	24,686	4.42	0.81	▼.024	0.0005 **
Q8質問・調査努力	21春	22,779	4.30	0.81		
	22春	24,686	4.26	0.86	▼.040	0.0000 **
Q7授業に臨む姿勢	21春	22,779	4.52	0.67		
	22春	24,686	4.48	0.72	▼.044	0.0000 **
Q13出席率	21春	22,779	4.91	0.36		
	22春	24,686	4.81	0.51	▼.097	0.0000 **
Q14平均学修時間	21春	22,779	3.13	1.02		
	22春	24,686	3.01	1.07	▼.122	0.0000 **

Q9～Q11の科目区分ごとの授業別集計値の分布 (n<5の科目区分は非表示)



### 「教員による授業への取り組み」(Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6)

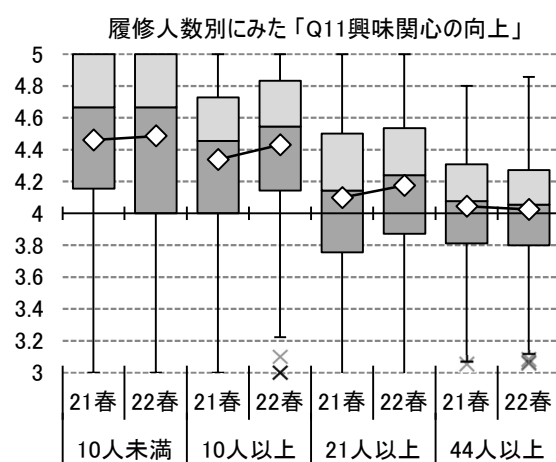
各項目ともに、昨年春学期とほぼ同等の評価です。Q1 教員目標明示、Q2 教員努力、Q3 教員シラバス対応、Q5 教員質問相談対応の4項目はいずれも第1四分位数が4.5と、高い評価を得ており、崩れる様子も見取れません。Q4 事前・事後学修指示、Q6 教材・教具効果も箱の下端はそれぞれ4.40、4.39と高い位置にあり、大学全体では概ね良好な状態です。各項目の優良実践の共有を図れば、改善が遅れた授業のキャッチアップも支援ができそうです。

### 「学生による取り組みと成果」(Q7、Q8、Q9)

Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力では、平均値（学生の回答から直接算出）が昨年春学期を有意に下回っています。仮に「原則として対面」に戻ったことの影響だとした場合、わからないことを自力で調べて解消する姿勢を維持・向上させるべく、その機会を先生方が意識的に作っていく必要があるかと思えます。Q9 目標達成（Q7 と Q8 を説明変数とする重回帰分析の決定係数は0.47）も昨年春学期の実績を超えられませんでした。「どちらかと言えばそう思う」に相当する4.0ポイントに届かない授業も16.6%と、直近4回で最多です。

### 「授業に対する満足度（学びの成果）」(Q10、Q11、Q12)

前掲（p.4）では、Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上、Q12 有用性はいずれも平均値（学生の回答から直接算出）で昨年春を下回りましたが、履修者の四分位数でデータを分けた授業別集計値分布（右図）では、中規模の授業（履修者数10名以上44人未満）で箱の位置が高くなっています。Q10 と Q12 も同じ傾向であり、今期から「原則として対面」に戻ったことの影響とも考えられます。「大人数のクラスは対面の利点が生かしにくく、遠隔授業と比したアドバンテージが小さい」との直観とも一致する結果です。なお、履修人数10名以下の区分では何故か箱の下端が下がっています。



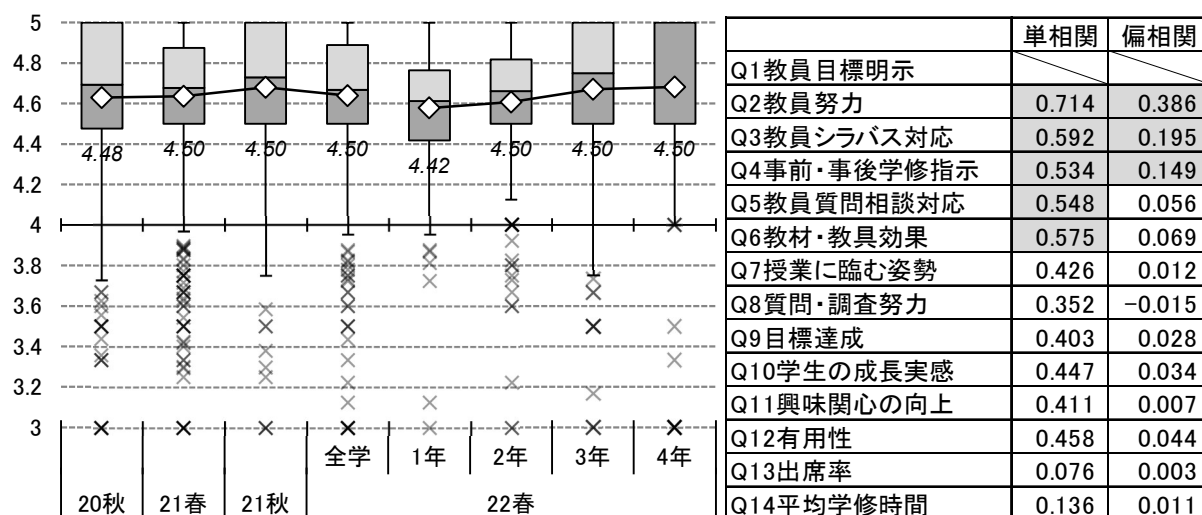
### 「出席率、平均学修時間」(Q13、Q14)

Q13 出席率は、昨年春を下回ります。対面に戻ったことで「出席」の様態が変化したことによる部分もありそうです。一方で、Q14 平均学修時間は、平均値などの低下がやや顕著です。教室での対面で行うところと学生が個々に取り組むところの切り分けを改めて見直すことで、事前・事後の学習に充てる時間の延伸を図るとともに、「教室でしかできない学びの充実」をこれまで以上に目指していく必要があるかと思われます。

### ■項目別集計結果分析

各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を、直近4回分の追跡結果と当期の学年別で表示した四分位図<sup>1</sup>と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」の直下に表示した数字は第1四分位数です。これを下回っている場合、キャッチアップが急務とお考え下さい。箱ひげ図の右側に配した相関係数の一覧では、単相関と偏相関の双方について各々の相関行列で上位25%に含まれるケースに網掛けを施してあります。高い偏相関で結ばれる項目は、それぞれ別個に改善策を講じるよりも、セットで改善を考えた方がうまく運ぶケースが多いはずです。

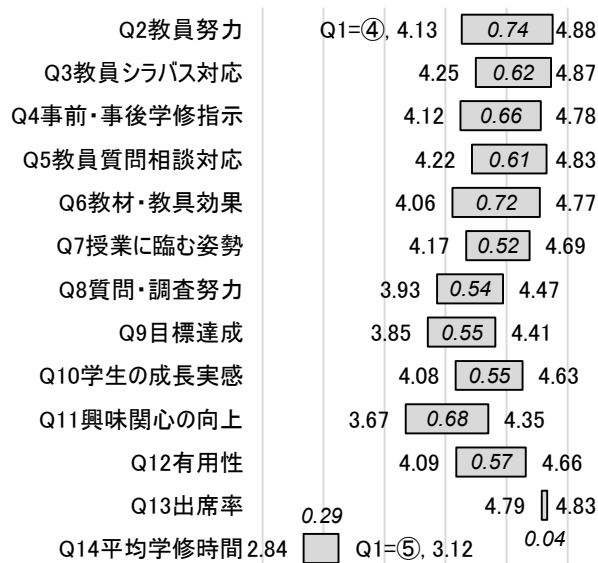
#### Q1 教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



昨年同時期とほぼ同じ評価です。箱の下端は4.5ポイントを維持しており、多くの授業が高い評価を得ています。4.0ポイント未満の授業は2.7%（昨年春は3.8%）に過ぎません。他項目との相関の出方は前回までとほぼ同じです。

比較的小さな相関係数しか観測できないQ7～Q12の各項目でも、Q1で「⑤そう思う」を選ぶか、「④どちらかと言えばそう思う」を選ぶかで0.5ポイント以上の差が生じています。目標を明確に示されなければ、積極的な取り組みは学生から引き出せず、その中で得られる学びの成果も小さなものになると思われます。目標に近づく方法を考える「適応的学習力」の向上も期待しにくくなりそうです。また、明示すべき目標が曖昧では、先生方の取り組みも首尾一貫したものにはならず、達成検証も困難です。

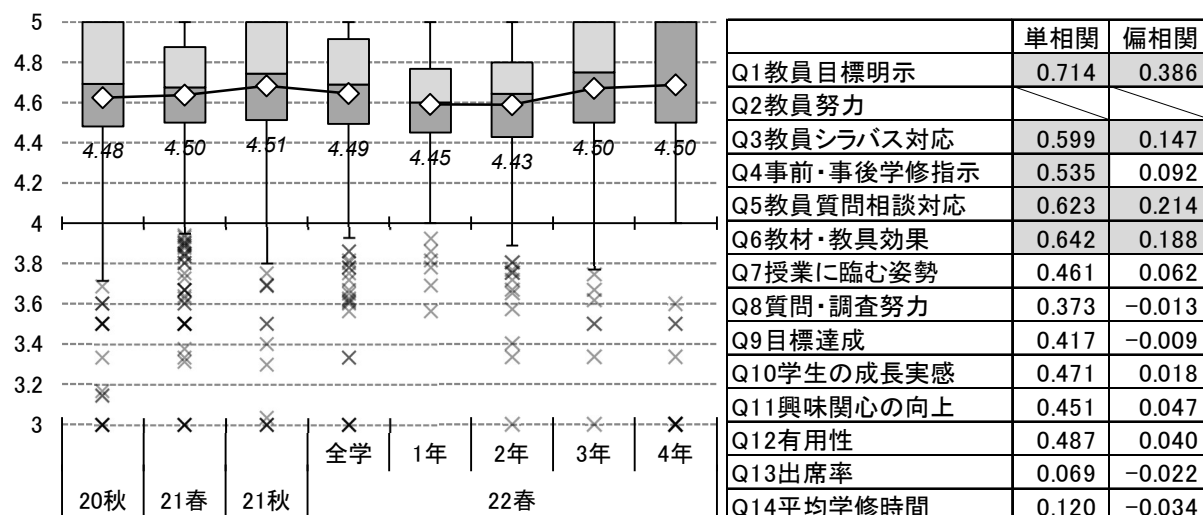
#### Q1教員目標提示の影響



<sup>1</sup> 平均値◇は、「学生の回答から直接算出した値」から前々回までの「授業別集計値の平均」に戻しました。

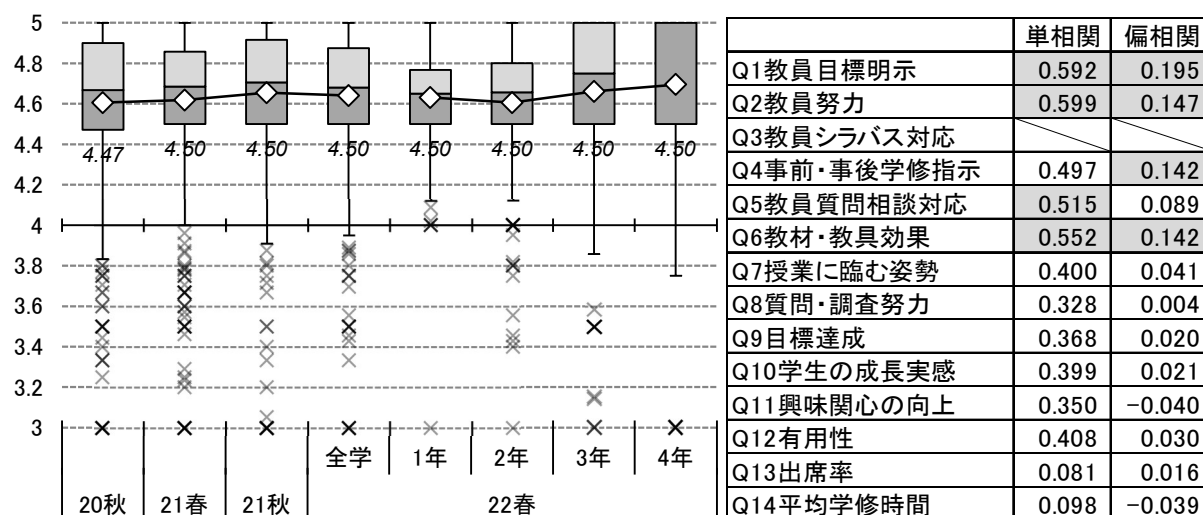
前回の報告書にも書きましたが、履修開始の時点で学習する内容やそこで獲得する概念などを表す言葉を提示しても、学生は「何を学ぶのか」を明確にイメージできるとは限りません。その日の授業／単元／学期／講座全体の学びを終えたときに答えを導くべき「問い」の形で目標を示した方が、目指すところはイメージしやすいはず。シラバスの記載においても同様です。

### Q2 教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ



高い評価を維持しています。4.0ポイント未満の授業は2.5%（昨年春は3.6%）です。他項目との相関で最も大きな値を示しているのは、Q1 教員目標明示です。先生方が何を目指して努力をしているのか伝えないと、一つひとつの指導に込めた意図や工夫も十分に理解されないはず。Q1 を説明変数、Q2 を目的変数とする回帰式の係数（近似線の傾き）は0.86にも達します。

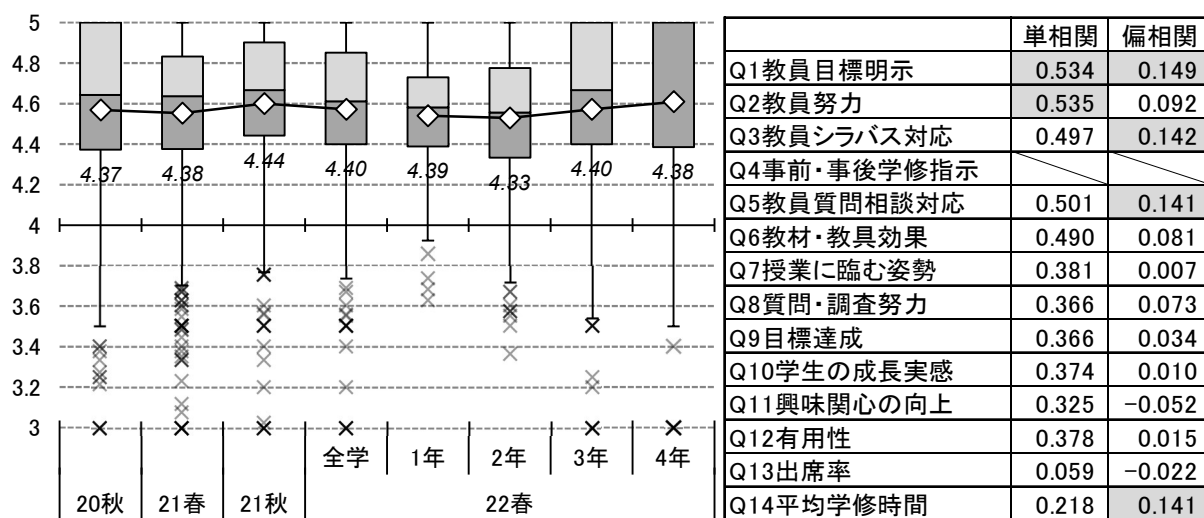
### Q3 教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った



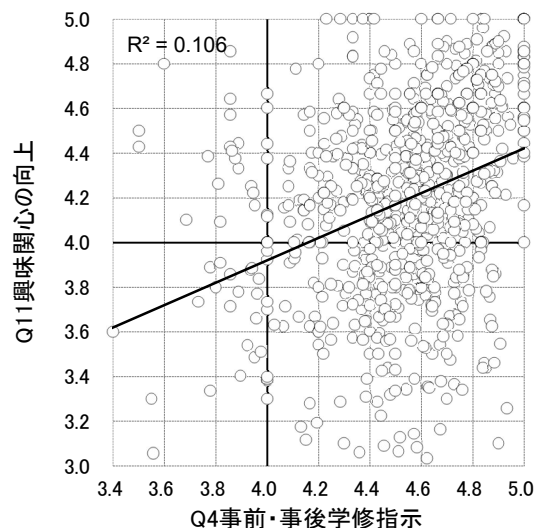
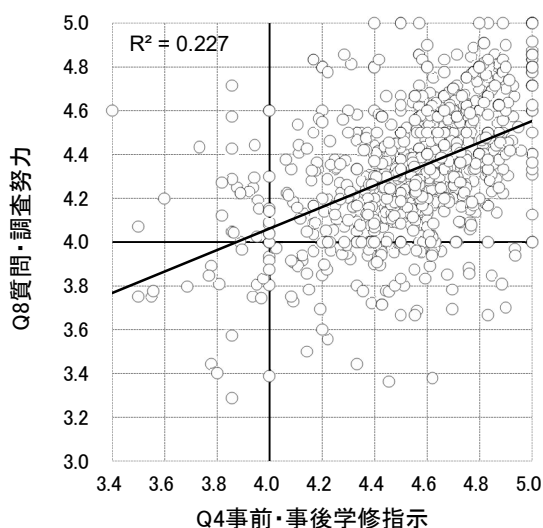
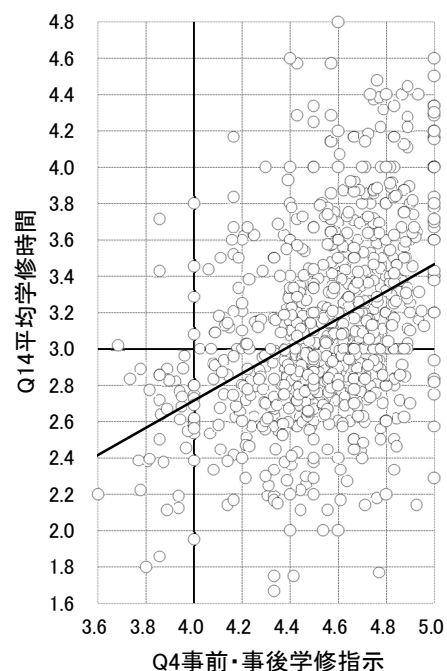
これまで同様に高い評価を維持しています。他項目との相関の出方も前回までとほとんど変わりません。4.0ポイントに届かない授業は大学全体で2.6%（昨年春は3.8%）まで減っています。Q1 と同じ手法で詳しく調べてみると、この質問で「そう思う」を選択できず、「どちらかと言えばそう思う」しか選べないと、相関の小さなQ11 興味関心の向上などでも大きく平均が低下します。



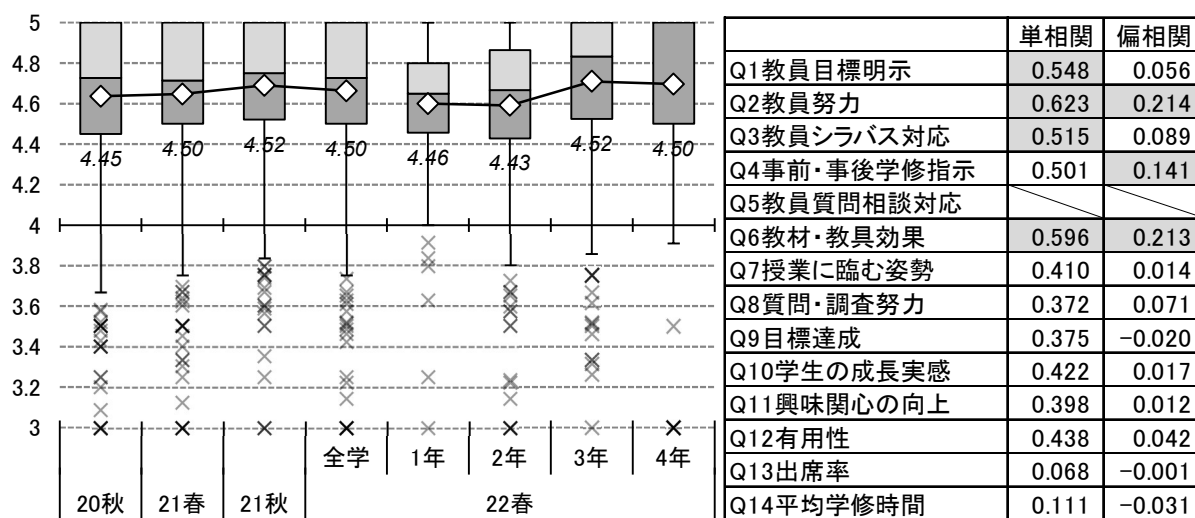
Q4 教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した



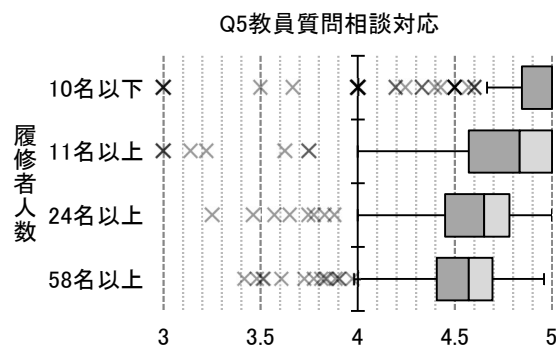
改善が積み上げられ、4.0ポイントに届かない授業は5.2% (昨年春は6.7%) まで減少しています。Q14 平均学修時間との間には比較的強固な偏相関が見取れます。この項目に「そう思う」と答えた学生のQ14の平均は3.17、「どちらかと言えばそう思う」を選んだ学生の平均は2.85であり、両者の差は0.32です。「明確な指示がないと、何をしたら良いかわからない」という事情が正の相関の背景に考えられますが、指示をこなすのに必要な時間の見立てが正しくないと、指示をしても適正な学修時間の確保に繋がらないはずですが、また、下図で近似線から下方に大きく離れた授業では、事前学修・事後学修の指示が、質問や調査に向けた意欲を高める／興味関心を刺激する内容になっていない可能性があります。指示の徹底より、タスクの見直しが必要かもしれません。



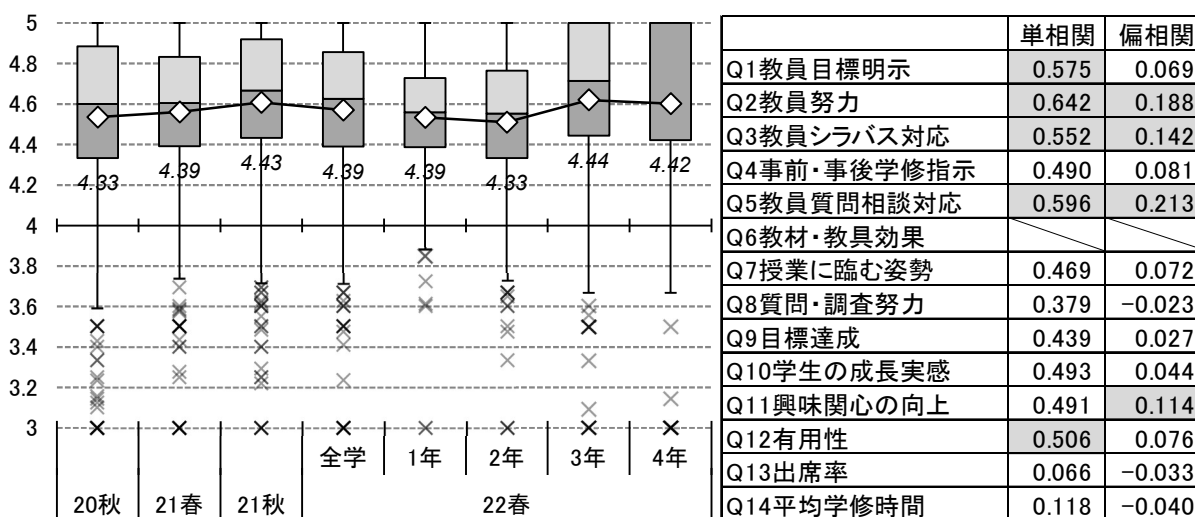
Q5 教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



これまでの改善の蓄積により、安定して高い評価を得ています。箱の下端は、直近3回とも4.5ポイント前後と高い値です。満点となった授業も28%に及びます。右図（階級区分は今回の履修者人数の四分位数による）の通り、履修する学生が多いほど、低い評価になる傾向はありますが、最大の「58名以上」の階級も中央値は4.57です。

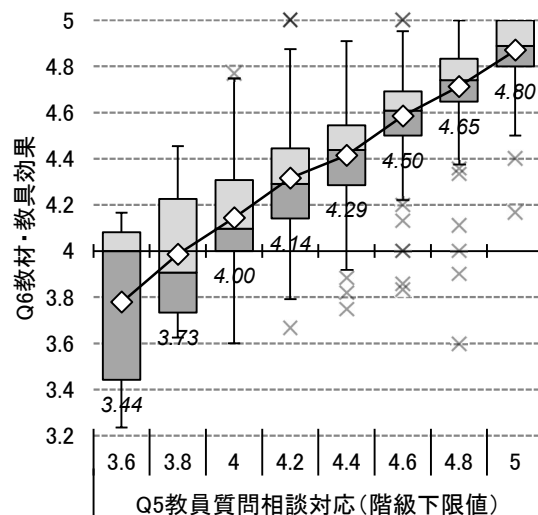


Q6 教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった



昨年の春学期とほぼ同じ評価です。強い相関で結ばれているQ2 教員努力「教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ」にどう答えてもらえるかは、学生の目標達成に資する適切な教材や教具が実現しているかで左右されるということだと思います。また、シラバスを起草する段階で教材・教具、授業デザインを熟慮しておかないと、Q3 教員シラバス対応も十分な実現が難しくなるはずですが、偏相関係数では、Q5 教員質問相談対応が最も大きな値を示してい

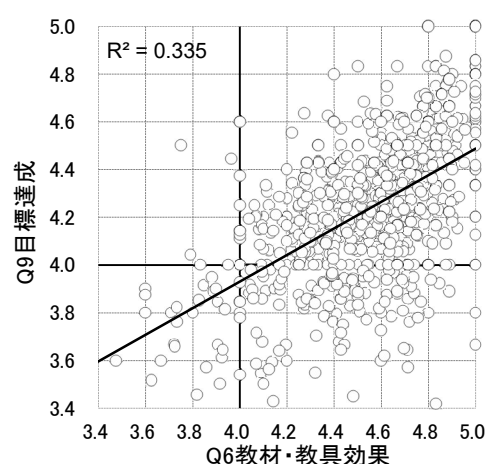
ます。学生からの相談や質問にしっかり対応することで、躓きが生じやすいこと／学生が悩むポイントを把握できますので、それらを踏まえて教材の選択ができると考えれば、強い相関にも十分に説明がつきそうです。実際、右図に見る通り、Q5 教員質問相談対応が充実したクラスほど Q6 教材・教具効果で高い評価を得ています。各階級の箱の下端に届いていない授業では、「質問相談に応じる中で先生方が得た気づき」を授業計画作りに活かしかれていないということかもしれません。



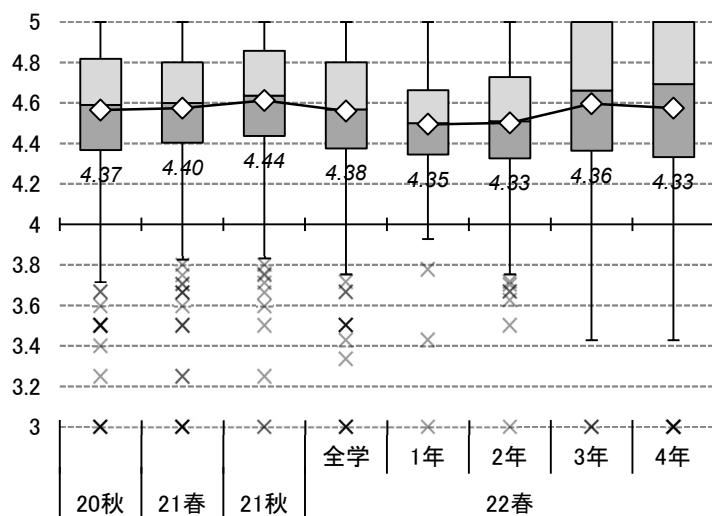
下表は Q9～Q11 の各項目を目的変数、Q6 教材・教具効果を説明変数とする相関係数と回帰式(係数および切片)です。データは昨年と今年の春学期(2回分)です。いずれの目的変数に対しても上級学年の方が説明変数(Q6)の関係[寄与]が強まる傾向があるように見受けられます。「学習方策や目的意識が未成熟な初学者(下の学年)ほど、学びの成果が先生方の教え方に大きく左右される/依存する」との見立て/仮説では説明しきれない結果です。むしろ、「大学での学び方に習熟していないうちは、先生方がイメージする通りに学生が動けず、指導が意図した通りの結果を得にくい」と考えた方が良さそうです。下の学年ほど、反応を丁寧に観察しながら授業を進めないと、意図の空回りも懸念されると考えた方が良くもかもしれません。

× Q6	Q9 目標達成				Q10 学生の成長実感				Q11 興味関心の向上			
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年
相関係数	0.427	0.424	0.431	0.437	0.460	0.509	0.526	0.518	0.466	0.484	0.545	0.557
回帰係数	0.443	0.429	0.426	0.477	0.479	0.492	0.478	0.498	0.619	0.628	0.638	0.669
切片	2.202	2.262	2.304	2.116	2.220	2.218	2.343	2.266	1.259	1.257	1.338	1.295

また、Q9 目標達成と Q6 教材・教具効果の相関は、Q10 学生の成長実感や Q11 興味関心の向上と比べて、どの学年でも弱めであることも上表で確認できます。右図に照らし、近似線を下方に大きく離れた授業では、「授業理解を深めさせる」ところからその先に繋ぐところに工夫の余地がありそうです。また、残差(近似線からの距離)を目的変数、Q1～Q5 の各項目を説明変数とした重回帰分析では Q1 教員目標明示がやや大きな寄与度を示します。(次点は Q4 事前・事後学修指示) 日々の授業/各単元の到達目標が曖昧では、達成したかどうかの認識も明確に持てず、自分の学びに残る不足を見落として補完行動を取り損ねた結果、学期を通した到達目標の達成が遠ざかるとも考えられそうです。

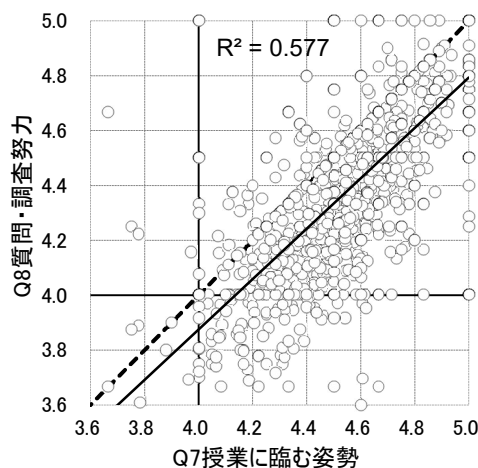


Q7 私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ



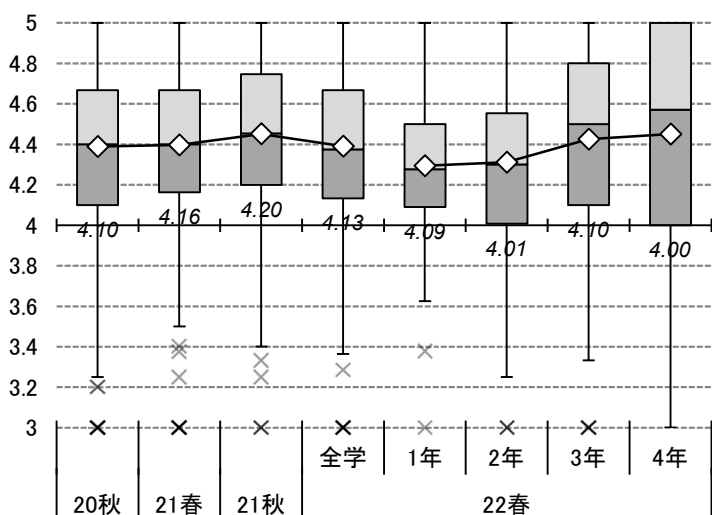
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.426	0.012
Q2教員努力	0.461	0.062
Q3教員シラバス対応	0.400	0.041
Q4事前・事後学修指示	0.381	0.007
Q5教員質問相談対応	0.410	0.014
Q6教材・教具効果	0.469	0.072
Q7授業に臨む姿勢		
Q8質問・調査努力	0.591	0.263
Q9目標達成	0.618	0.243
Q10学生の成長実感	0.549	0.100
Q11興味関心の向上	0.493	0.026
Q12有用性	0.502	0.063
Q13出席率	0.225	0.142
Q14平均学修時間	0.238	0.066

前回まで着実に改善が続いていましたが、前掲 (p. 4) の通り、昨年春学期を下回る結果です。Q14 平均学修時間との相関は、直近 3 回で単相関が 0.209→0.236→0.238、偏相関が 0.039→0.057→0.066 とごくわずかながらも強くなってきていますが、依然として曖昧です。Q8 質問・調査努力との間には比較的強固な相関（授業別集計値ベースでは回帰式の決定係数は昨年春学期の 0.476 から 0.577 に上昇）が見られますが、右図では、近似線から大きく下方に離れた授業もまだ散見されます。



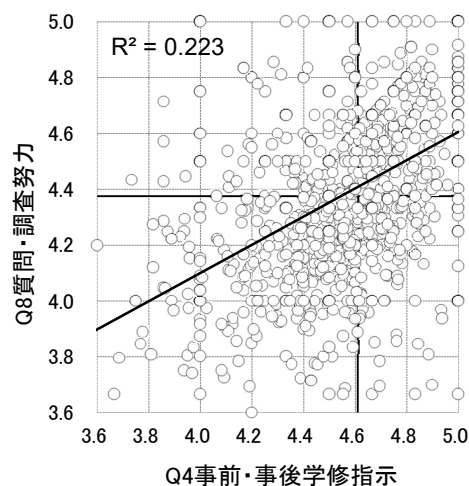
回帰式の残差を生じさせている要因を重回帰分析（説明変数は先生方の直接的コントロールが容易な Q1～Q6）で探ってみると、Q4 事前・事後学修指示に有意な偏回帰係数が観測されます。具体的で、達成可能、且つ適正な量の課題を与えることで残差を縮小できる可能性があります。

Q8 私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた

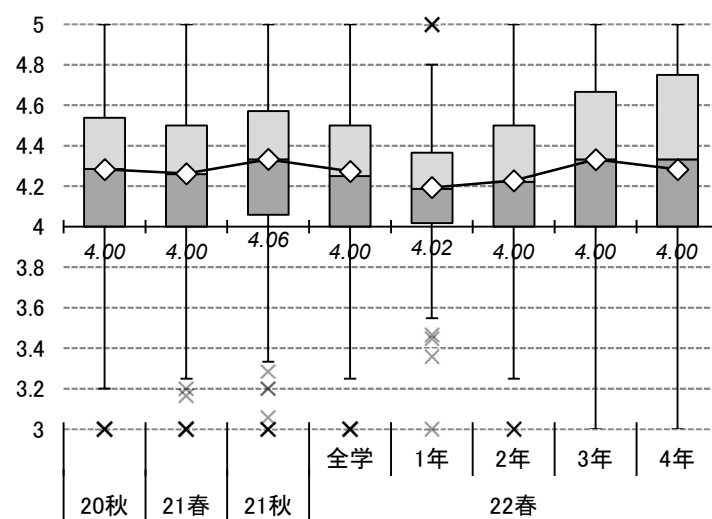


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.352	-0.015
Q2教員努力	0.373	-0.013
Q3教員シラバス対応	0.328	0.004
Q4事前・事後学修指示	0.366	0.073
Q5教員質問相談対応	0.372	0.071
Q6教材・教具効果	0.379	-0.023
Q7授業に臨む姿勢	0.591	0.263
Q8質問・調査努力		
Q9目標達成	0.596	0.269
Q10学生の成長実感	0.492	0.055
Q11興味関心の向上	0.459	0.053
Q12有用性	0.443	0.031
Q13出席率	0.144	-0.002
Q14平均学修時間	0.271	0.126

前回まで改善が連続して進んできましたが、今回は少し後退しており、昨年春学期と比べても平均値（学生の回答から直接算出）に有意な低下が観測されました。質問文「わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた」の要件を満たすには、まずは「わからないこと」の所在に学生が気づき、それを解消する必要を感じ取ることが欠かせません。先生方が説明して下さることを覚えるだけの学びでは、仮に「わからないこと」が隠れていても、その所在にすら気づけないはずで、問い掛けで、学生に考えさせ、答えを作ることを求めてこそ、不明の所在に気づき、その解消を図ろうという行動を起こさせることができます。右図（座表面は各々の中央値で分割）の通り、Q4 事前・事後学修指示との間には、弱いながら有意な正の相関がありますが、近似線を下方に離れた授業では、「不明の所在に学生自身が気づく」ような仕掛けが不足したのかもしれませんが、また、不明を見つけたときにどのような行動を取るべきかしっかり学ばせ、参照手段への習熟も図りましょう。



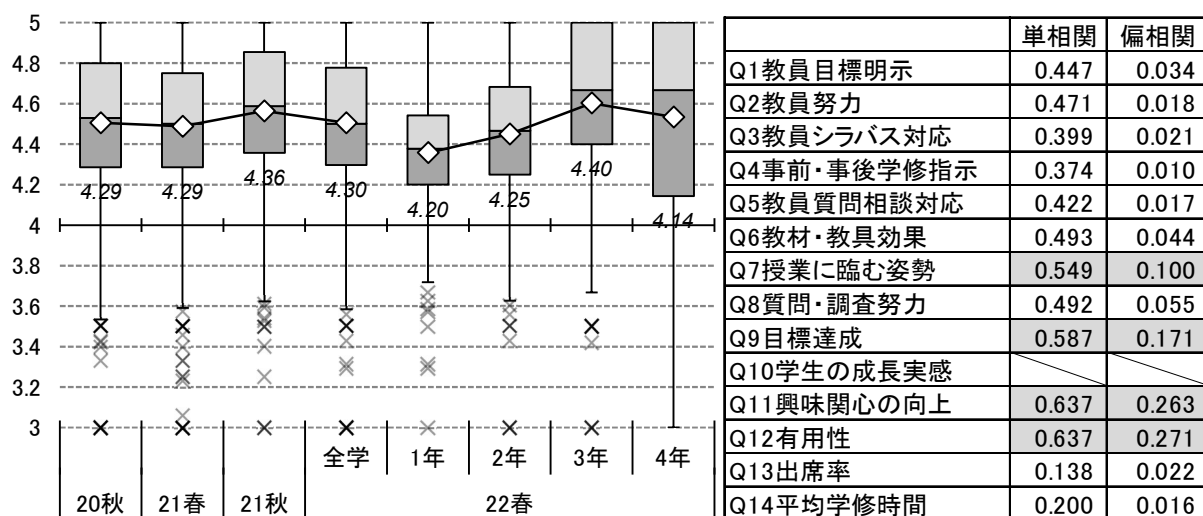
**Q9 私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）**



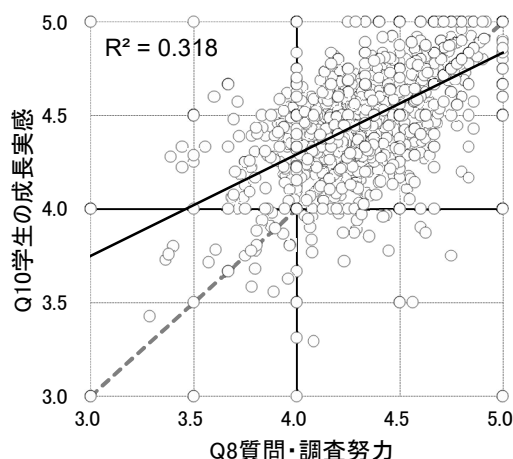
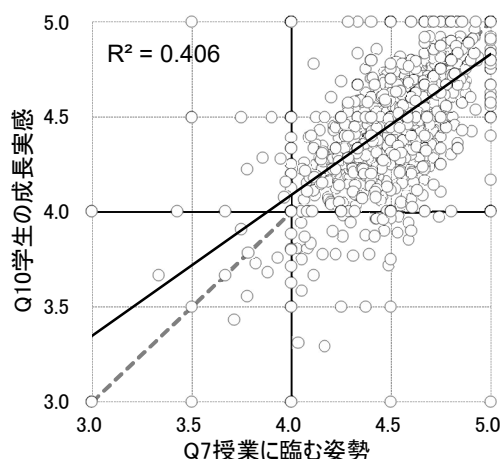
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.403	0.028
Q2教員努力	0.417	-0.009
Q3教員シラバス対応	0.368	0.020
Q4事前・事後学修指示	0.366	0.034
Q5教員質問相談対応	0.375	-0.020
Q6教材・教具効果	0.439	0.027
Q7授業に臨む姿勢	0.618	0.243
Q8質問・調査努力	0.596	0.269
Q9目標達成		
Q10学生の成長実感	0.587	0.171
Q11興味関心の向上	0.552	0.159
Q12有用性	0.505	0.027
Q13出席率	0.186	0.071
Q14平均学修時間	0.213	0.001

昨年春学期をごくわずかながら下回る結果です。4.0 ポイント未満の授業は 16.6%です。先生方の直接的なコントロールが可能な Q1～Q6 の 6 項目のみを説明変数、Q9 を目的変数とする重回帰分析の決定係数は 0.243 に止まりますので、Q9 目標達成のさらなる改善を図るには、高相関で結ばれている Q7、Q8 の 2 項目（これらを説明変数とする場合、決定係数は 0.464）を押し上げる策が必要です。但し、Q7 授業に臨む姿勢は、「到達目標を達成できた（できる）」との認識の中で、「このくらいで十分」と思ってしまう可能性がありますので、優先すべきは Q8 の改善でしょう。科目で学習する内容（単元）の中、あるいは先にある「学生が自分事として認識できる問題」を用意して投げかけることで、「学ぶことへの自分の理由」を学生に持たせるところからの改善になるのではないのでしょうか。このアプローチは Q12 有用性の改善にも繋がるはずで、

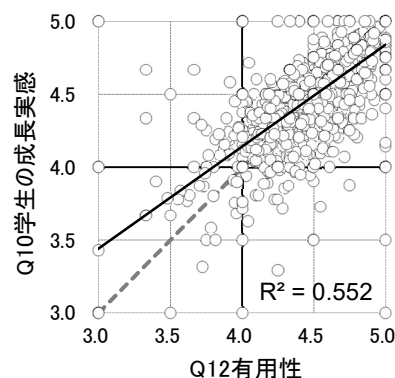
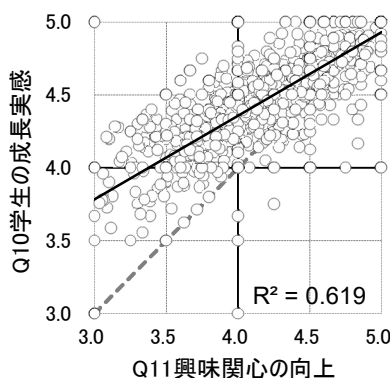
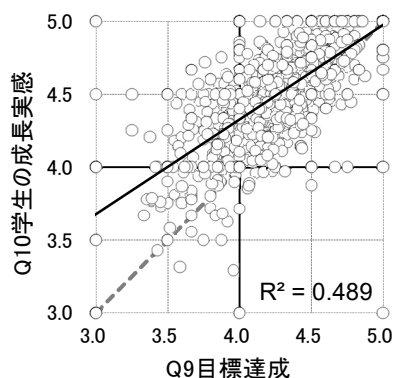
Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた



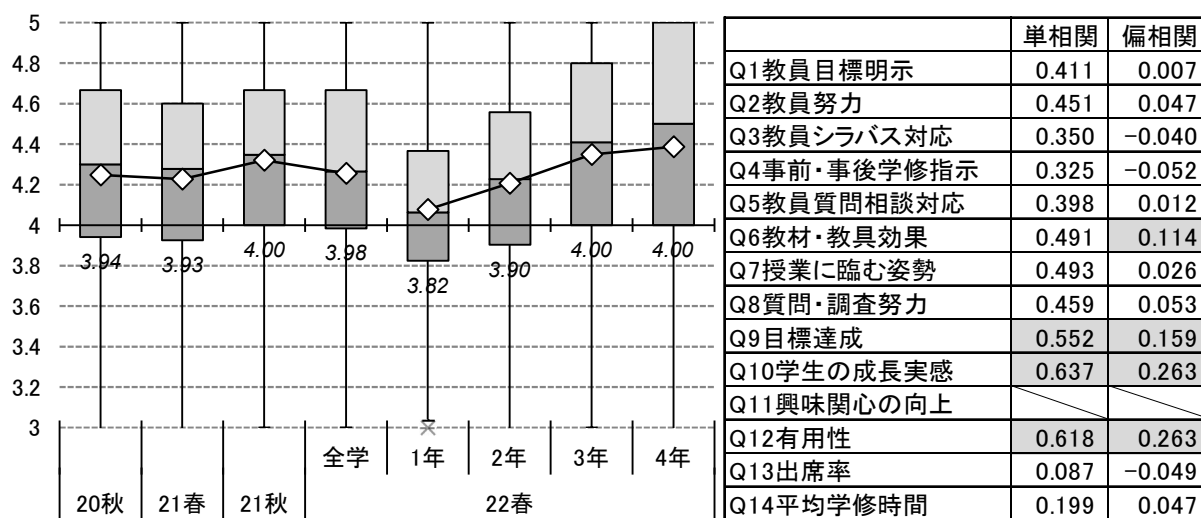
昨年の春学期とほぼ同じ評価です。他項目との相関の出方は前回までとほとんど変わりません。質問文の内容からは、「真剣に授業を受けた（Q7 授業に臨む姿勢）ことで成長できた」あるいは「調べたり、訊いたりして不明を解消する（Q8 質問調査努力）中での成長を実感した」という因果も想定できるのですが、下図を見る限り、必ずしもそうしたケースばかりではなさそうです。



また、下図の通り、「到達目標を達成できない／興味関心が高まらないまま、学生が自らの成長を実感している授業」も散見されます。授業で得た気づき等を「確かな学び」にする工程に改善の余地がありそうです。Q12 有用性は分布が右方向に寄っていることもあり、様相が異なります。

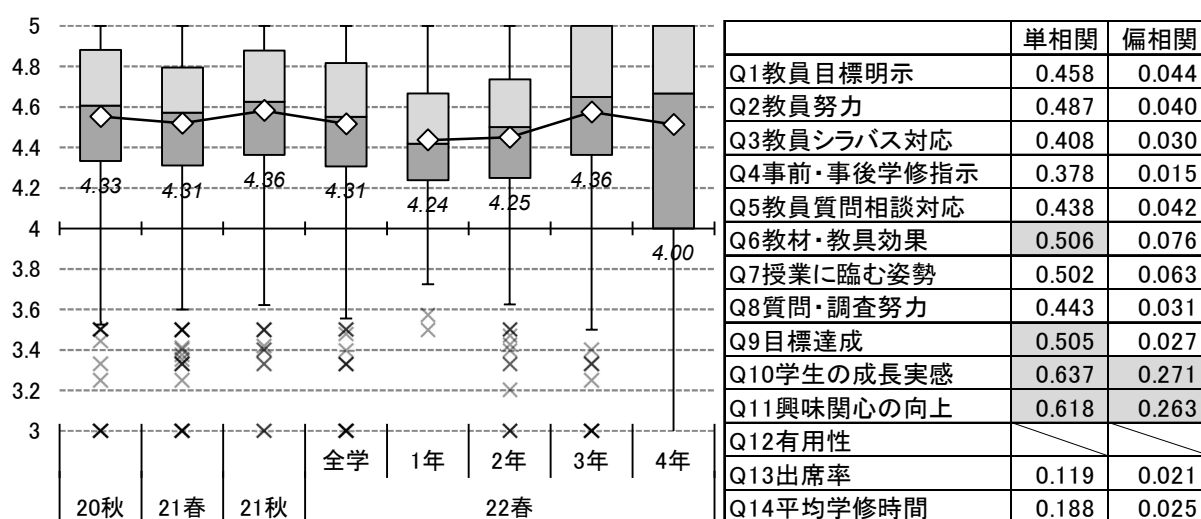


Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった

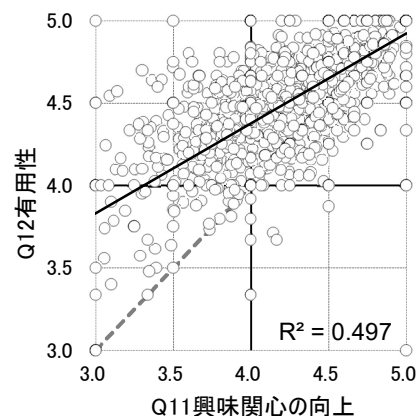


箱の下端は、昨年春学期より高くなっていますが、授業間の差はまだ大きめです。前掲 (p. 5) の通り、科目区分での差も小さくありません。外からの働きかけで「好きにさせる」のは容易ではありません。学んだことが役立つ場面を経験させること (Q12) や、新たな気づきを得られるような課題に取り組ませること (Q10)、「関連分野」を知る機会を整えることで改善を図りましょう。

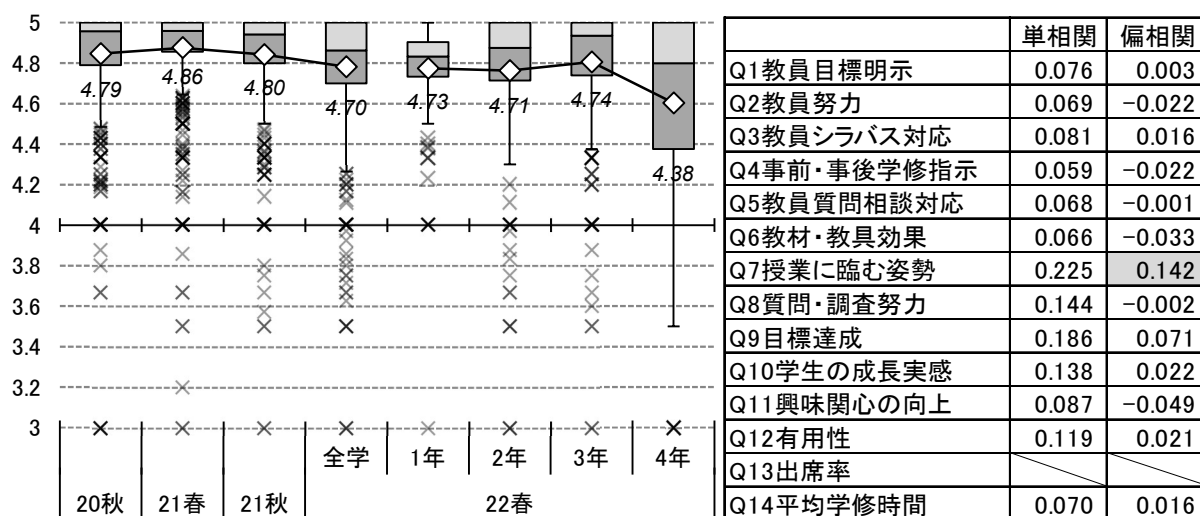
Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる



昨年春学期とほぼ同じ評価です。例年、秋学期は春学期を超える評価を得ていますので、今年も秋学期にはさらなる伸びが期待できるのではないのでしょうか。但し、右図の通り、Q12 有用性では高い評価を得ながら、学生の興味関心を十分に引き上げられていない授業も散見されます。「役に立ちそうだ」を入口に、さらに深く調べたり、考えたりする中で興味が刺激されるのを待てば、Q8 質問・調査努力や Q14 平均学修時間の改善にも繋がっていくのではないのでしょうか。

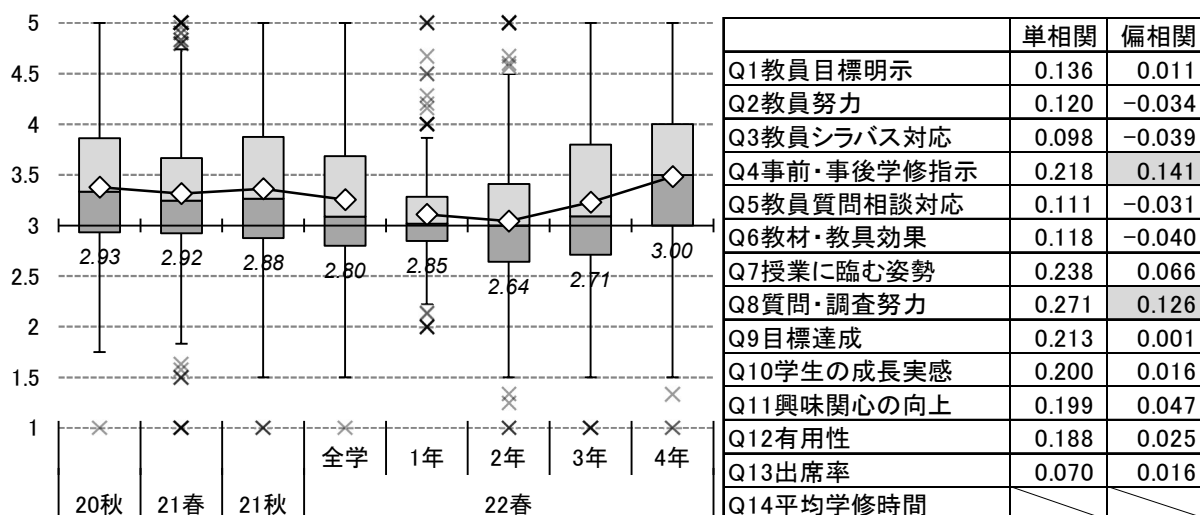


Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



中央値や箱の下端に低下が見られますが、原則として対面の授業になったことによる影響もあろうかと思えます。以前と同様に、Q7 授業に臨む姿勢との間には一定の偏相関が見られますが、他項目との相関は総じて小さな値です。本来であれば、欠席が増えれば、授業の到達目標達成は難しくなるはずですが、その明確な傾向をデータから読み取ることはできません。Q9 目標達成を目的変数とする回帰式は、係数 0.389、切片 2.42、決定係数 0.090（授業別集計値ベース）です。出席率の低い授業でも、授業の到達目標が達成できているケースでは、個々の学生の事情に合わせた対応や欠席フォローなども十分に効果をあげているということでしょうか。

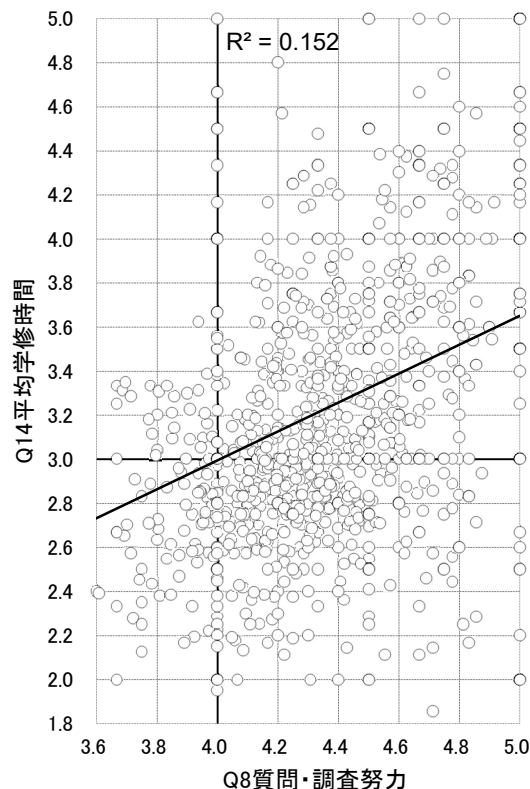
Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか



全項目の中で、最も低下幅が大きかったのが、この項目です。原則として対面に戻ったことでわからないことがあっても、教室に出向けば誰かに訊けるという状況が、自力で取り組む時間を少し短くしてしまったと考えると、データに一応の説明がつくかもしれません。非効率に一人でもがく場合より、知識・理解の獲得は進んでいるかもしれませんが、学びの方策の獲得は進みにくくなっている可能性があります。オンラインでは自力でやらなければならない部分は対面に

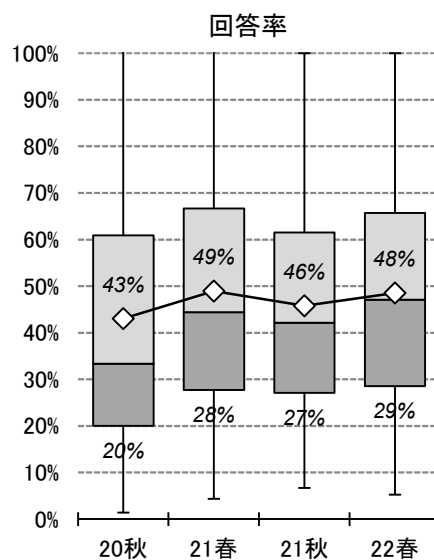


戻っても引き続き、学生が個々に取り組む学修活動に委ねていくべきであり、教室での授業時間は対面でしかできないこと（対話や協働）に多くの時間を掛けるようにしたいところです。相関行列を見ると、Q4 事前・事後学修指示や Q8 質問・調査努力との間には、比較的強固な偏相関係数が確認できますので、これら 2 項目の改善を先行することで、学修時間の延伸を図りたいところです。右図において、近似線から下方に大きく離れた授業では、見出した不明を解消するのに、さほど多くの時間は要さないという状況が想像できます。学生が個々に取り組む部分と、その成果を携えて臨む教室での対面での学びで扱う部分の切り分けを見直し、前者の割合を大きくしていくことで「学修時間の延伸」と「主体的、対話的で深い学び」の実現を同時に図りましょう。



#### 【ご参考】 回答率について

右図は、授業ごとの回答率（回答数÷履修者数）の分布の推移です。授業が「原則として対面」に戻ったことで、回答率の回復も予想されたところですが、実際には昨年春学期と比べて大きな変化はありません。回答率が低いままでは、集計結果から「より良い授業の実現に向けた課題の形成」が正確にできないリスクを抱えます。授業に対して好意的な評価をしている学生と、なにがしかの不満を抱える学生とで回答率に差が生じれば、評価結果が上振れ／下振れする可能性があるのは言うまでもありません。自由記述意見でも貴重な示唆が得られますが、その機会も失われる可能性があります。日々の授業でのリアクション・ペーパーなどで



も一定の情報は得られるでしょうが、授業評価アンケートで他の授業との相対的な位置を知ることとまた、授業改善への作戦立案には有用と考えます。教室での声掛けによる回答促進だけでは十分な効果が見込めないのであれば、何らかの追加対策を講じる必要があるかと思えます。



参考資料 1

実施率

参考資料1-1. アンケート実施率科目区分別

■学部1351科目

科目区分	授業数	実施数	実施率
04 I類(留学生科目)	304	8	100.0%
07 I類(2021年度入学以降)	307	215	100.0%
16 心理社会学部共通	316	1	100.0%
20 公共政策学科	320	49	100.0%
15 社会共生物学部共通	321	1	100.0%
18 歴史学科	318	114	98.2%
10 社会福祉学科	310	59	96.6%
15 臨床心理学科	315	52	88.5%
17 人文学科・日本文学科	317	104	87.5%
03 I類(学びの技法)	303	15	86.7%
14 人間科学科	314	60	86.7%
05 I類(社会創造型)	305	29	86.2%
12 教育人間学科	312	36	86.1%
22 地域創生学科	322	115	86.1%
25 第Ⅲ類科目	325	49	85.7%
09 仏教学科	309	137	84.7%
06 I類(探究実証型)	306	26	84.6%
19 表現文化学科	319	263	77.2%
02 I類(学びの窓口)	302	4	75.0%
13 人間学部共通	313	4	75.0%
11 人間環境学科	311	10	50.0%
計	1351	1194	88.4%

■大学院78科目

科目区分	授業数	実施数	実施率
05 院社会福祉学専攻(修士)	305	6	100.0%
08 院宗教学専攻(修士・博士)	308	8	100.0%
10 院共通科目	310	1	100.0%
04 院臨床心理学専攻(修士)	304	21	90.5%
02 院史学専攻(修士・博士)	302	9	77.8%
01 院仏教学専攻(修士・博士)	301	28	67.9%
03 院国文学専攻(修士・博士)	303	4	50.0%
11 院福祉・臨床専攻(修士)	311	1	0.0%
計	78	62	79.9%

参考資料1-2. アンケート実施率(学部) 2005年度春学期～2022年度春学期

年度	学期	実施率	実施数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274
2019年度	秋学期	96.2%	1127	1172
2020年度	春学期	92.2%	1174	1274
2020年度	秋学期	92.1%	1113	1208
2021年度	春学期	92.2%	1174	1274
2021年度	秋学期	88.4%	1194	1351
<b>2022年度</b>	<b>春学期</b>	<b>88.4%</b>	<b>1194</b>	<b>1351</b>

※2020年度からweb方式での実施へ変更。



参考資料 2

自由記述回答  
頻出キーワード分析

## 概要

本参考資料は授業アンケートの最後に

「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」

として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出するキーワードを調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

## 目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1として出現頻度の上位10ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2による前回と前々回(=前年同期)データに加え、今回の全学平均を表示することとしています。

## 分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」(効果点)と後半の「改善できる点」(改善点)に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

- (1) 質問の前半に対する回答(効果点)と後半に対する回答(改善点)を分けて集計・分析を行っています。
- (2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「○○で分かりやすかった」「△△△をしてくれたので分かりやすかった」など、分かりやすい理由となった「○○○」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。
- (3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例:「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。  
キーワード「レポート・課題」には「レポート・課題の出し方や評価方法がよかった/レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった」などに限定して仕分け、集計。

## 今回の特徴

回答の内訳は1年生:54.5%、2年生37.4%と、1,2年生で全自由記述回答の9割以上を占めており、前回とも同様の傾向です。

効果点、改善点については前回からキーワード自体の入れ替わり(新規キーワードや番外からの進出ランクイン、あるいはその逆)は少なく、順位の入替わりはあるものの大きな変動は多くはありませんでした。



## 効果点と改善点

### 1. 効果点（『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点）

効果点に関する上位 15 の回答の出現率合計は 1045 ポイントと昨年春学期の 1225 から 15% 程度減少したものの、改善点の 309 ポイントを大きく上回ります。

キーワード別に見ると、「**グループワーク**」（グループワークでの共同作業により学びが深まった／学習意欲につながった）が昨年度春学期、前回秋学期同様 1 位（510 件）となり、継続して不動の 1 位をキープしています。2 位の 238 件を大きく引き離し、突出した数字となる傾向はさらに顕著となっています。

2 位～5 位は順に、2 位「**実例・具体的**」（実例・具体例を挙げた説明で分かりやすい、具体的に理解できた：238 件/前回 4 位）、3 位「**動画・画像**」（動画・画像で分かりやすい：212 件/前回 3 位）、4 位「**丁寧**」（丁寧な授業、解説、プリント・・・：203 件/前回 2 位）、5 位「**レポート・課題**」（レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった、レポート・課題の出し方や評価方法がよかった：183 件/前回 5 位）でした。上位 5 項目は若干の順位の入替えはあったものの、同じ顔触れです。

6 位は前回 9 位から順位を上げた「（教員の）**体験談・現場の話**」（現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった：166 件）、7 位は前回 11 位から順位を上げた「**詳しい**」（詳しく学べた：155 件）でした。

突出した件数で 1 位となった「グループワーク」を除き、2 位（238 件）から 7 位（155 件）まではなだらかに件数が減少していきませんが、8 位（128 件）から 15 位（107 件）までは僅か 21 件の差しかなく、この中での順位を云々する意味はあまりありません。項目も 10 個の内 9 個は前回と同じ顔ぶれです。

前回との比較で言うと、「**多様な意見・視点**」（多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった：114 件）は前回 8 位から 13 位に順位を下げました。また、前回 13 位の「**フィードバック**」（フィードバックしてもらえてよかった）はランク外となり、代わりに「**テスト・試験**」（テストがあることによって理解が深まった：107 件）が 2021 年の春学期に続いてランクインしました。

### 2. 改善点（改善できる点）

1 位は前回に引き続き「**レポート・課題**」（レポート・課題の出し方や評価方法を改善してほしい：109 件）でした。2 位の「**時間**」を大きく引き離して突出した数字となっていますが、出現率で見ると 2021 年春、秋より減少しており、改善はされていることを窺わせます。

2 位「**時間**」（時間配分を改善してほしい、時間を守ってほしい：81 件）は前回 5 位からの上昇ですが、出現率自体は 2021 年春からほとんど変わらず、改善が進まない項目の代表格です。

3 位の「**グループワーク**」（グループワークの回数・分け方・実施方法を改善してほしい：79 件/前回 4 位）、「**プリント資料**」（プリント・資料が分かりにくい、配布方法を改善してほしい：60 件/前回 3 位）は前回の 2021 年秋学期からは共に大きく改善しましたが、2021 年春学期に比べると、特に「グループワーク」の出現率がまだ高い状況です。

「**パワポ・スライド**」（パワーポイント・スライドが分かりにくい、見にくい／内容・配布

方法を改善してほしい：58 件/前回 8 位)、「**聞きにくい**」(声が小さい、聞き取りづらい／声が大きすぎる／マイクを使ってほしい・・・：57 件/前回 12 位)、「**はやい**」(進行が早い、早口、画面切り替えが早い・・・：48 件/前回 14 位) はいずれも順位を上げました。特に「**聞きにくい**」「**はやい**」は前回 2021 秋から出現率が大きく上昇し、状況が最も悪化した 2 項目となっています。以前から改善点として常連の項目で、改善が進んでランク外となったこともある項目でもあり、改めて改善行動が期待されます。

9 位の「**オンライン授業**」(オンライン授業に関わる要望各種：44 件/前回 2 位) は大きく順位を下げ、出現率も激減しました。オンライン授業自体の減少もあると思いますが、記載内容もむしろ提案的内容を含むものが多く見られ、大きな問題はなさそうです。

前回あった、「**通信機器**」(11 位)、「**出席**」(13 位) がランク外となった一方、13 位に「**字が読みにくい**」(黒板、パワポ、スライド、レジュメ、資料等の字が薄い、汚い、誤字脱字・・・：25 件)、15 位に「**教室環境**」(教室が狭い、暑い、寒い、臭い・・・：24 件) が入りました。対面授業が増えたことによる影響かもしれません。

改善が進めば「効果点」になる可能性もある、改善点にも効果点にもリストアップされるキーワードは以下の通りです。「効果点」に掲載された意見の中に具体的な改善行動のヒントを探すことができそうです。

- 「**レポート・課題**」(改善点 1 位/効果点 5 位)
- 「**グループワーク**」(改善点 3 位/効果点 1 位)
- 「**テスト・試験**」(改善点 8 位/効果点 1 5 位)
- 「**説明・解説(不足)**」(改善点 1 0 位/効果点 9 位)
- 「**質問**」(改善点 1 2 位/効果点 1 0 位)

なお、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリー別の改善行動が重要となります。

## 少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

### ※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれる「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

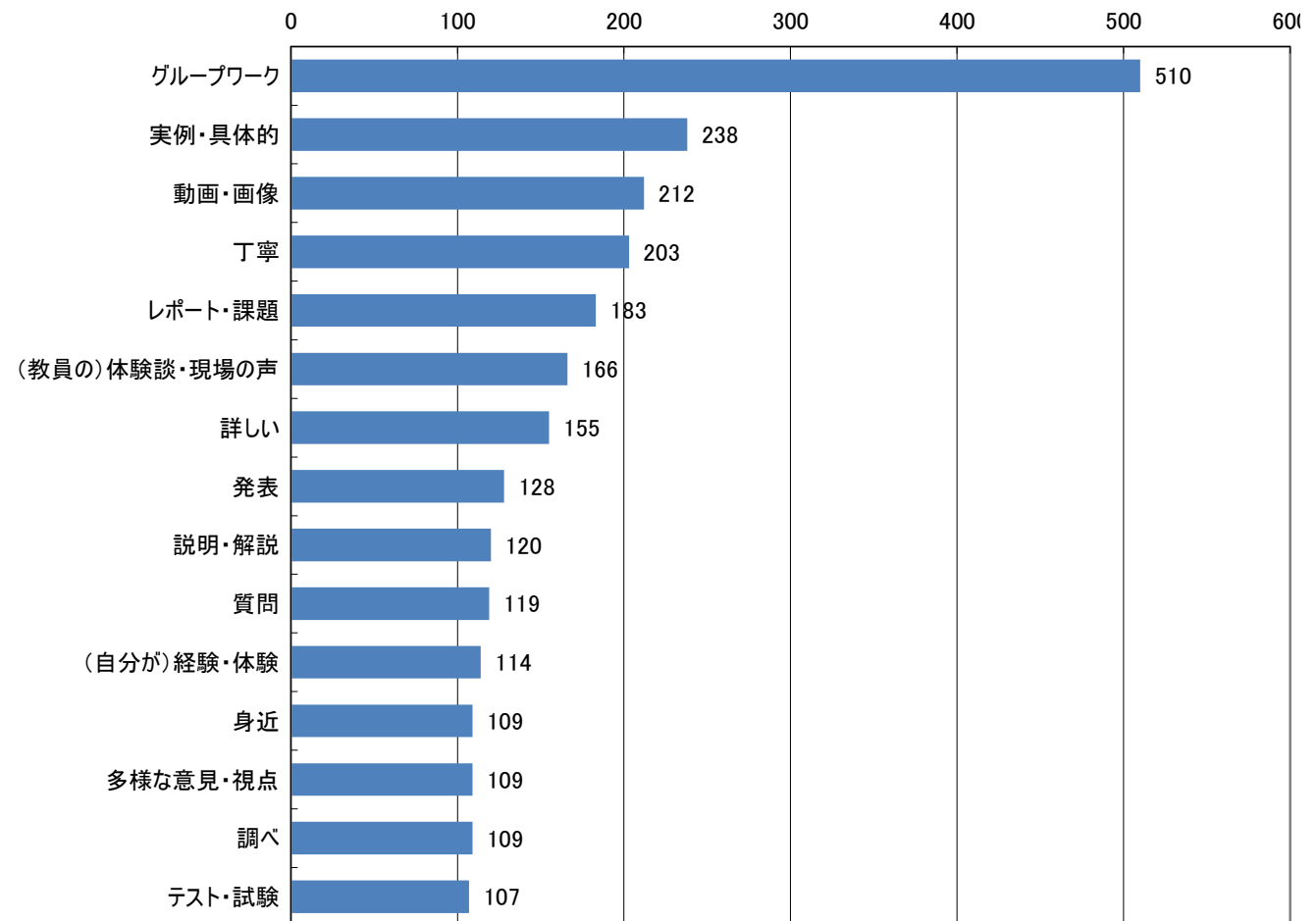
### ※2 出現率について

「出現率前回比較 全学」下段の説明を参照ください。

**【効果点】**

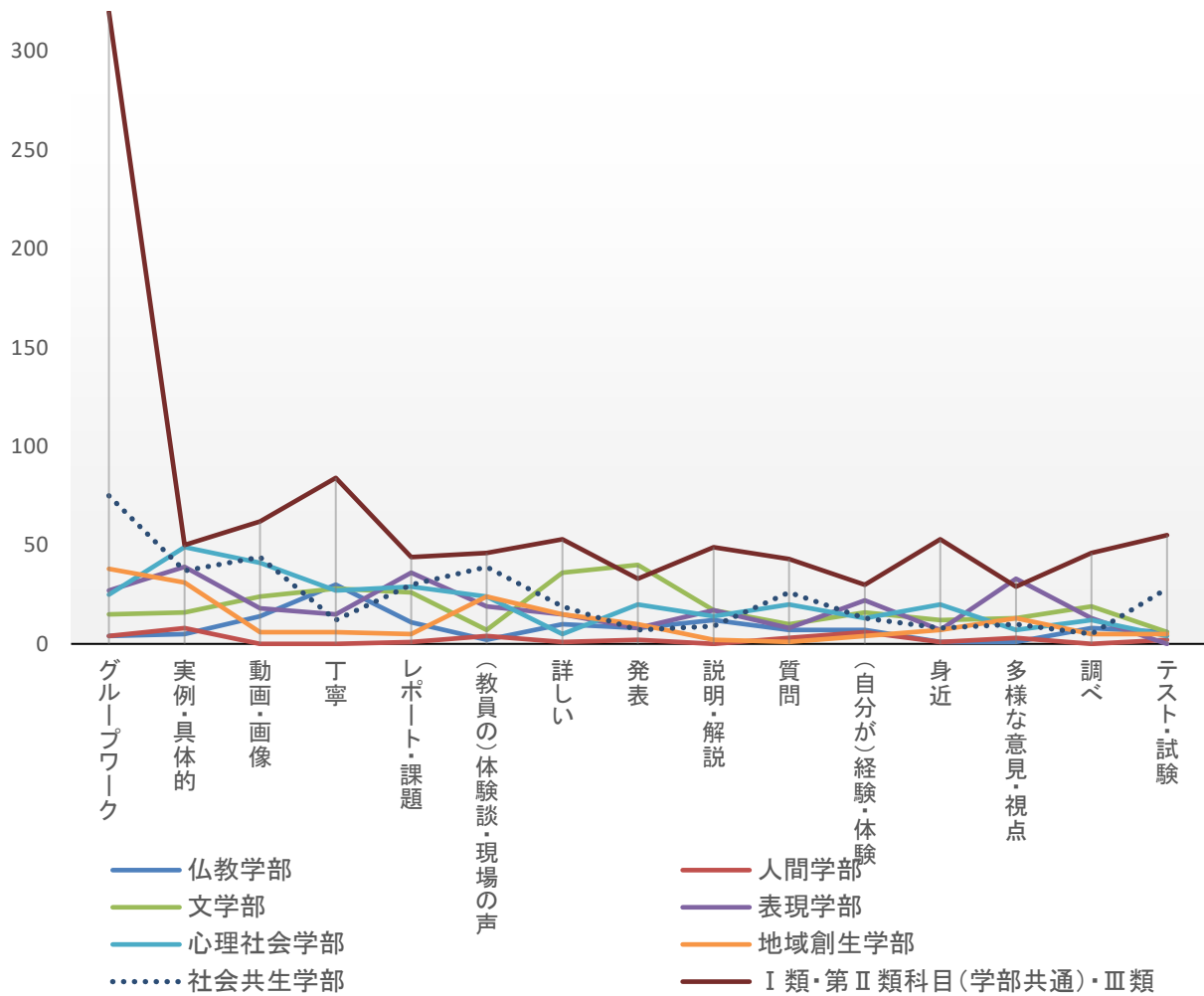
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【全学】

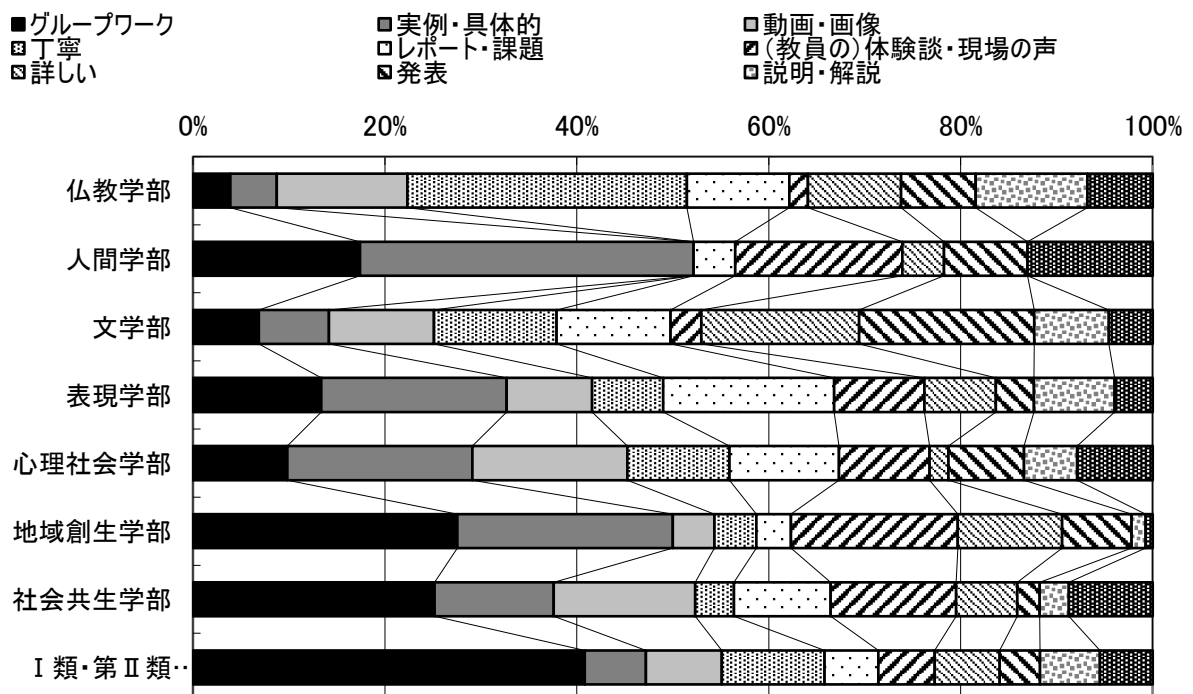


キーワード	主な内容	出現数
グループワーク	グループワークでの共同作業により学びが深まった／会話・意見交換により学び・理解が深まった／グループワークが学習意欲につながった	510
実例・具体的	実例・具体例で分かりやすい、理解が深まった／具体的で分かりやすかった／具体的に理解できた	238
動画・画像	動画・画像で分かりやすい、理解が深まった／動画・画像による説明が分かりやすい	212
丁寧	丁寧な授業、解説、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、質問対応、添削、フィードバック、アドバイス、コメント	203
レポート・課題	レポート・課題に取り組むことによって理解が深まった／レポート・課題の出し方や評価方法がよかった ※「レポート・課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に分類	183
(教員の)体験談・現場の声	現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった／先生の経験談・体験談を聞くことによって理解が深まった	166
詳しい	詳しく学べた／詳しく知ることができた／細かい内容を学べた	155
発表	発表を行って（発表を見て）、ためになった、身についた、理解が深まった ※「グループで発表できてよかった」は「グループワーク」に分類	128
説明・解説	(授業について) 説明・解説が分かりやすい ※「丁寧な説明・解説」は「丁寧」に、「実例による説明・具体的な説明が分かりやすい」は「実例・具体的」に、「動画・画像による説明が分かりやすい」は「動画・画像」に分類	120
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	119
(自分が)経験・体験	〇〇を経験・体験できてよかった、理解が深まった、学ぶ意欲が高まった	114
身近	身近なテーマで分かりやすい／身近に感じられた	109
多様な意見・視点	多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった／多様な視点を学べた ※「グループワークで意見を聞けてよかった」は「グループワーク」に分類	109
調べ	調べることによって理解が深まった	109
テスト・試験	テストがあることによって理解が深まった	107

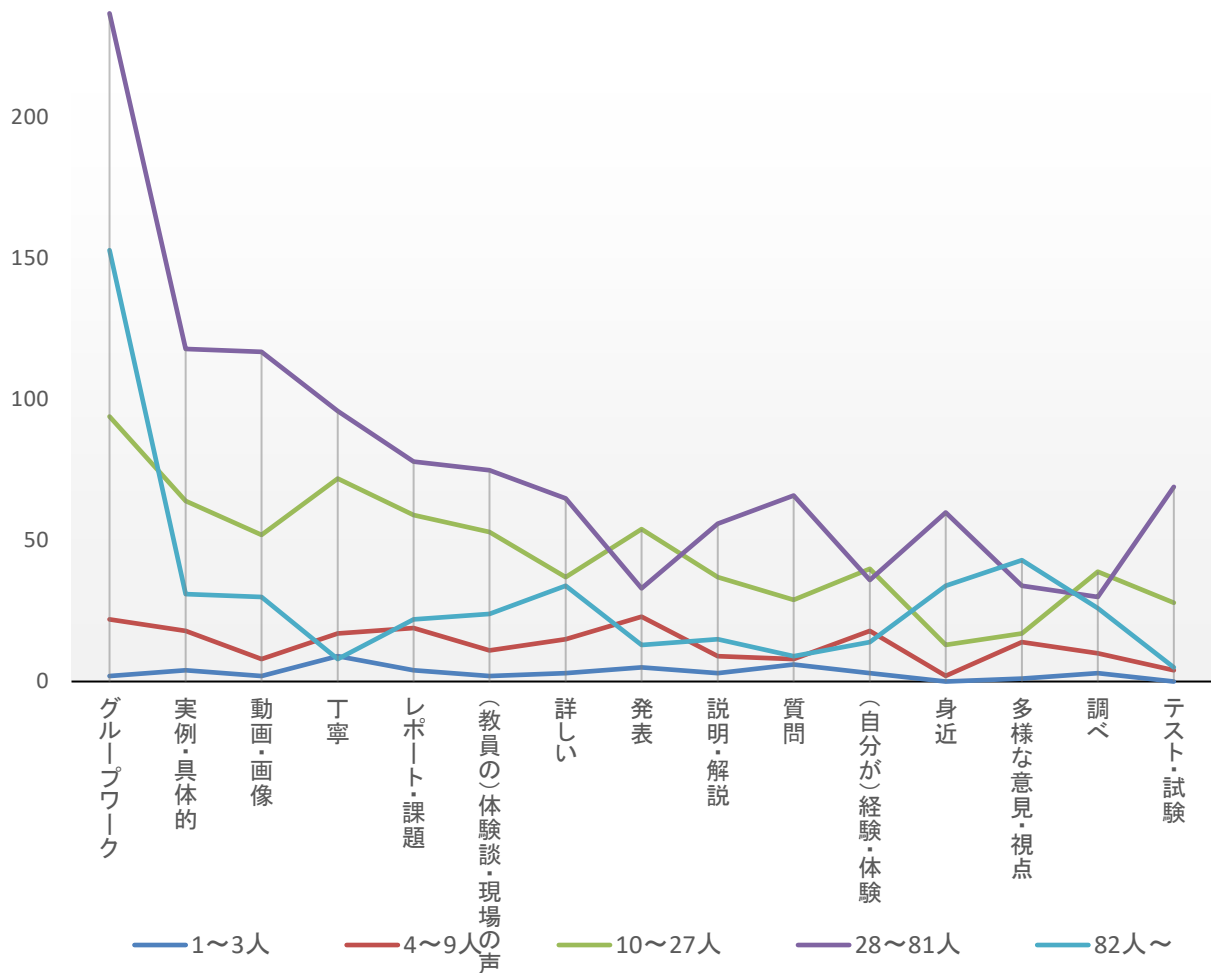
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【学部別】



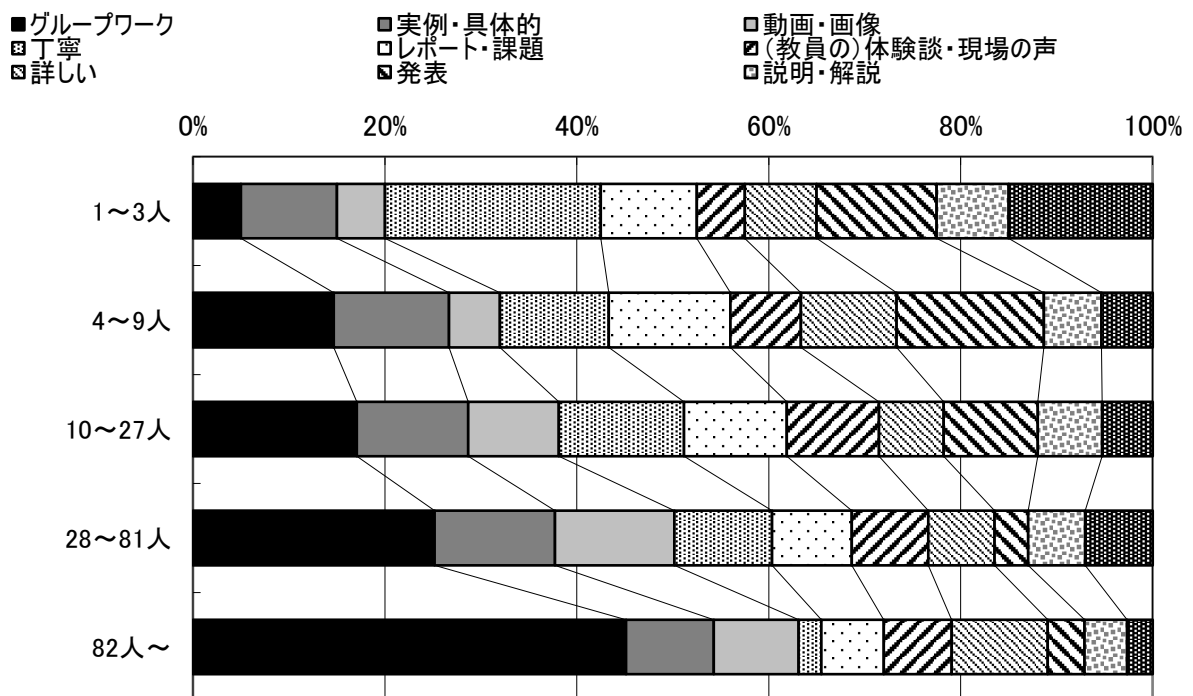
上位10項目の学部別割合



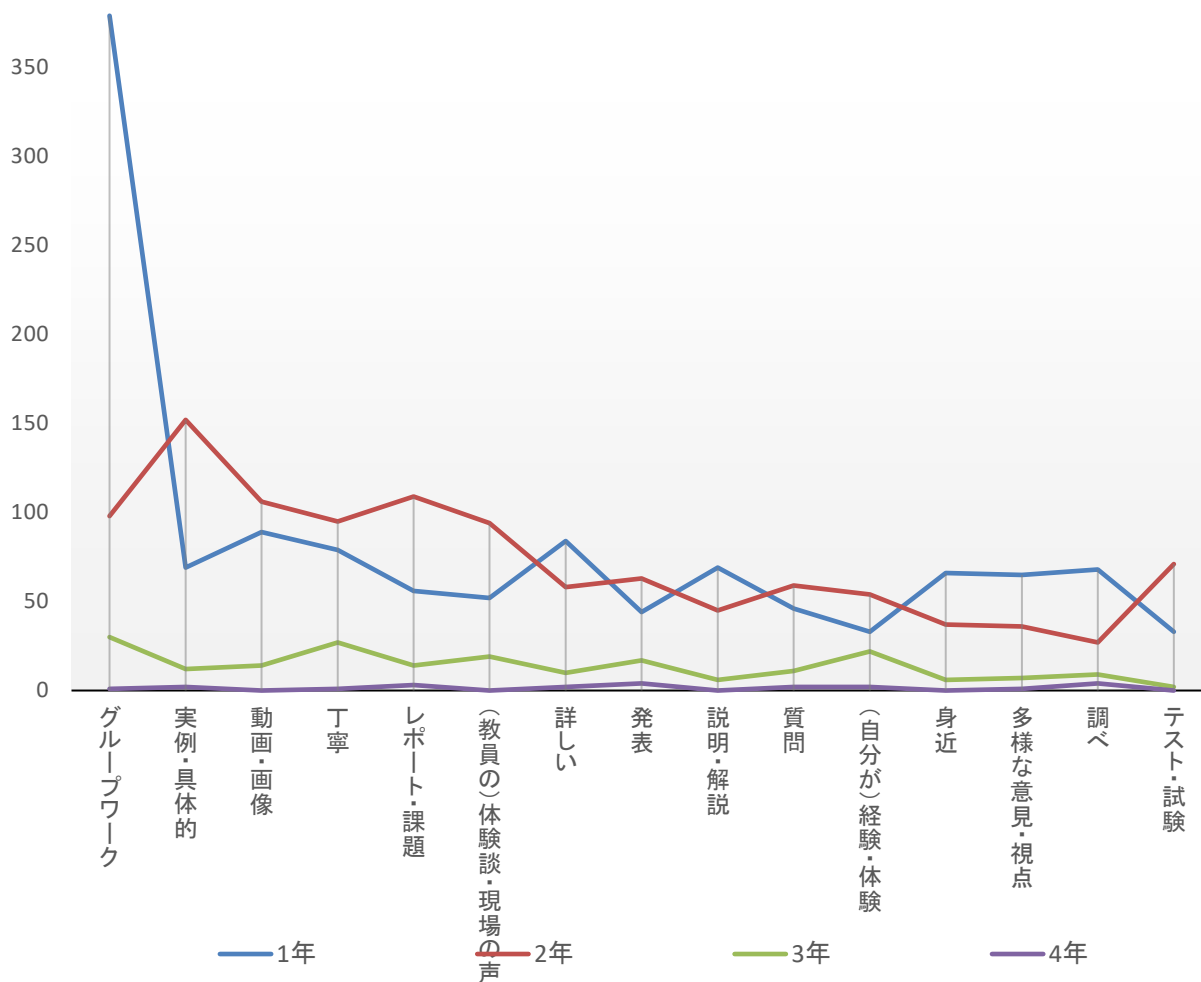
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【回答人数帯別】



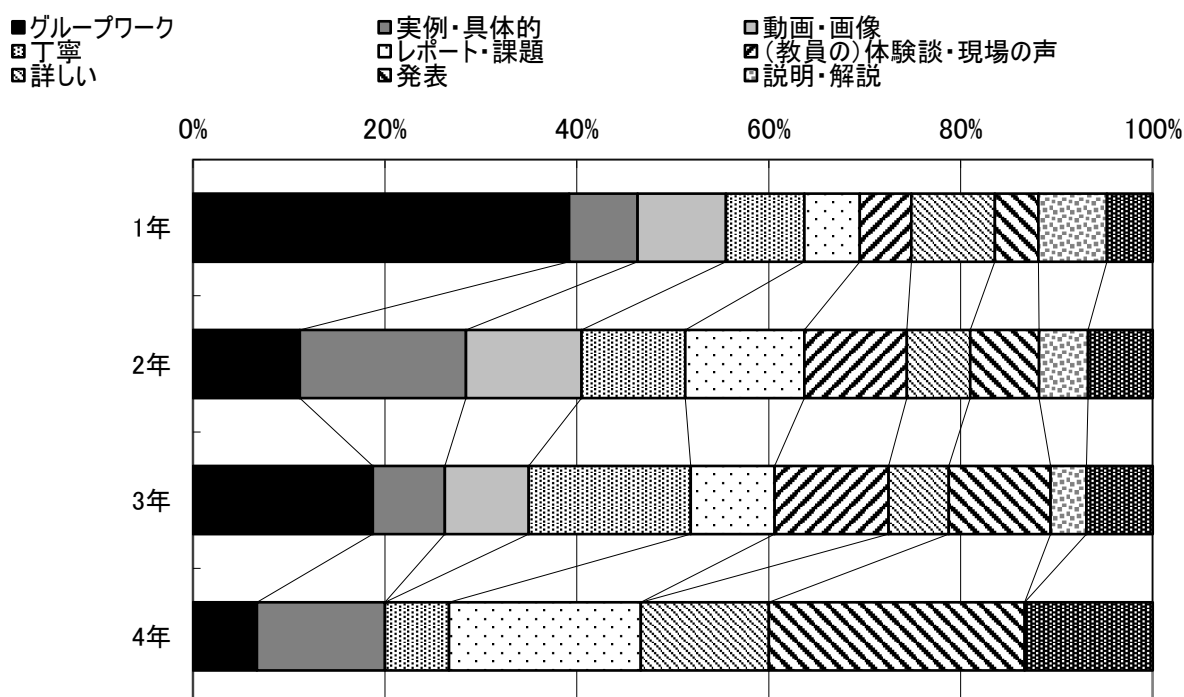
上位10項目の回答人数帯別割合



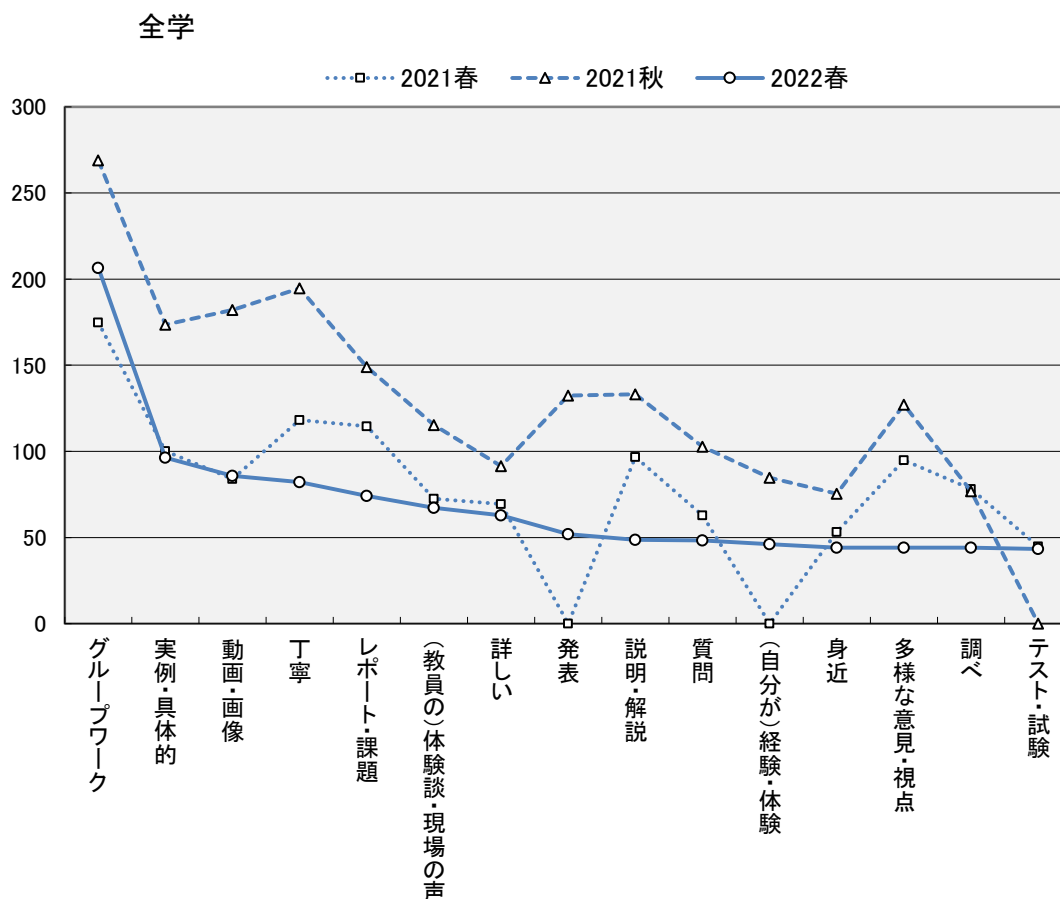
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【出現率前回比較】全学



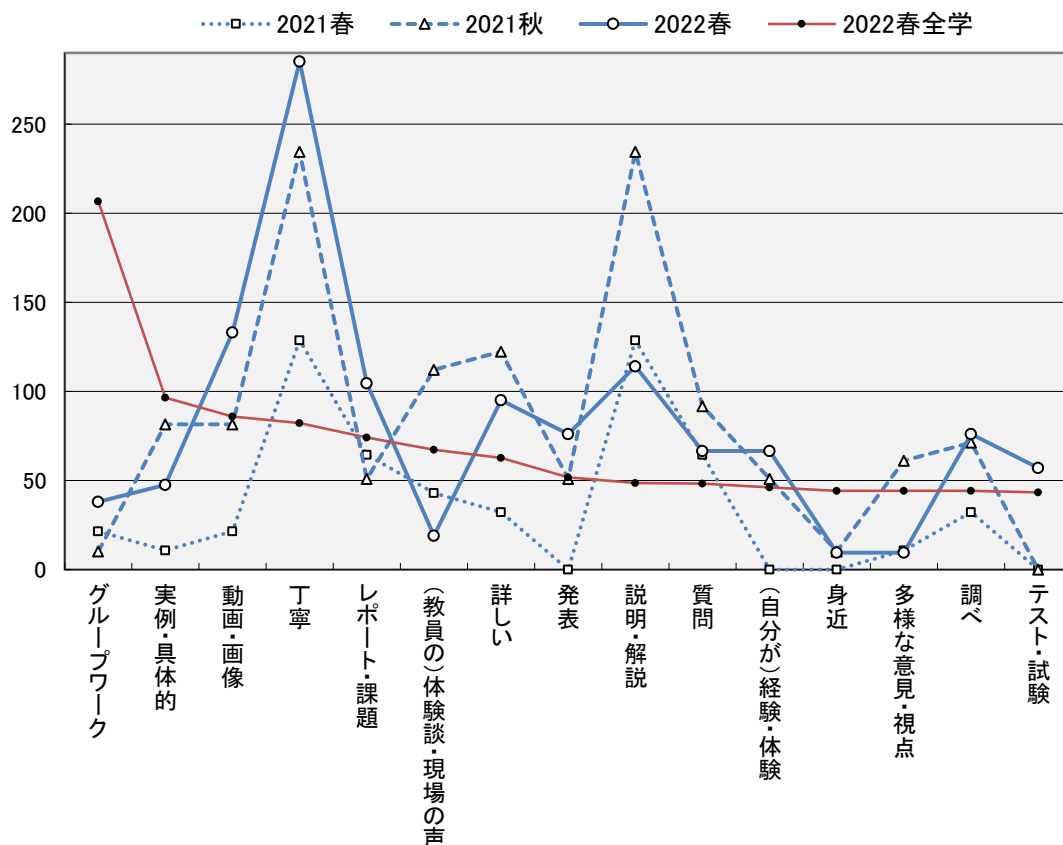
「出現率」について

- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。  
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。  
出現率は下記の式で計算されます。  
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10<sup>4</sup>  
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。

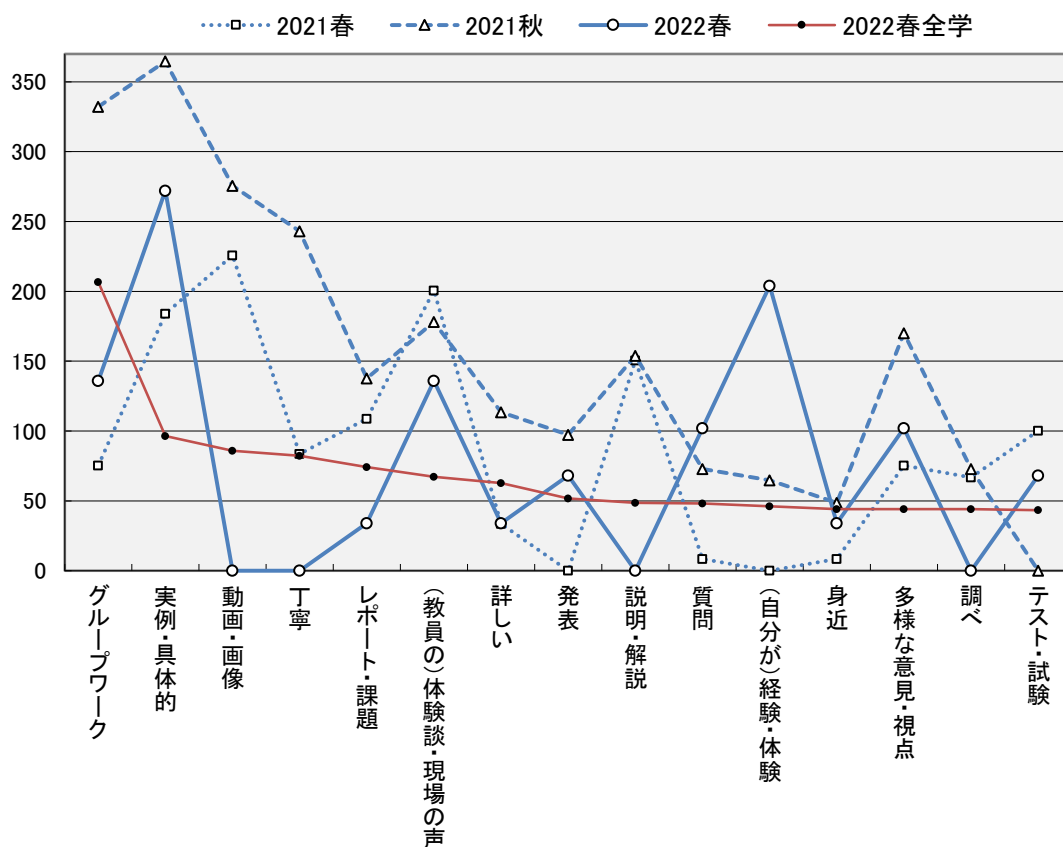


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

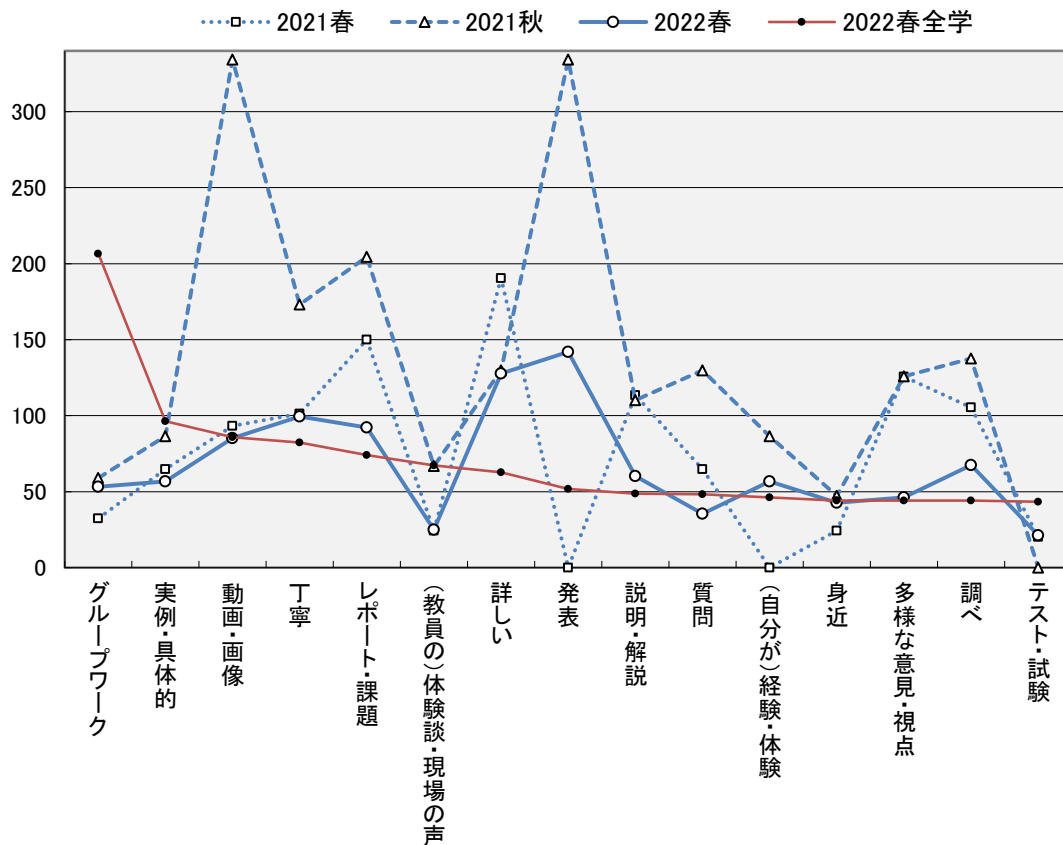


《人間学部》

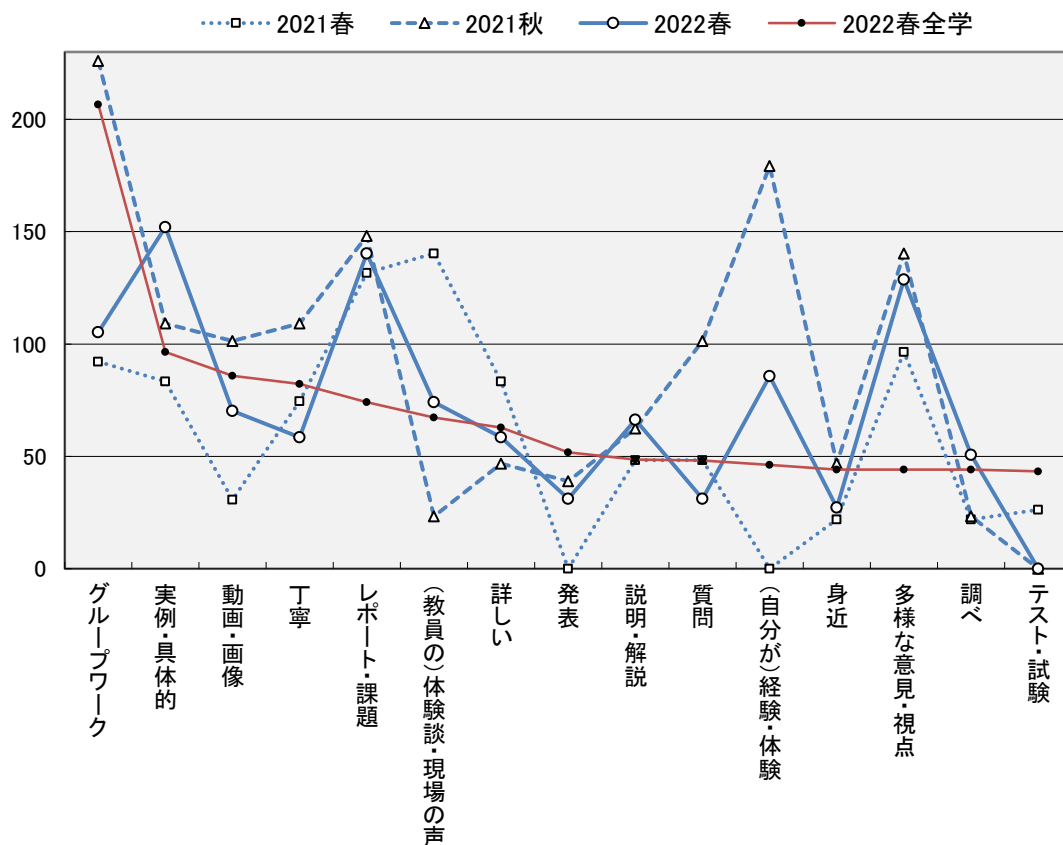


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

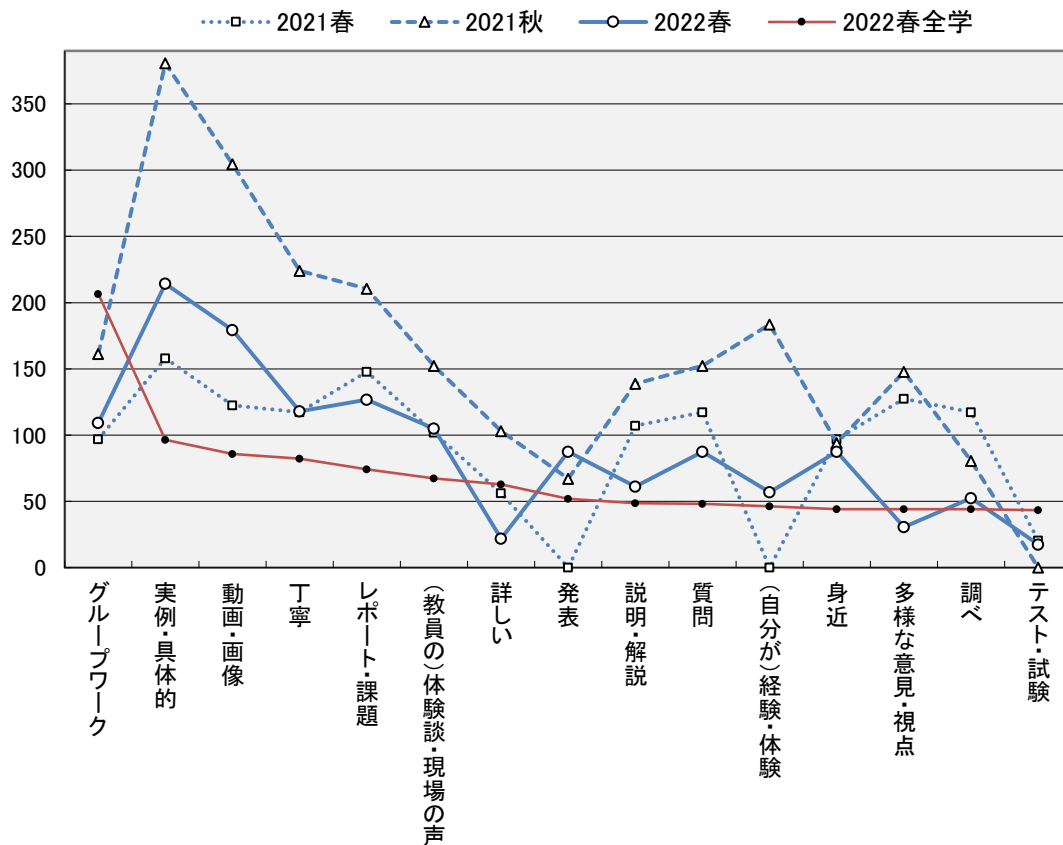


《表現学部》

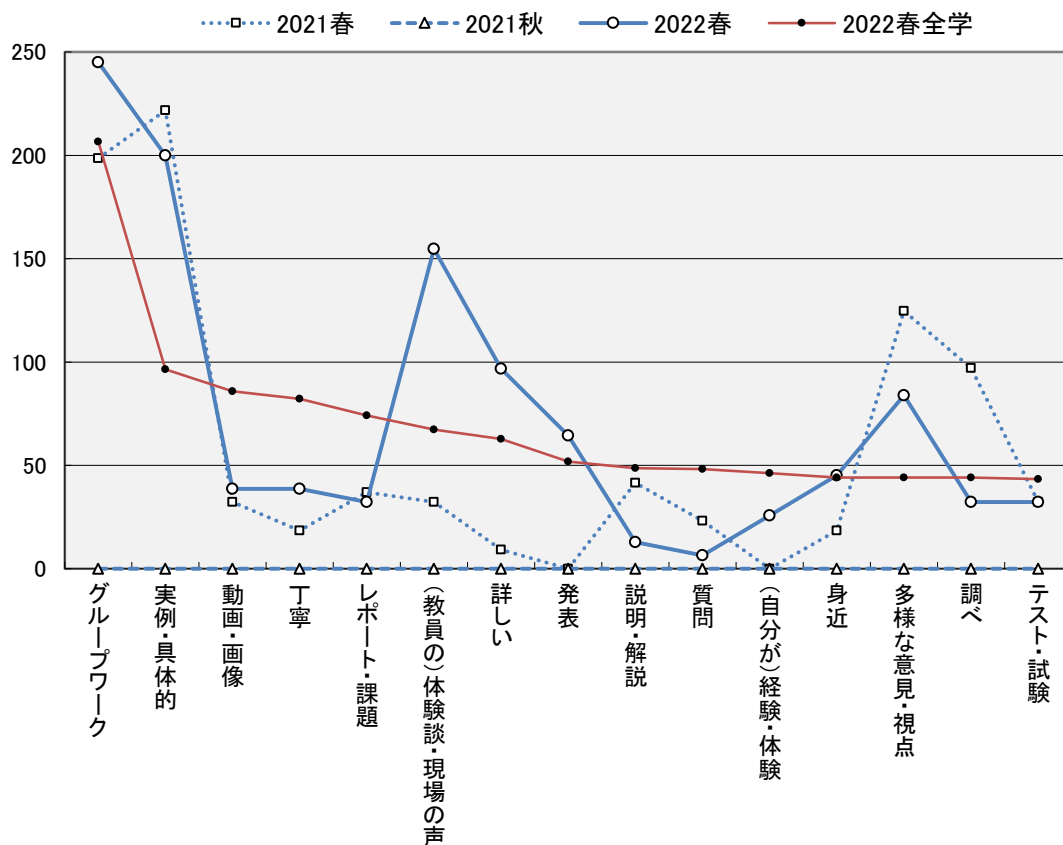


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
 【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

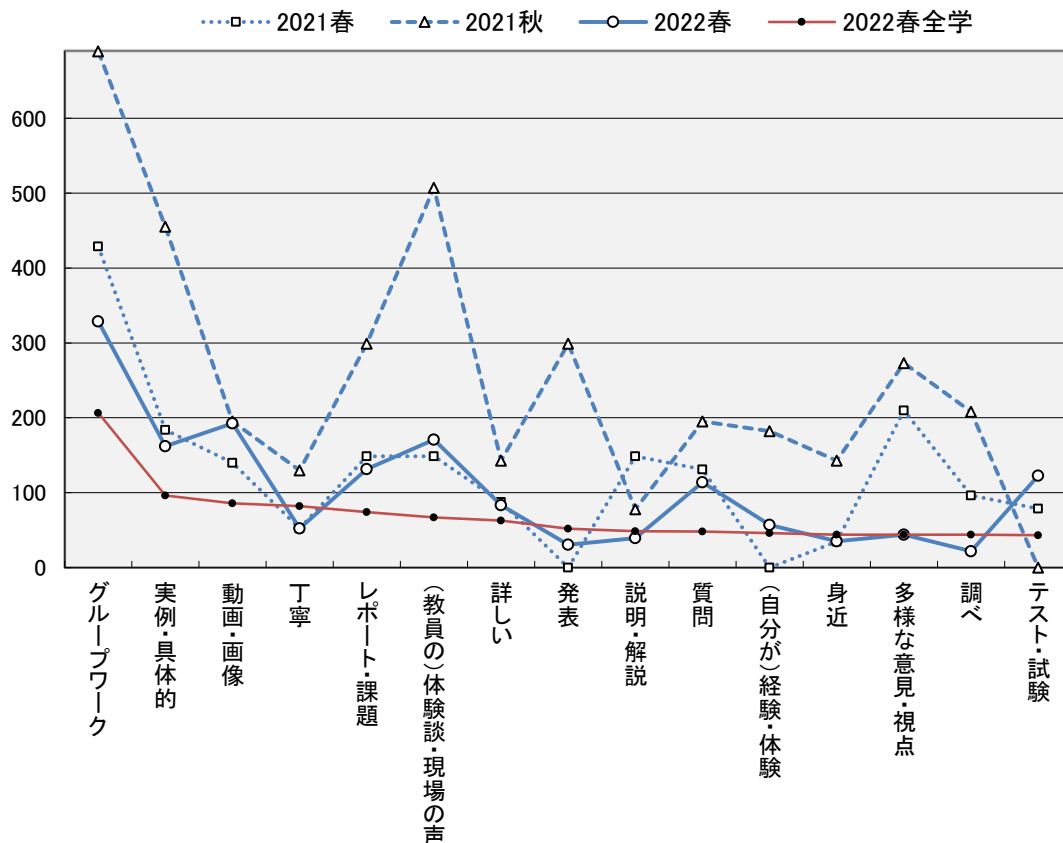


《地域創生学部》

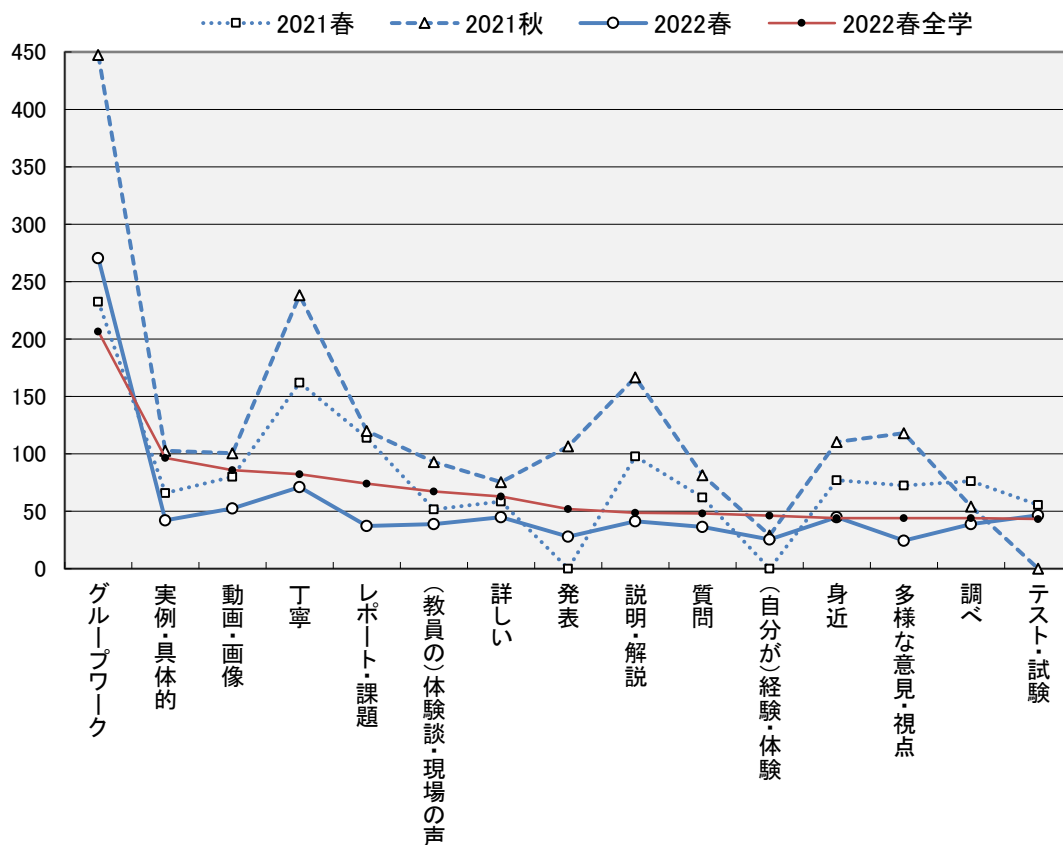


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【出現率前回比較】学部別

《社会共生学部》

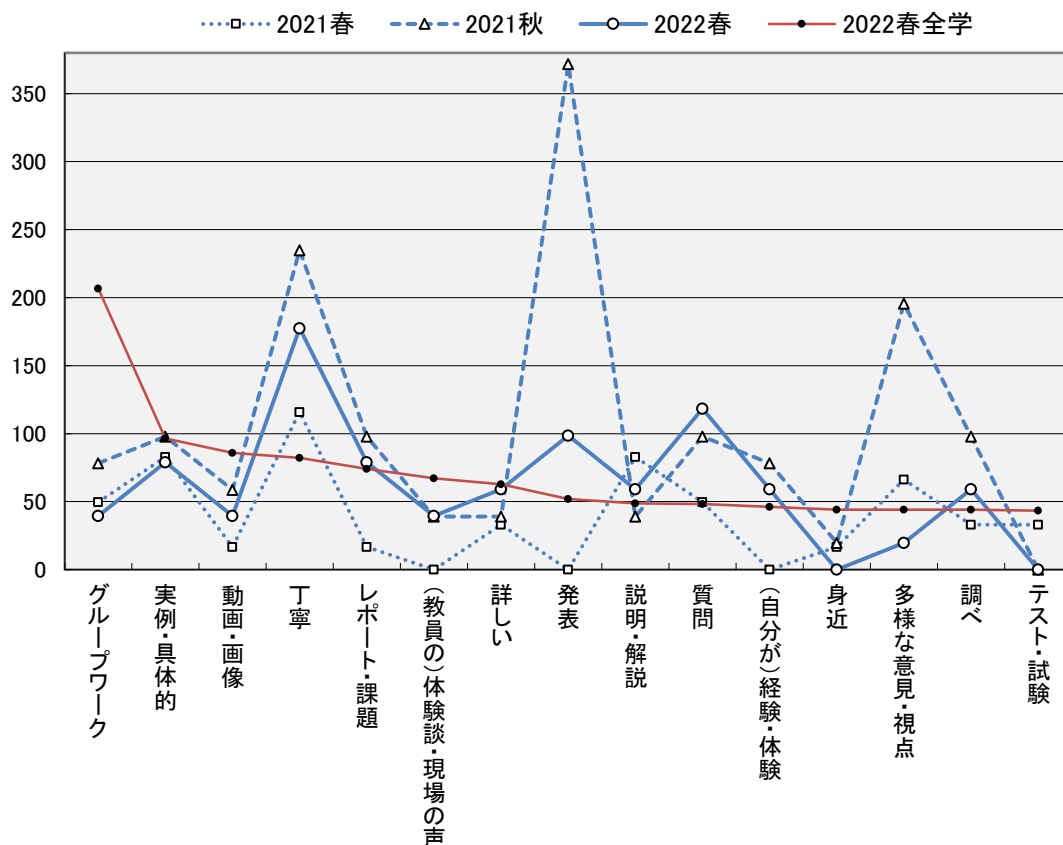


《Ⅰ類・Ⅱ類科目(学部共通)・Ⅲ類》

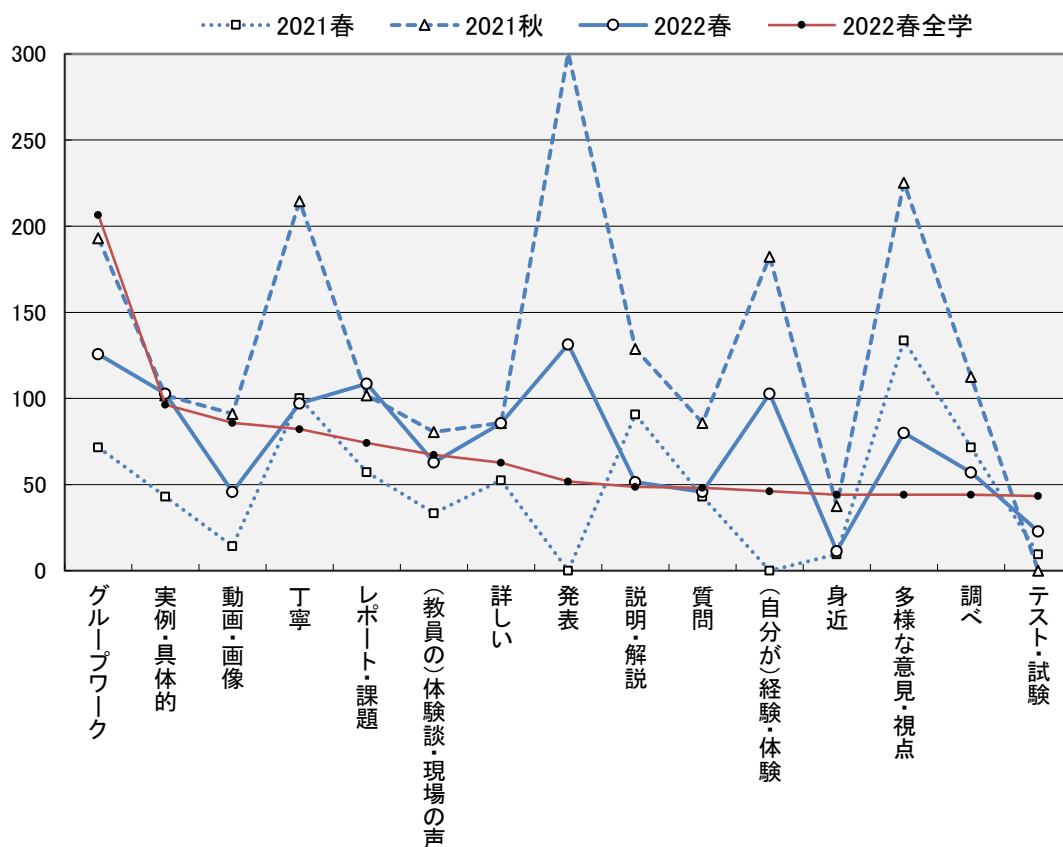


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《1～3人》

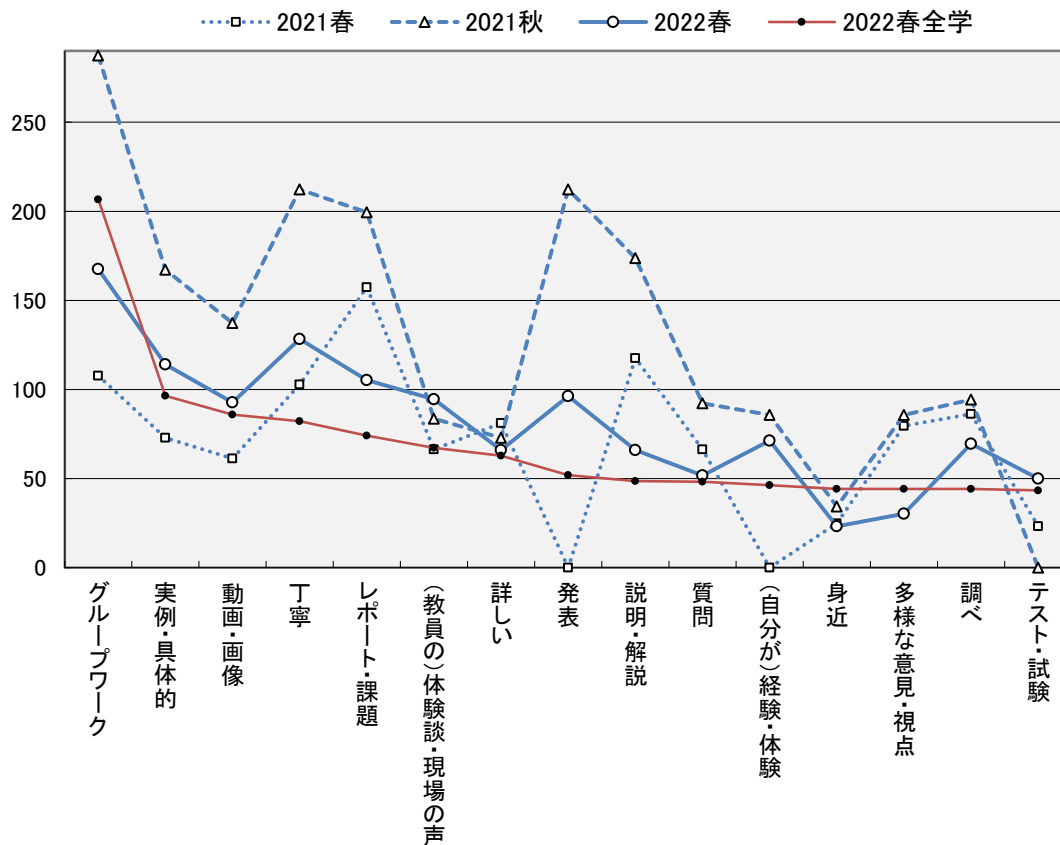


《4～9人》

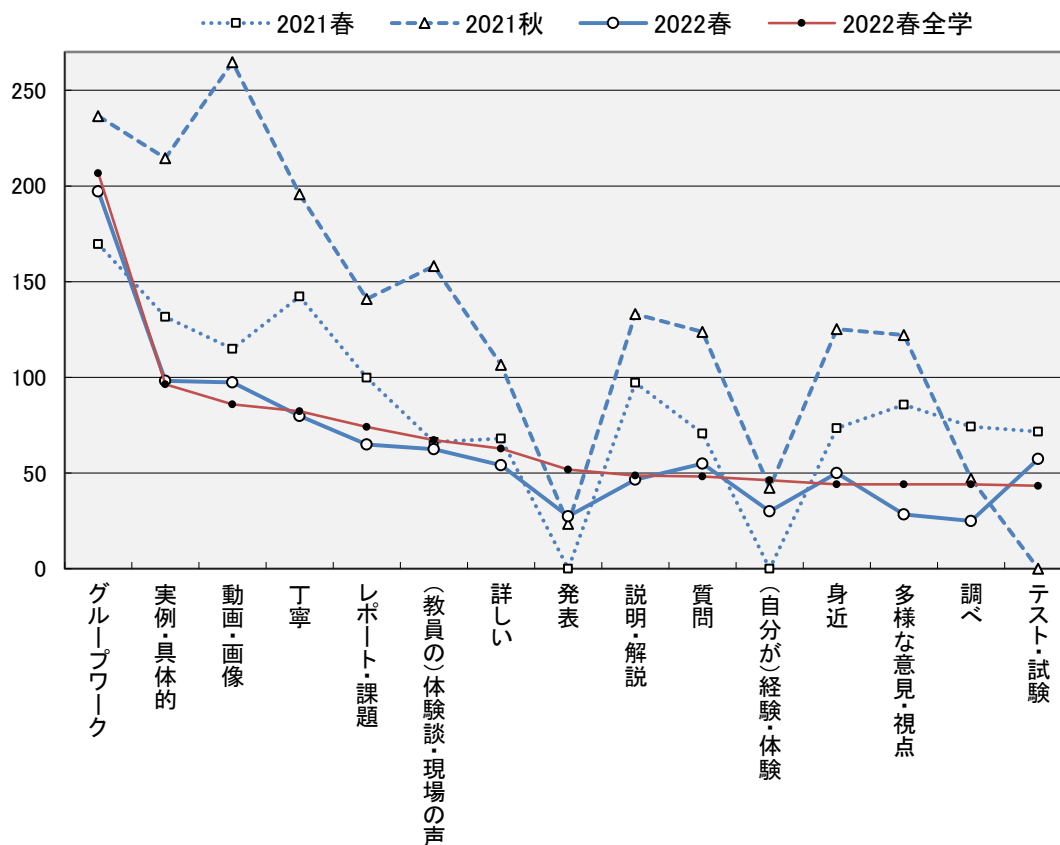


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
 【出現率前回比較】 回答人数帯別

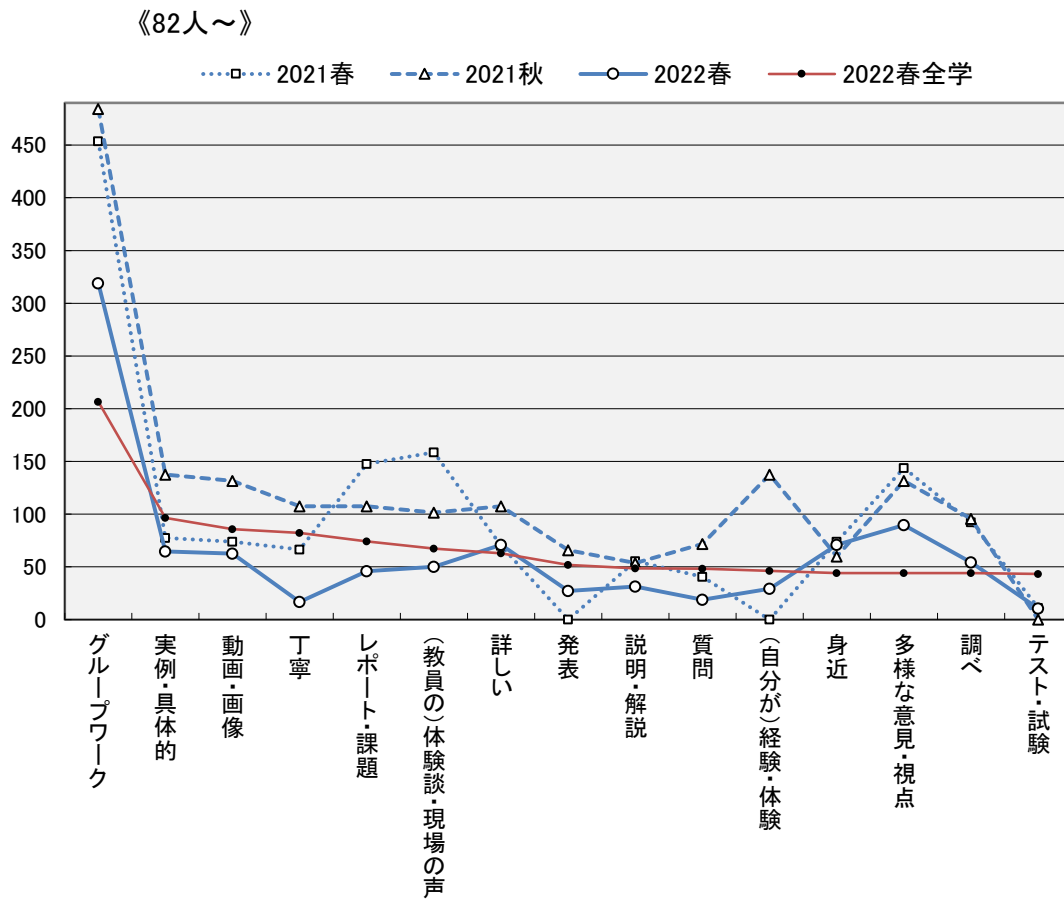
《10～27人》



《28～81人》

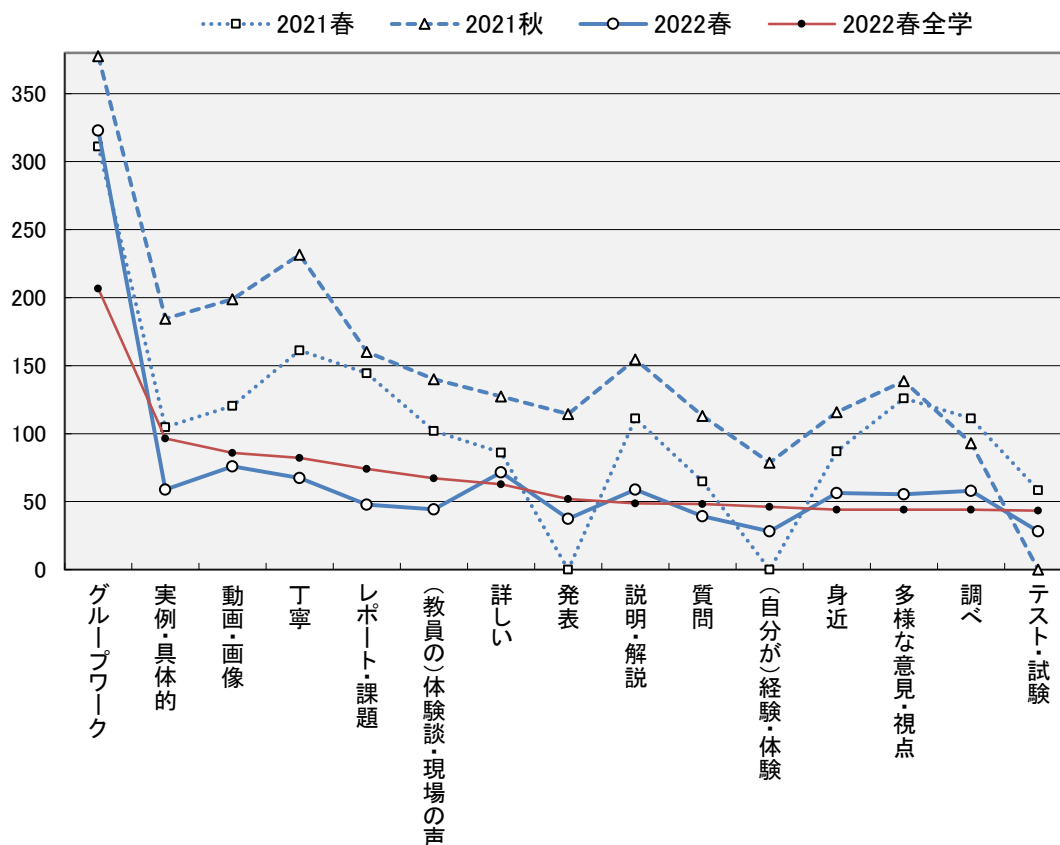


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
 【出現率前回比較】回答人数帯別

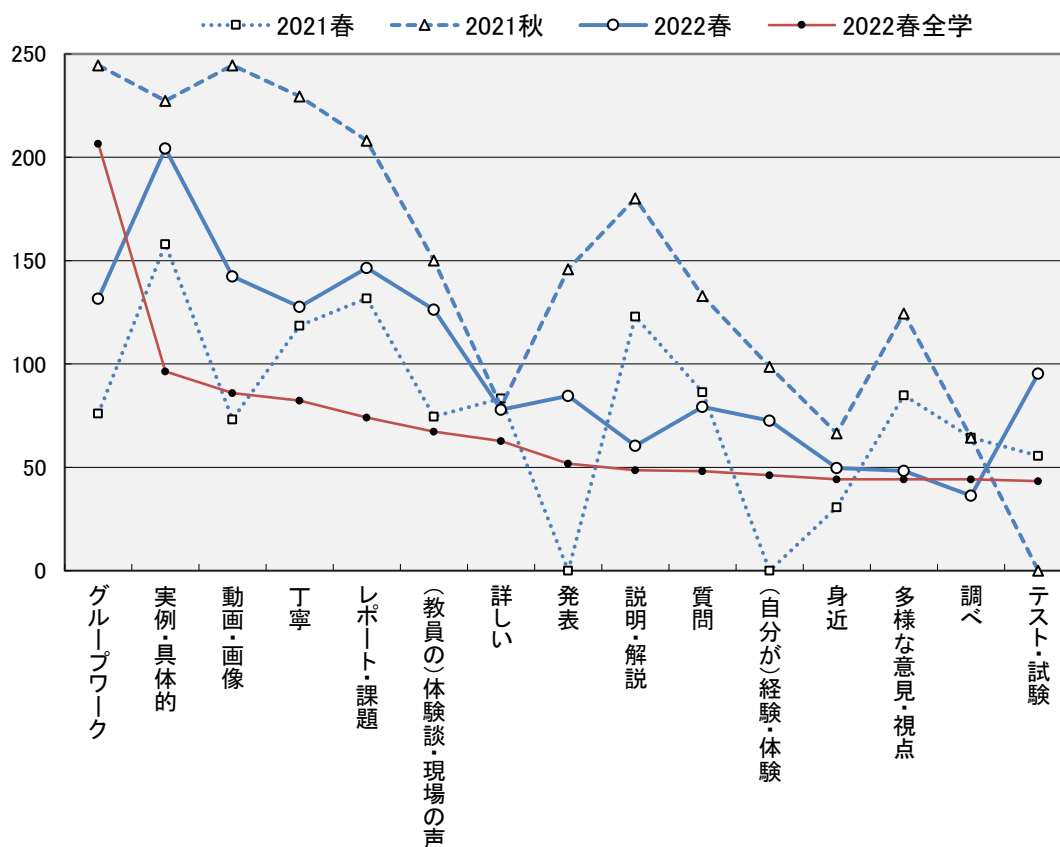


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【出現率前回比較】学年別

《1年》



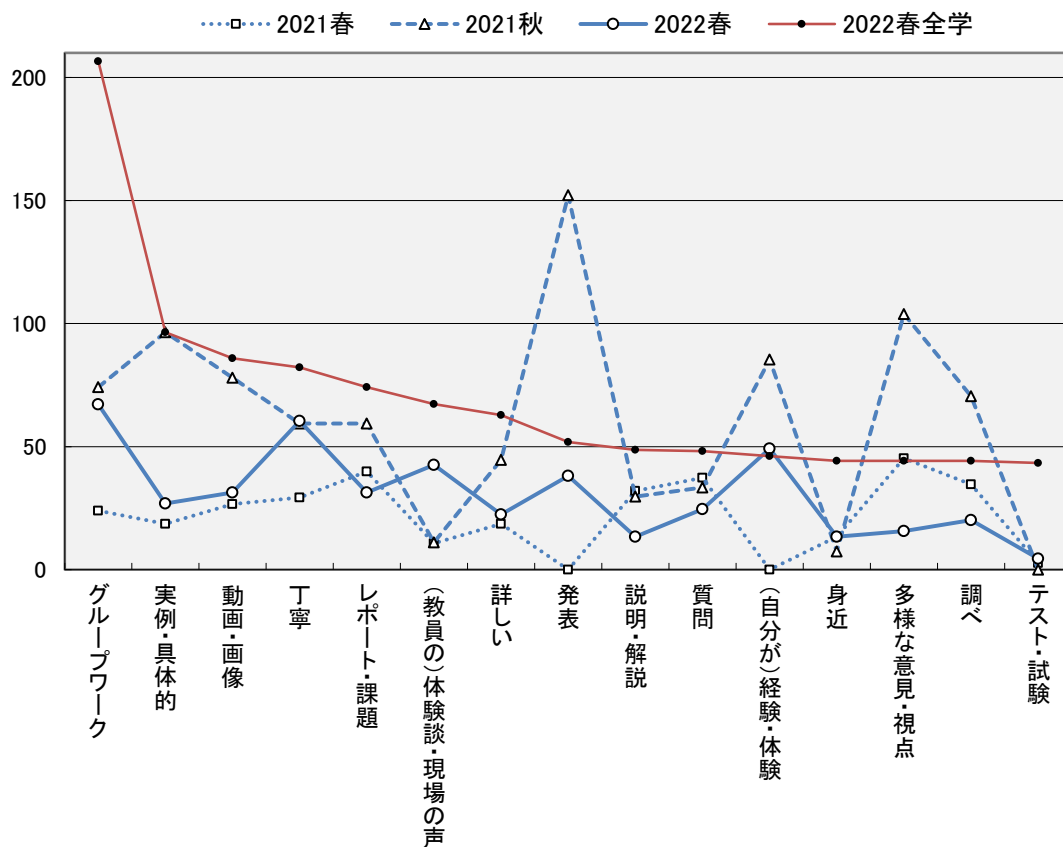
《2年》



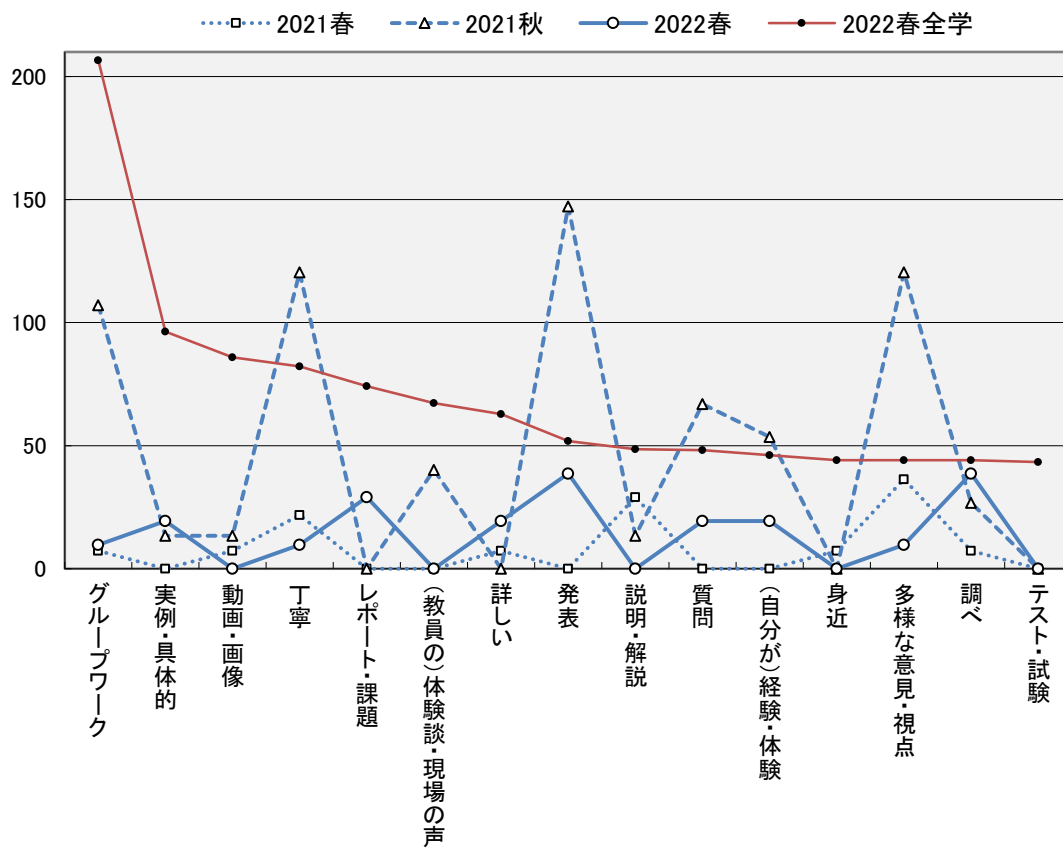


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>  
【出現率前回比較】学年別

《3年》



《4年》

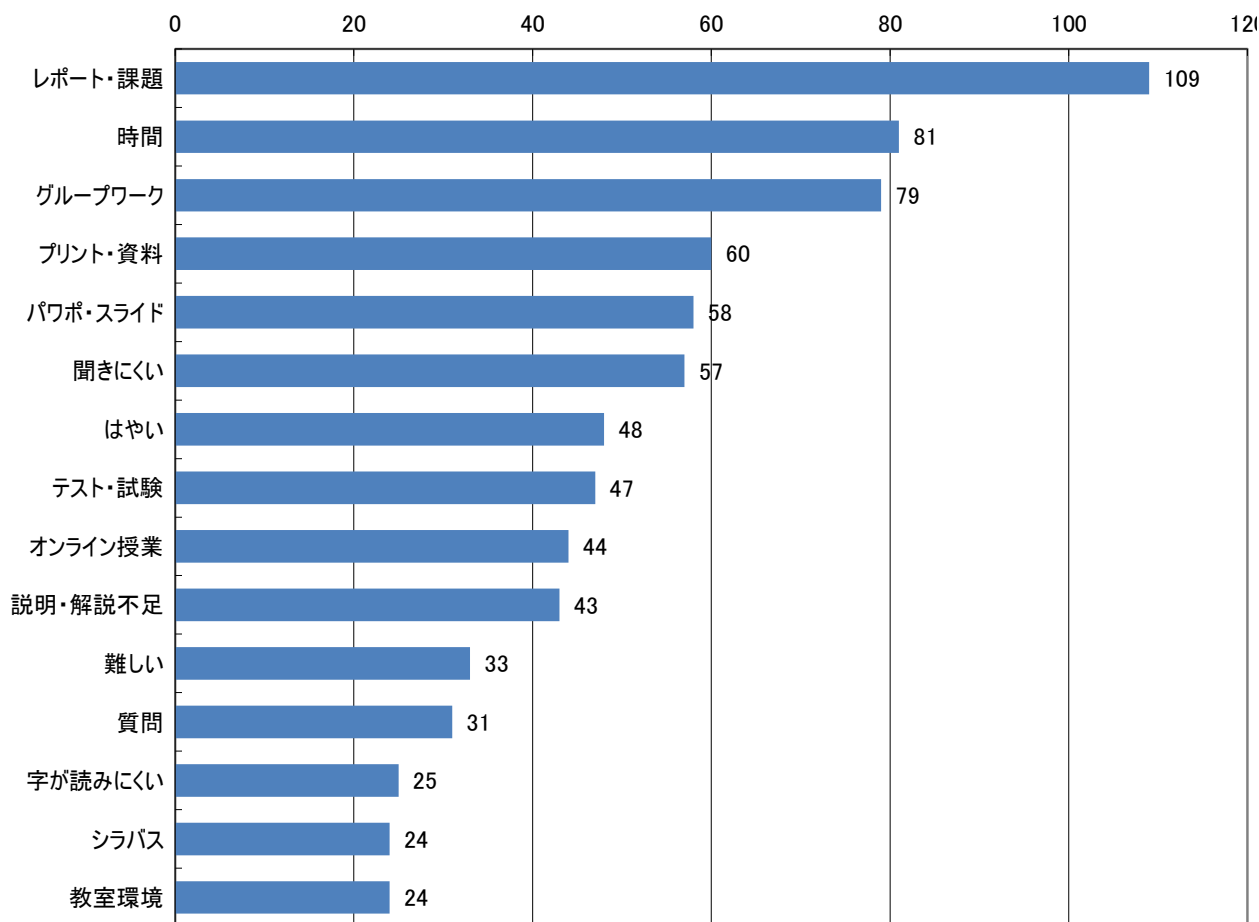




**【改善点】**

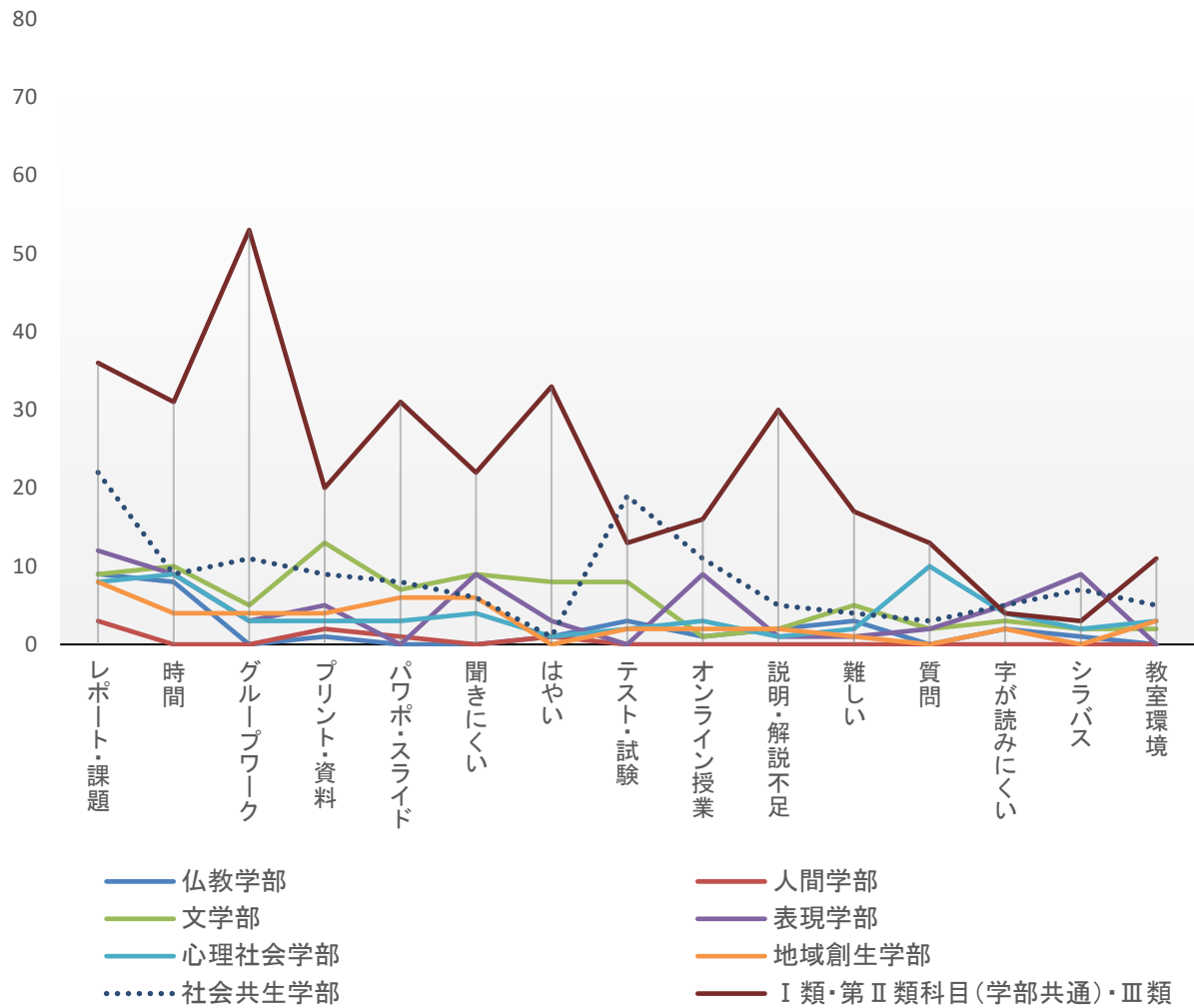
改善できる点

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【全学】

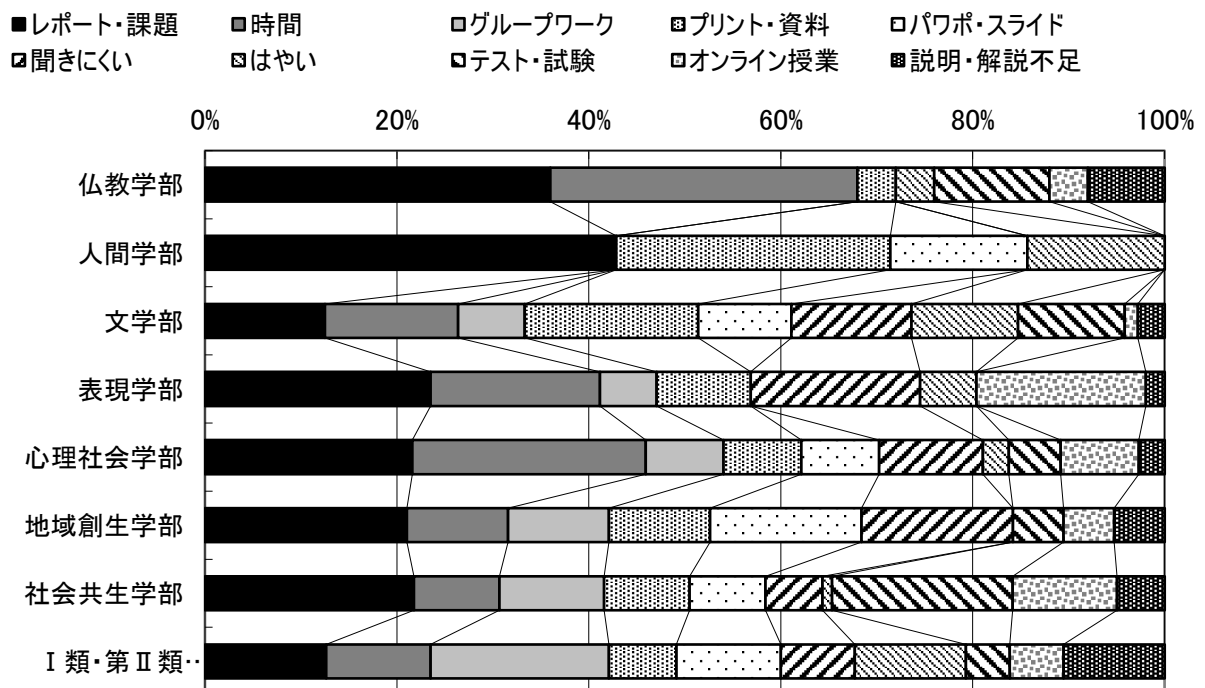


キーワード	主な内容	出現数
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい／課題の答えが欲しい／課題が多い、難しい／課題の提出方法を説明してほしい	109
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／授業時間以外の負担が大きい／資料の配布時間・課題の締め切り時間を固定してほしい ※「スライドを変える時間が短い」は「はやい」に、「テスト時間が短い、足りない」は「テスト」に分類。	81
グループワーク	グループワークの回数、分け方、実施方法を改善してほしい	79
プリント・資料	プリント、資料を配布されるだけの授業で理解しづらかった／プリント、資料が分かりにくい／プリント、資料の内容、配布方法を改善してほしい ※「プリント、資料の字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に分類。	60
パワポ・スライド	パワーポイント、スライドが分かりにくい、見にくい／パワーポイント、スライドの内容、配布方法を改善してほしい ※「字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に、「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類。	58
聞きにくい	声が小さい、聞き取りづらい／声が大きすぎる／（声が小さいので）マイクを使ってほしい／（うるさいので）マイクを使わないでほしい ※「早口で聞きにくい」は「はやい」に、「周囲がうるさい、私語が多い」は「うるさい」に分類。	57
はやい	進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない	48
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない テスト中はミュートにしてほしい	47
オンライン授業	動画配信してほしかった／動画配信期間が短かった／ほかの方法（ツール）がよかった／課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしかった／オンライン授業の進め方がよくなかった／対面の授業がよかった	44
説明・解説不足	（授業について）説明・解説が不足・不十分	43
難しい	授業・資料等が難しすぎる	33
質問	質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対しての回答に満足できない	31
字が読みにくい	黒板、パワポ、スライド、レジュメ、資料等の字が薄い、汚い、誤字脱字、字の量が多くて読みにくい、見にくい。 ※「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類。「障害物や距離などで読みにくい」は除く。	25
シラバス	シラバスに沿って授業をして欲しい／シラバスと授業内容が異なる	24
教室環境	教室が狭い、暑い、寒い、臭い／環境を改善してほしい	24

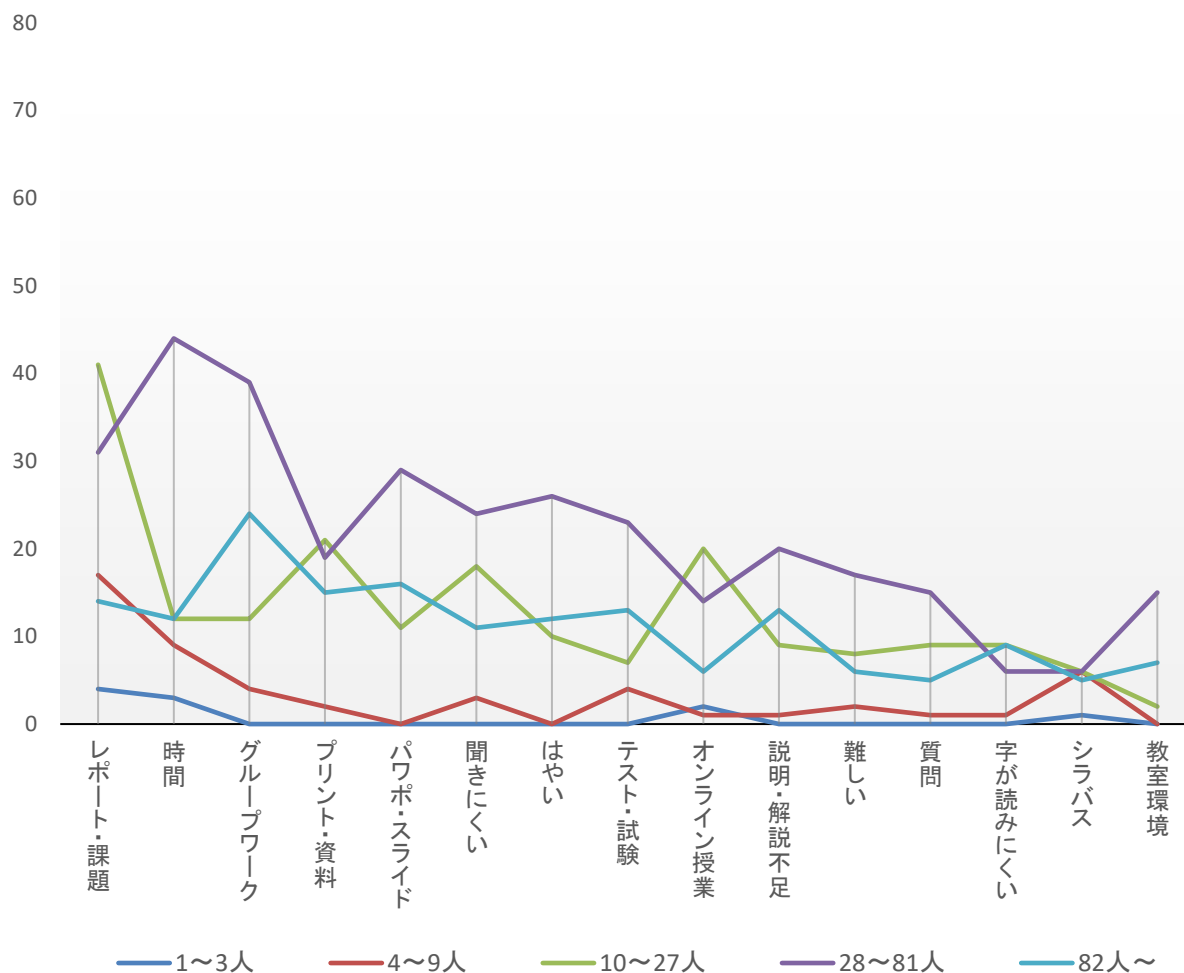
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【学部別】



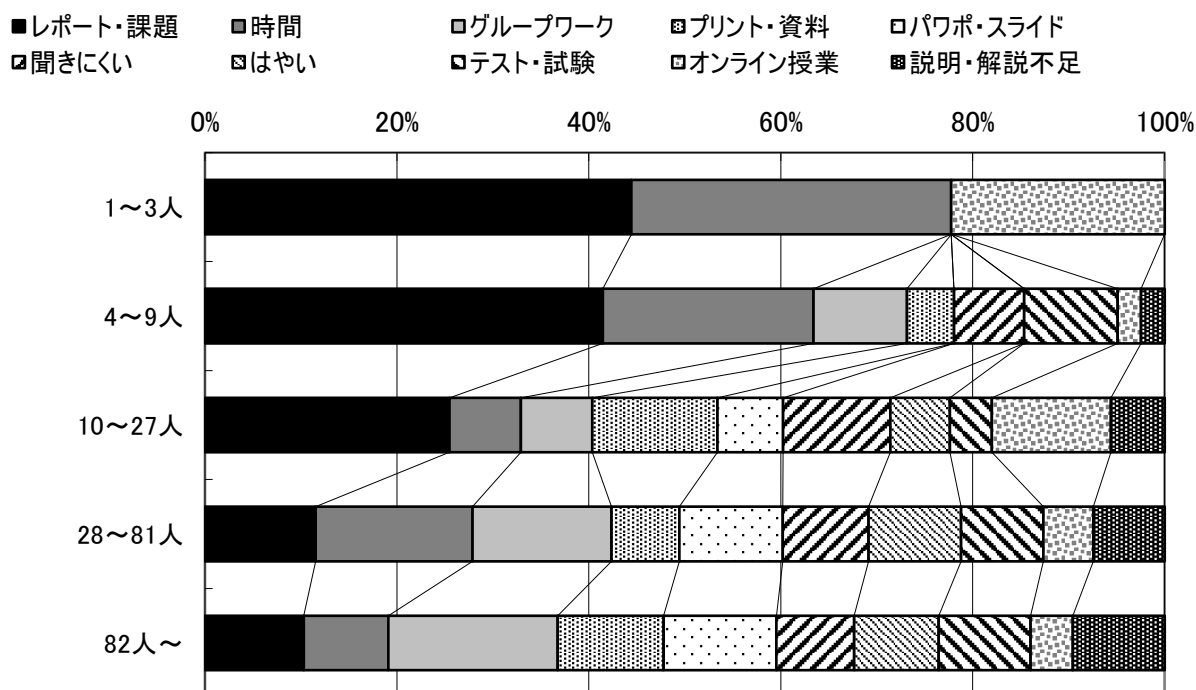
上位10項目の学部別割合



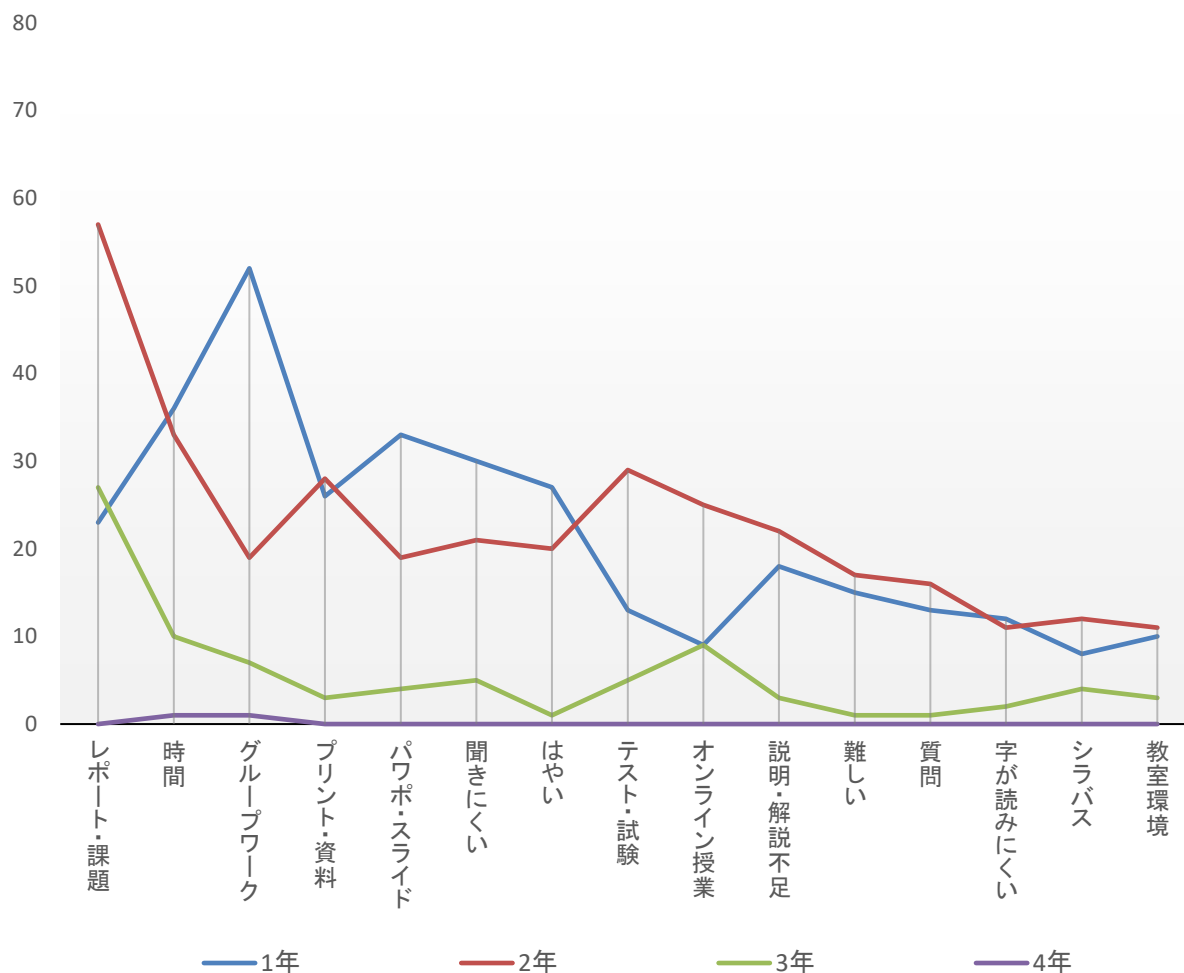
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【回答人数帯別】



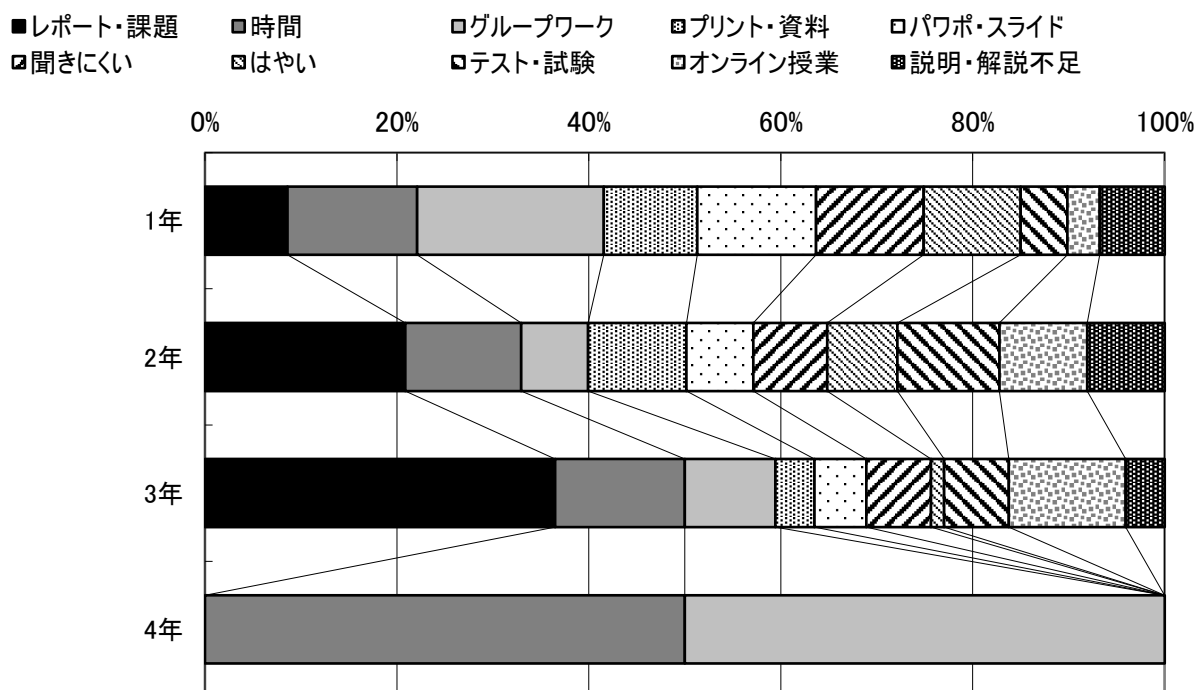
上位10項目の回答人数帯別割合



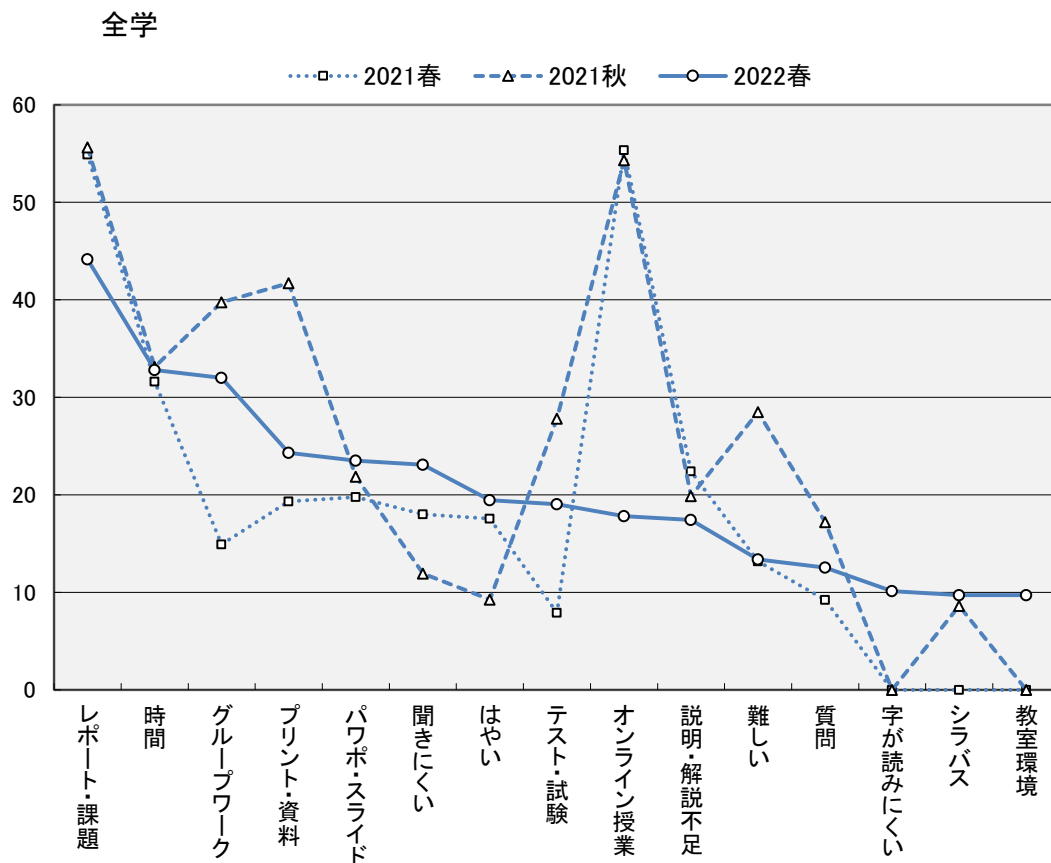
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【出現率前回比較】全学



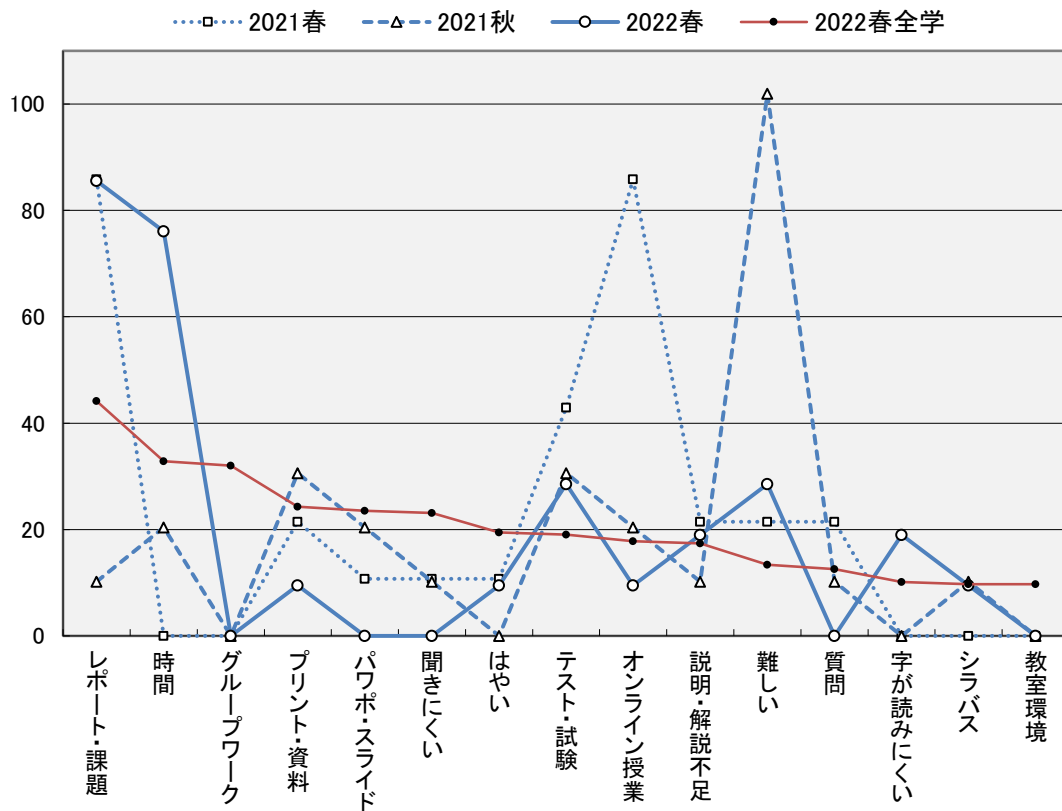
「出現率」について

- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。  
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。  
出現率は下記の式で計算されます。  
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10<sup>4</sup>  
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。

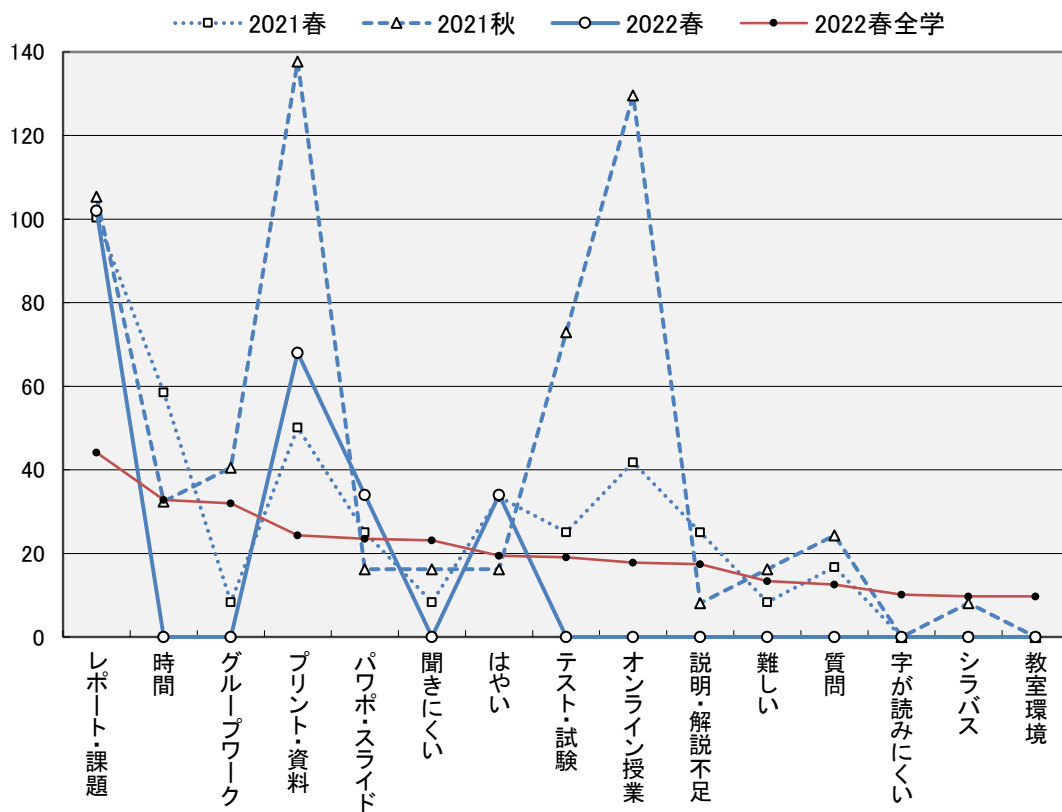


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

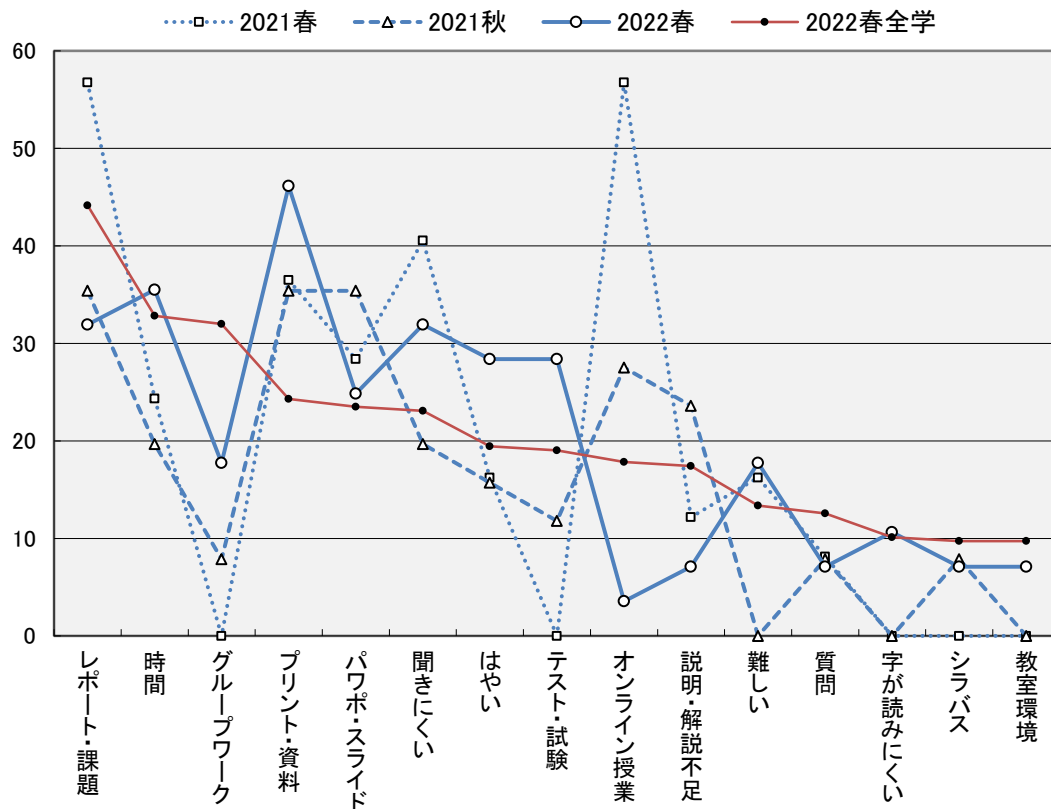


《人間学部》

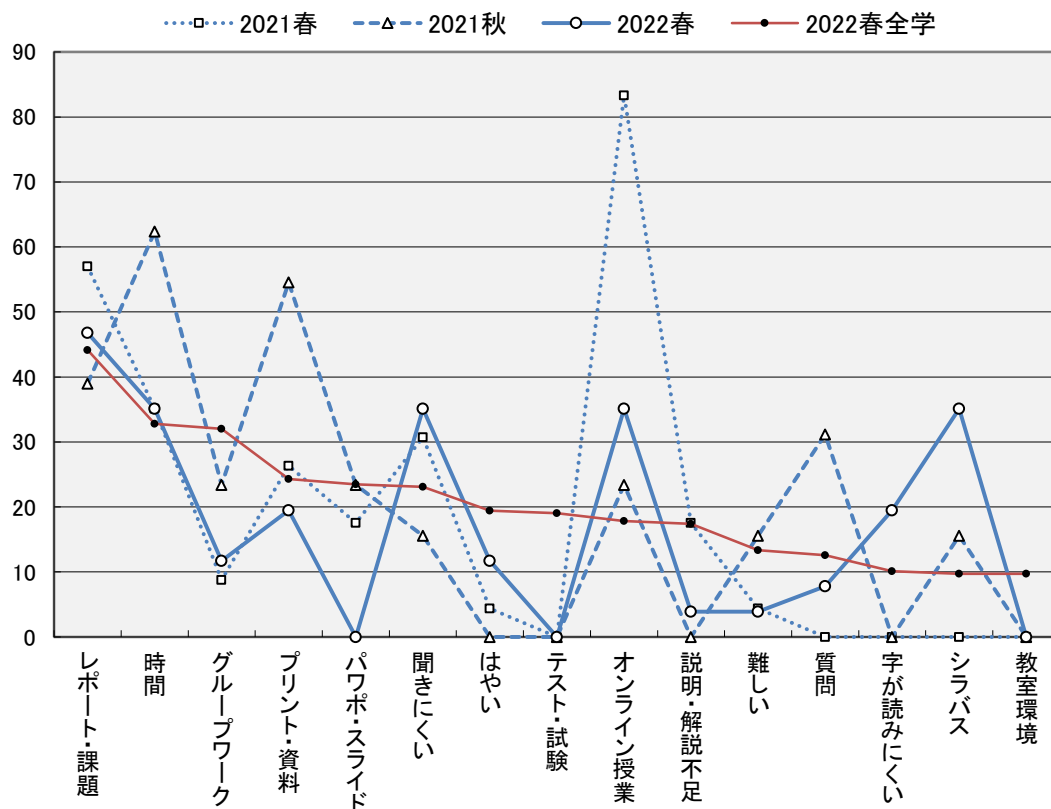


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

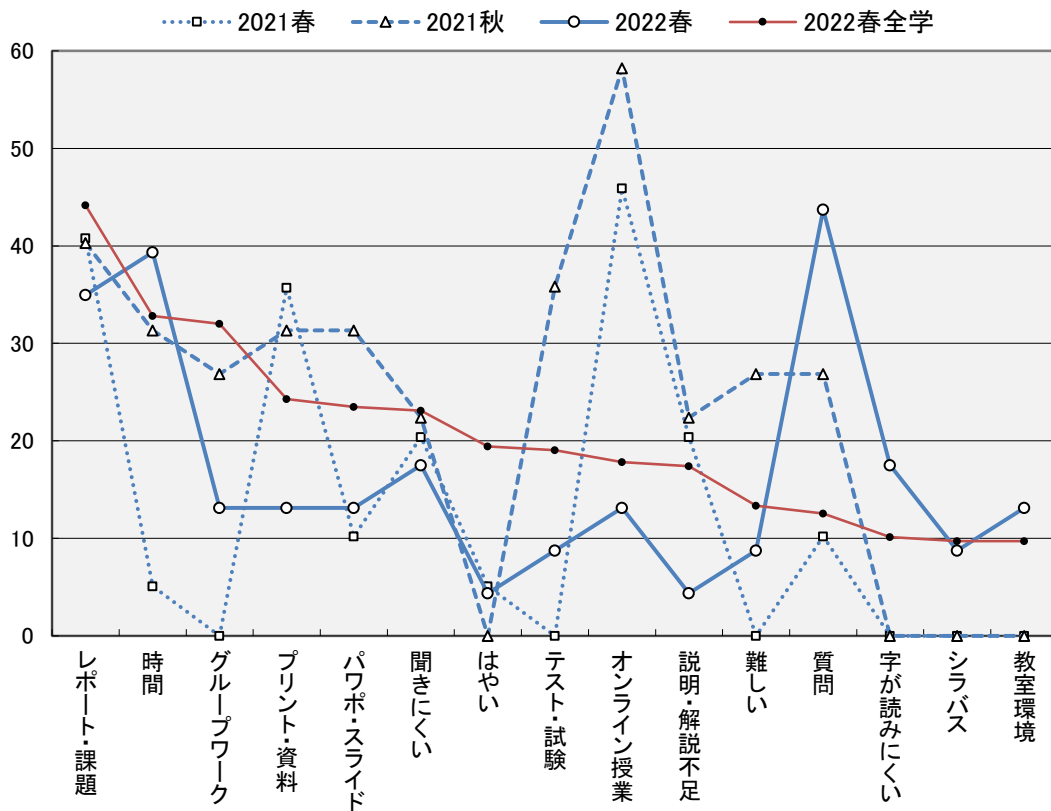


《表現学部》

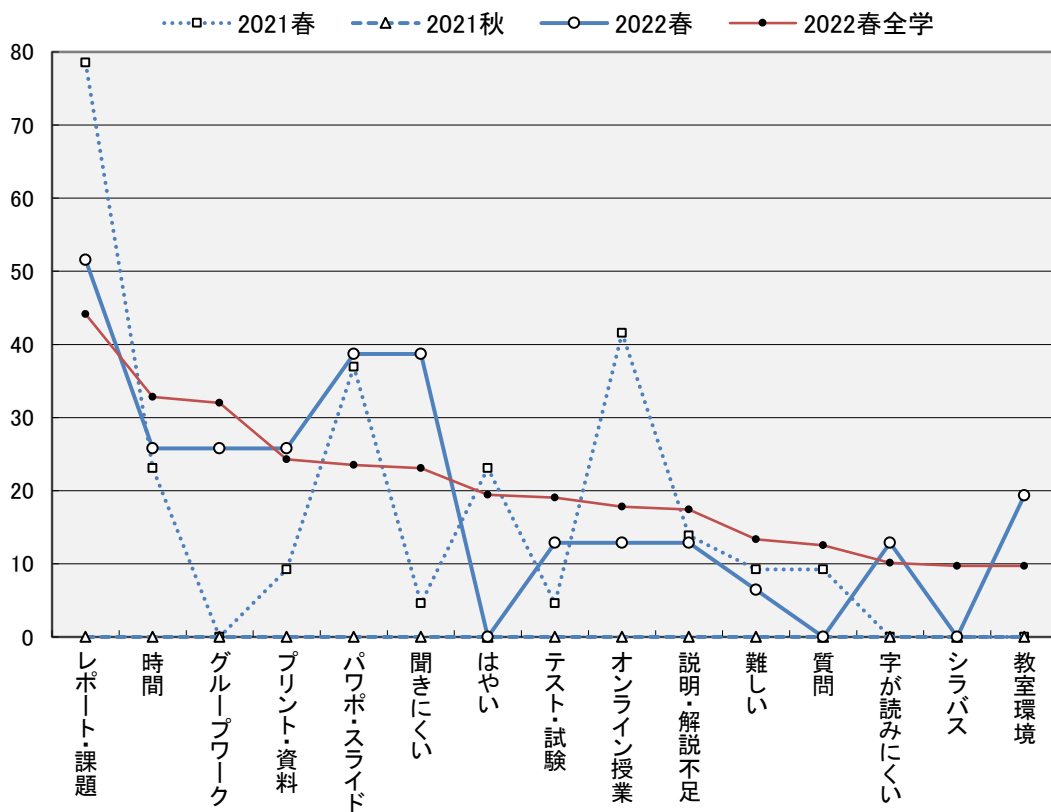


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
 【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

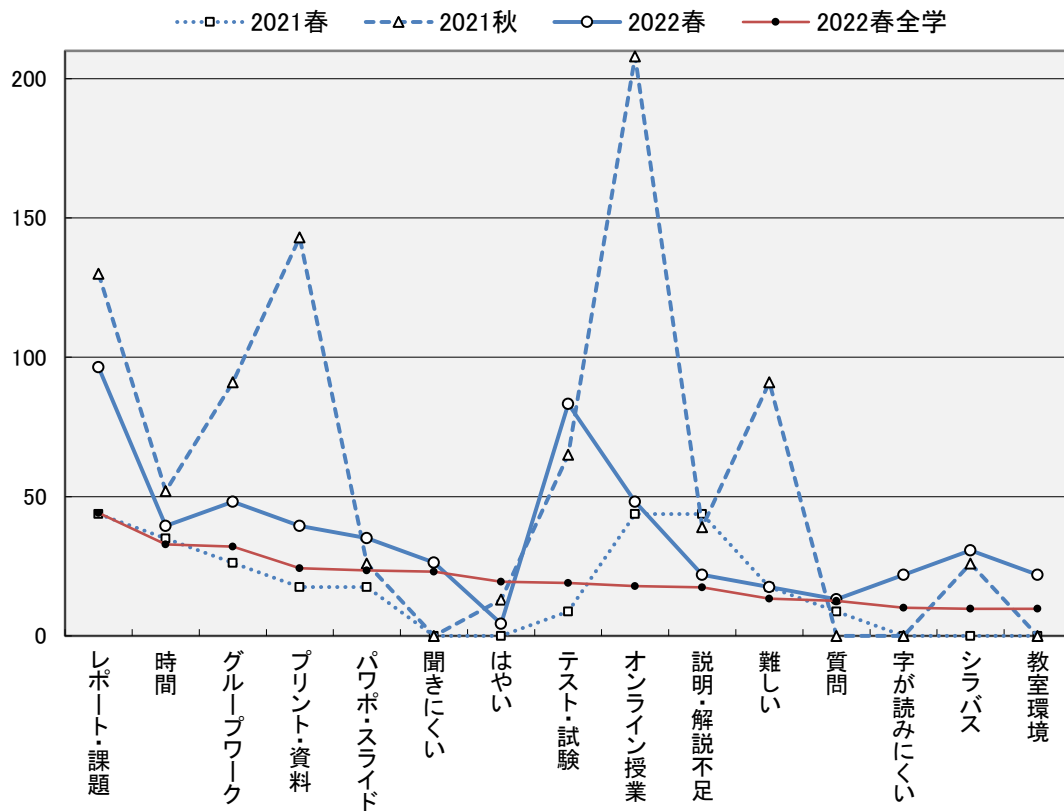


《地域創生学部》

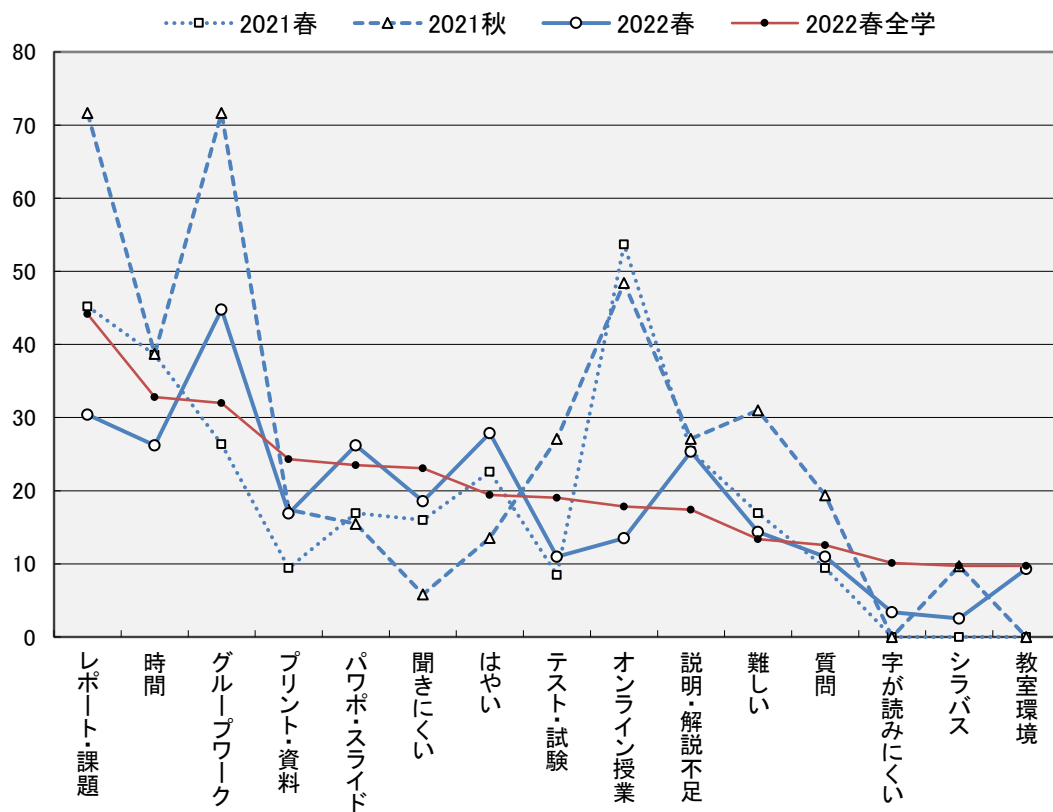


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【出現率前回比較】学部別

《社会共生学部》

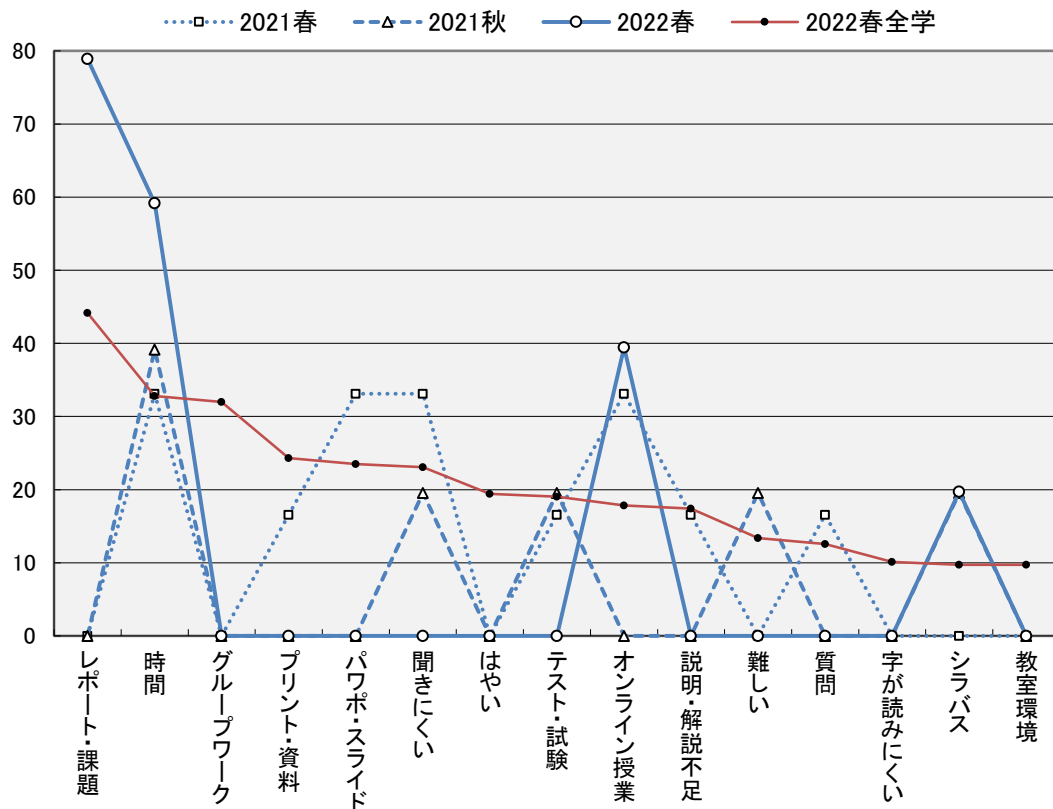


《Ⅰ類・第Ⅱ類科目(学部共通)・Ⅲ類》

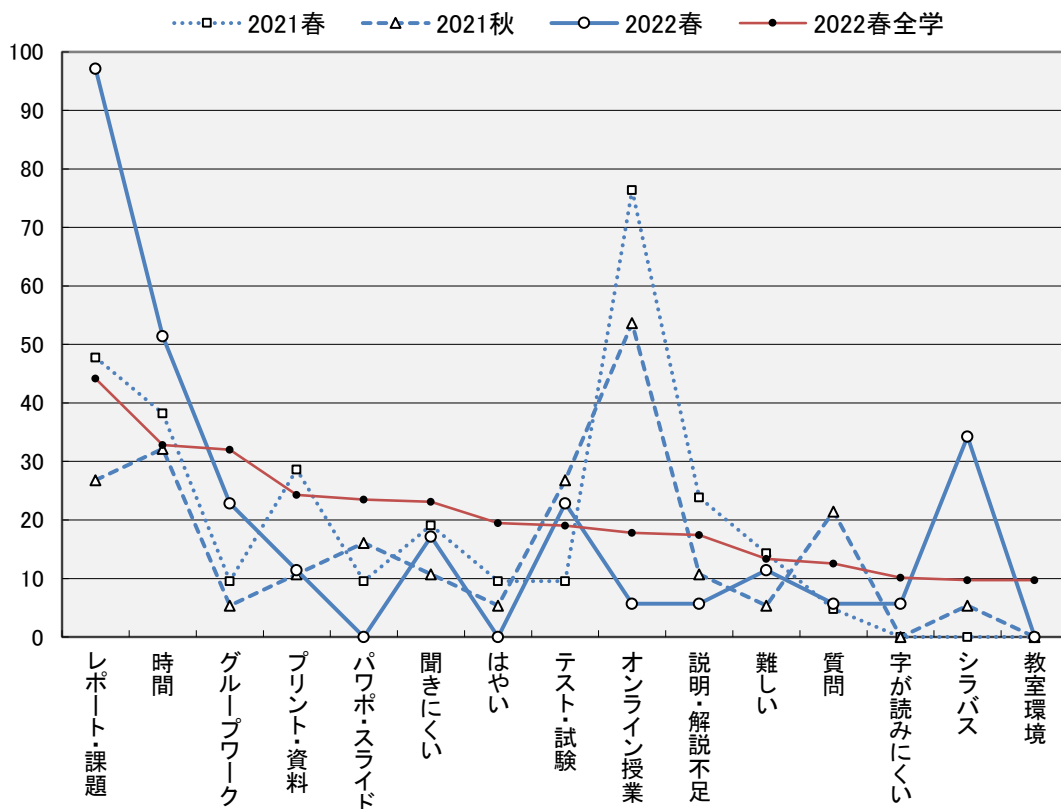


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《1~3人》

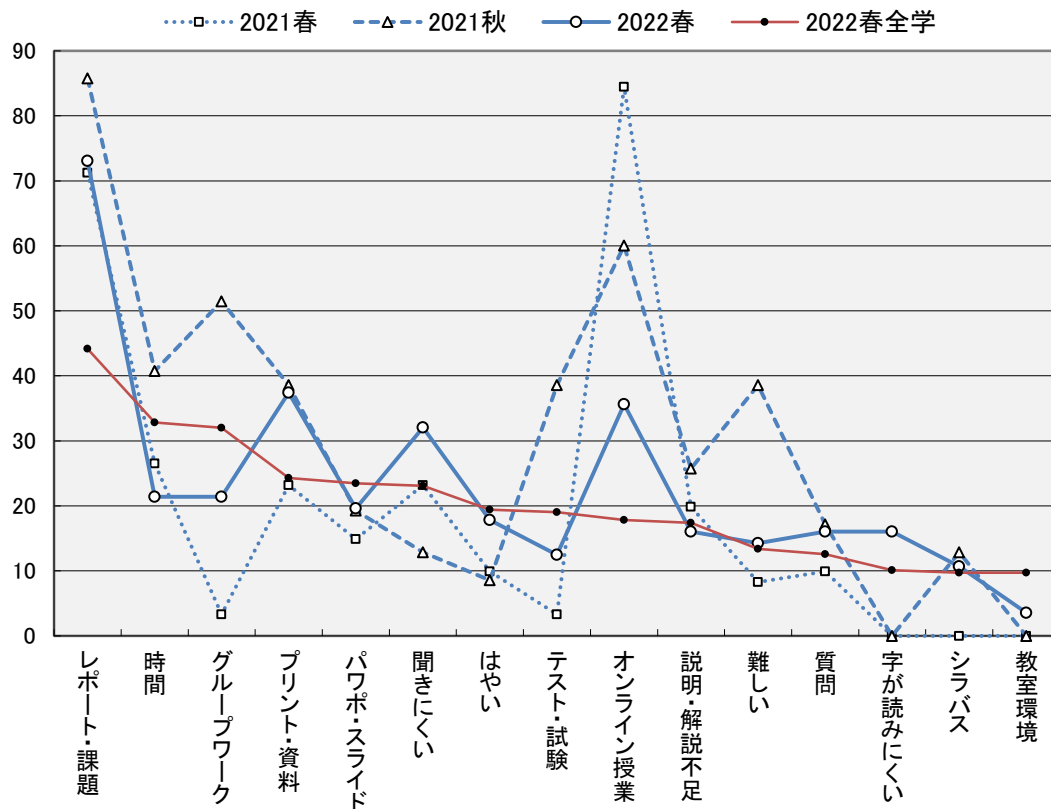


《4~9人》

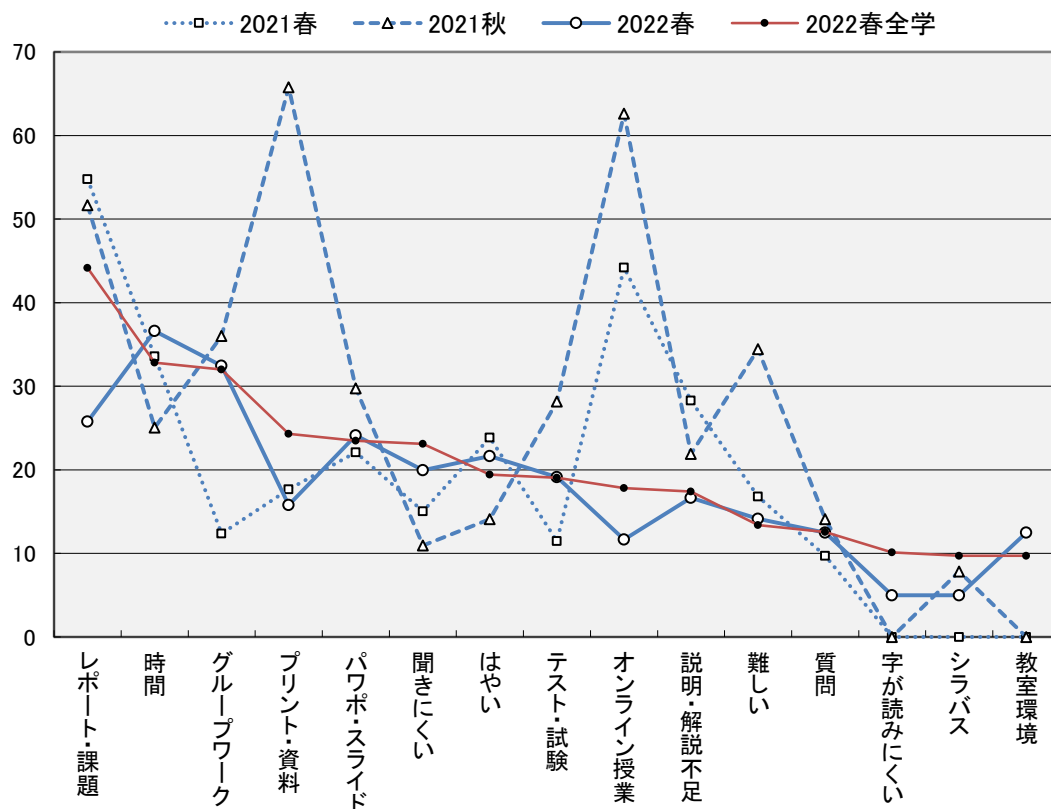


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
 【出現率前回比較】回答人数帯別

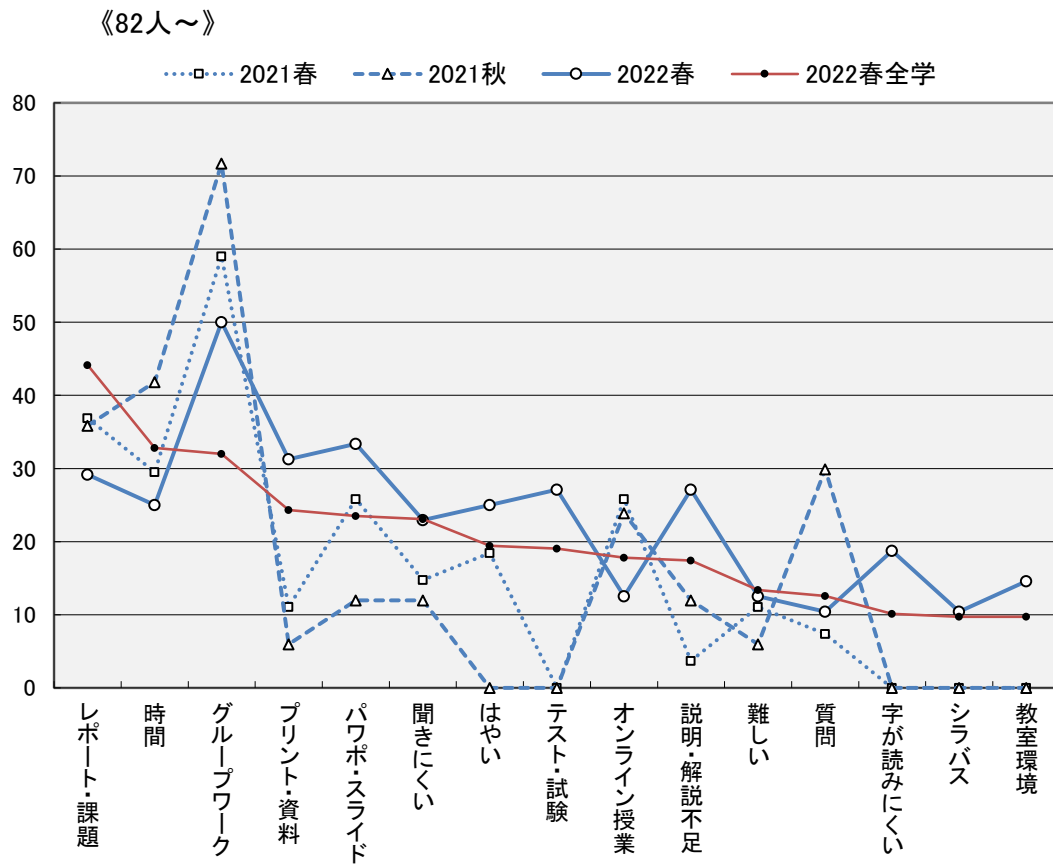
《10~27人》



《28~81人》

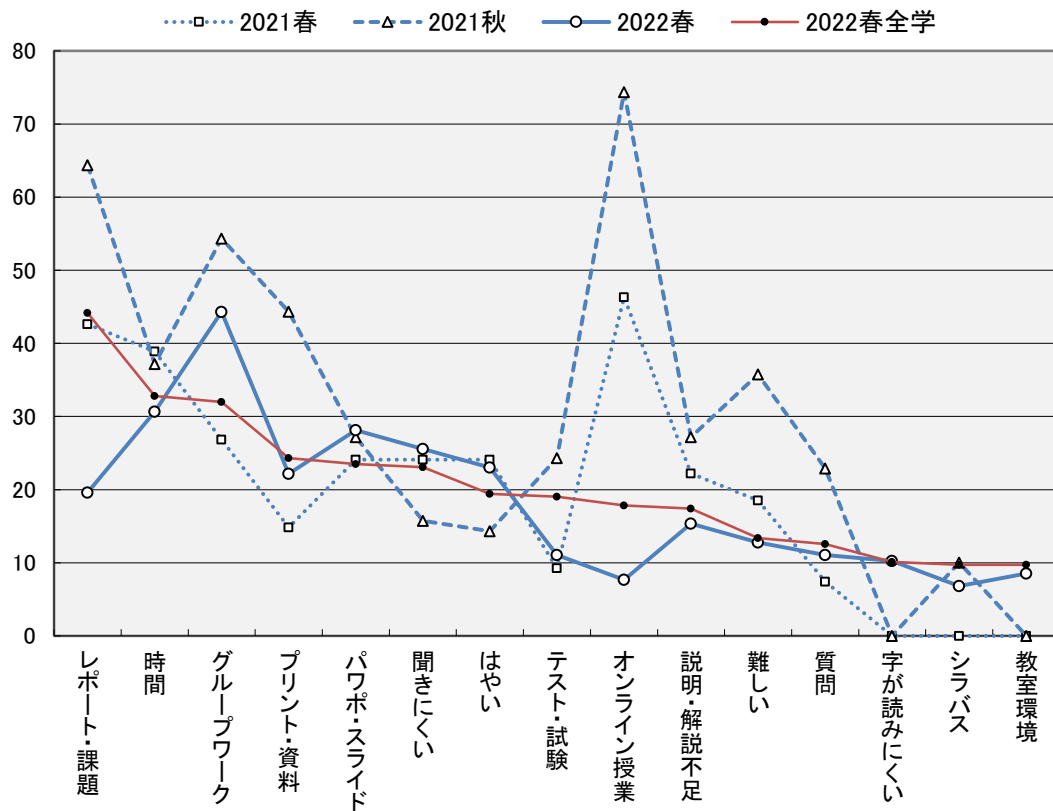


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
 【出現率前回比較】回答人数帯別

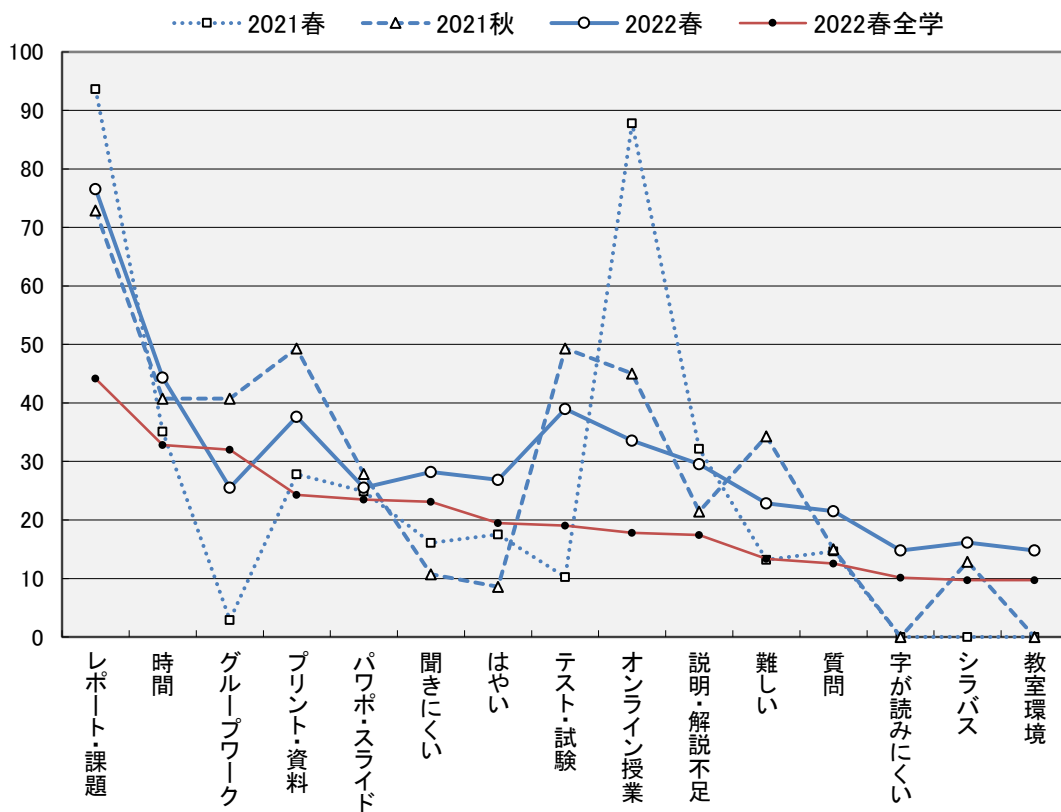


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【出現率前回比較】 学年別

《1年》



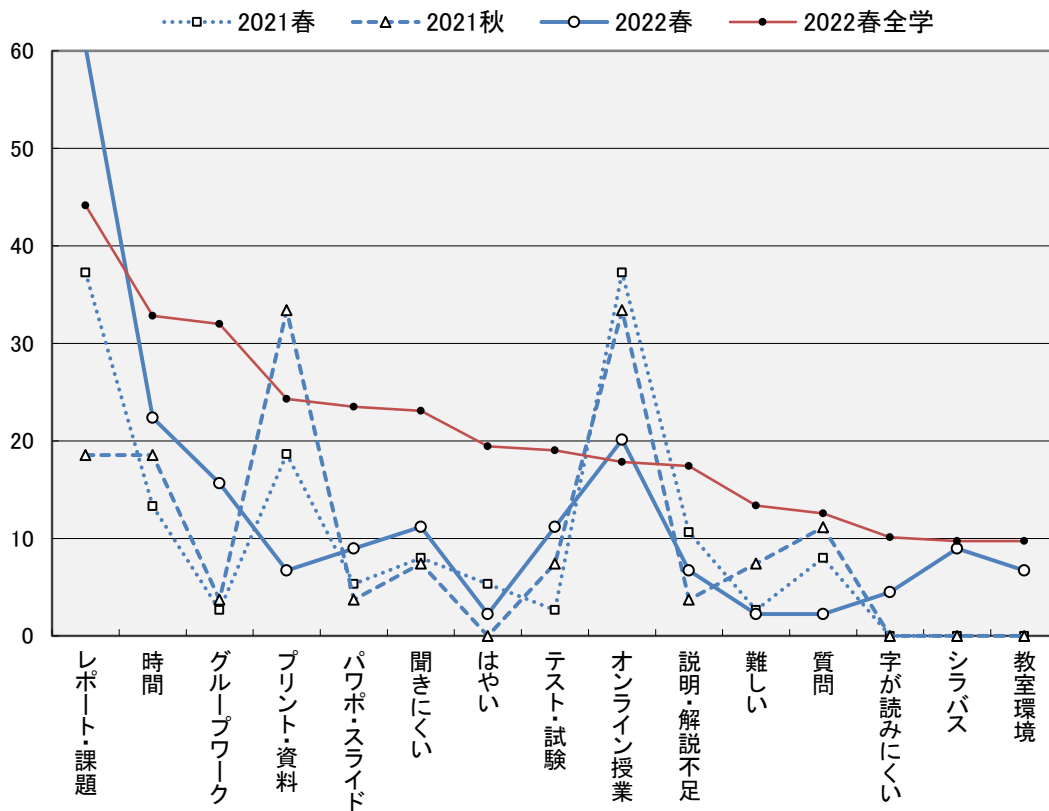
《2年》





自由記述回答 頻出キーワード <改善点>  
【出現率前回比較】学年別

《3年》



《4年》

